

牛頸小田浦窯跡群Ⅱ

－ 79地点の調査 －

大野城市文化財調査報告書 第73集

2007

大野城市教育委員会

うし くび お だ うら かま あと ぐん
牛頸小田浦窯跡群 II

— 79地点の調査 —

大野城市文化財調査報告書 第73集

2007

大野城市教育委員会



小田浦窯跡群79地点3・4号窯跡全景



(1) 3号窯跡出土須恵器



(2) 1・2号窯跡・1トレンチ出土瓦

序

小田浦窯跡群は、九州最大の須恵器窯跡群「牛頸窯跡群」の一角に位置する窯跡群です。

牛頸窯跡群では、これまで300基を超える窯跡が調査されてきましたが、ほとんどの窯跡は調査終了後に宅地開発などによって姿を消してしまい、遺跡を整備し、活用する取り組みについては、必ずしも十分ではありませんでした。

こうした状況の中、今回報告する小田浦窯跡群79地点は、将来の史跡整備を念頭に置きながら、文化庁の国庫補助事業として確認調査を実施したものです。その結果、古墳時代から飛鳥時代の窯跡を5基確認し、窯跡の構造などについても新たな知見を得ることができました。

今回の調査成果を通じて、大野城市を代表する文化財「牛頸窯跡群」の歴史的重要性がさらに厚みを増したことは間違いありません。

本書が多くの方々に活用され、窯跡群をめぐる課題解決の手掛かりとなれば幸いです。

最後になりましたが、周辺住民の方々、発掘調査・整理作業に携わられた方々には、多大なご協力を頂きました。心から感謝申し上げます。

平成19年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 古賀 宮 太

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が文化庁の国庫補助事業として確認調査を実施した、大野城市牛頸1丁目所在「小田浦窯跡群79地点」の報告である。なお小田浦窯跡群は、九州最大の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群の一角に位置しており、こうした歴史的事象とこれまでの報告にならって本書の表題を『牛頸小田浦窯跡群Ⅱ』とした。
2. 遺構写真は、林潤也が撮影した。
3. 空中写真は、(有)空中写真企画が撮影した。
4. 遺物写真は、(有)文化財写真工房（岡紀久雄、埋蔵文化財写真研究会会員）が撮影した。
5. 遺構図は、西堂将夫・林が作成した。
6. 遺構実測図中の方位は真北を表し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）を示す。
7. 地形測量図、トレンチ配置図については、(株)埋蔵文化財サポートシステムが作成した。
8. 遺物実測図は、城門義廣・井上愛子・西堂が作成した。
9. 拓本は、西堂・城門・北川貴洋・井上理香が作成した。
10. 製図は、渡部美香・井上（愛）が行った。
11. 観察表は、城門・西堂・林が作成した。
12. 炭化材樹種同定については、(株)古環境研究所に分析を委託し、分析原稿をⅣ章に掲載した。
13. 遺物番号は、通し番号とし、挿図と図版で番号を統一した。
14. 本書に掲載した遺跡分布図（第1図）は、国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』『不入道』を基に作成した。
15. 遺物の名称のうち、須恵器蓋杯については平城宮分類による呼称を用いる。
16. 本書に使用する土色名は、原則として『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
17. 本遺跡の遺物・実測図・写真は全て大野城市教育委員会にて管理・保管している。
18. 本書の執筆および編集は林が行った。

本文目次

I. はじめに

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	2
3. 調査の経過	4

II. 位置と環境

1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
3. これまでの調査と調査地点名の設定について	9

III. 調査の成果

1. 調査の方法・成果の概要	11
2. 遺構と遺物	
(1) 1号窯跡	15
(2) 2号窯跡	19
(3) 1トレンチ	21
(4) 2トレンチ	21
(5) 3トレンチ	23
(6) 3号窯跡	28
(7) 4号窯跡	45
(8) 5号窯跡	48
(9) 7トレンチ	49
(10) 8～11トレンチ	49
(11) 13・14トレンチ	50
(12) 20～22・25トレンチ	50
(13) 23トレンチ	50
(14) 24トレンチ	52
(15) 26トレンチ	52
(16) 27トレンチ	52
(17) 28トレンチ	53
(18) 29トレンチ	55
(19) 30トレンチ	57
(20) 31トレンチ	57
(21) 表面採集資料	57

Ⅳ. 自然化学分析の成果	58
1. 牛頸小田浦窯跡群における樹種同定	
Ⅴ. まとめ	61
1. 各窯跡の操業時期	
2. 調査成果の概要と課題	

表 目 次

第1表 小田浦窯跡群のこれまでの調査	9
第2表 小田浦窯跡群79地点3号窯跡灰原出土炭化材の樹種同定結果	60
第3表 遺物観察表①～⑧	63

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7
第2図 牛頸土地区画整備事業地内における調査地点名 (1/10,000)	10
第3図 今回の調査範囲 (1/2,500)	10
第4図 小田浦窯跡群74地点トレンチ配置図 (1/500)	13
第5図 1号・2号窯跡実測図 (1/100)	15
第6図 1号窯跡排煙部出土遺物実測図 (1) (1/4)	16
第7図 1号窯跡排煙部出土遺物実測図 (2) (1/4)	17
第8図 1号窯跡排煙部出土遺物実測図 (3) (1/4)	18
第9図 2号窯跡検出面出土遺物実測図 (1/3、1/4)	20
第10図 4トレンチ (2号窯) 出土遺物実測図 (1/3)	21
第11図 1トレンチ出土遺物実測図 (1) (1/3)	22
第12図 1トレンチ出土遺物実測図 (2) (1/3、1/4)	23
第13図 1トレンチ出土遺物実測図 (3) (1/4)	24
第14図 1トレンチ出土遺物実測図 (4) (1/4)	25
第15図 2トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	25
第16図 3トレンチ出土遺物実測図 (1) (1/3、1/4)	26
第17図 3トレンチ出土遺物実測図 (2) (1/4)	27
第18図 3号・4号窯跡実測図 (1/100)	28
第19図 3号窯跡実測図 (1/60)	29
第20図 3号窯跡土層図 (1/60)	31
第21図 3号窯跡焼成不良土器出土状況 (1/30)	34
第22図 3号窯跡排煙部実測図 (1/40)	35

第23図	3号窯跡排煙部柱状礫実測図 (1/6)	35
第24図	3号窯跡燃焼部出土遺物実測図 (1/3、1/4)	37
第25図	3号窯跡焼成部出土遺物実測図 (1) (1/3)	38
第26図	3号窯跡焼成部出土遺物実測図 (2) (1/3)	39
第27図	3号窯跡焼成部出土遺物実測図 (3) (1/3、1/4)	40
第28図	3号窯跡焼成部出土遺物実測図 (4：焼成不良須恵器) (1/3)	41
第29図	3号窯跡焼成部出土遺物実測図 (5：焼成不良須恵器) (1/3、1/4)	42
第30図	3号窯跡排煙部出土遺物実測図 (1) (1/3、1/4)	43
第31図	3号窯跡灰原上面出土遺物実測図 (1/3、1/4)	44
第32図	3号窯跡最終操業面トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	45
第33図	4号窯跡実測図 (1/60)	46
第34図	4号窯跡表土・灰原検出面出土遺物実測図 (1/3)	47
第35図	5号窯跡実測図 (1/100)	48
第36図	5号窯跡出土遺物実測図 (15・17・18トレンチ) (1/3)	48
第37図	9・11・13・24トレンチ出土遺物実測図 (1/3、1/4)	49
第38図	24トレンチ遺構配置図 (1/100)	50
第39図	24トレンチ壁面土層図 (1/60)	50
第40図	27トレンチ遺構配置図 (1/100)	51
第41図	27トレンチ SX01実測図 (1/40)	51
第42図	27トレンチ SX01出土遺物実測図 (1/3)	52
第43図	28トレンチ遺構配置図 (1/100)	53
第44図	28トレンチ南壁土層図 (1/60)	53
第45図	28トレンチ SX02実測図 (1/30)	53
第46図	29トレンチ遺構配置図 (1/100)	54
第47図	29トレンチ南壁土層図 (1/60)	54
第48図	29トレンチ SX04、SP01実測図 (1/30)	54
第49図	29トレンチ出土遺物実測図 (1/3、1/4)	55
第50図	26・30・31トレンチ壁面土層図 (1/60)	55
第51図	表採遺物実測図 (1/4)	56

図 版 目 次

巻頭図版1 小田浦窯跡群79地点全景

巻頭図版2 (1) 3号窯跡出土須恵器

(2) 1・2号窯跡、1トレンチ出土瓦

図版1 (1) 小田浦窯跡群79地点遠景

(2) 1・2号窯跡検出状況

図版2 (1) 1号窯跡燃焼部検出状況 (3トレンチ) (北東から)

(2) 1号窯跡排煙部遺物出土状況 (6トレンチ) (北東から)

(3) 1号窯跡排煙部検出状況 (6トレンチ) (北から)

図版3 (1) 1・2号窯跡検出状況 (3・4トレンチ) (北東から)

(2) 2号窯跡燃焼部検出状況 (4トレンチ) (北から)

(3) 2号窯跡排煙部検出状況 (6トレンチ) (北から)

図版4 (1) 3・4号跡窯全景 (東から)

(2) 3号窯跡排煙部 (北西から)

図版5 (1) 3・4号窯跡検出状況 (東から)

(2) 3号窯跡排煙部検出状況 (西から)

(3) 3号窯跡土層 (A-A') (東から)

図版6 (1) 3号窯跡土層 (B-B') (東から)

(2) 3号窯跡土層 (C-C') (南東から)

(3) 3号窯跡天井部遺存状況 (東から)

図版7 (1) 3号窯煙道部付近縦断面土層 (北から)

(2) 3号窯跡溝部土層 (南西から)

(3) 3号窯跡燃焼部土師器甕出土状況 (東から)

図版8 (1) 3号窯跡燃焼部遺物出土状況 (東から)

(2) 3号窯跡焼成部遺物出土状況 (身・蓋セット) (北東から)

(3) 3号窯跡焼成部上端遺物出土状況 (横瓶) (南から)

図版9 (1) 3号窯跡焼成部左側焼成不良須恵器出土状況 (北東から)

(2) 3号窯跡焼成部左側焼成不良須恵器出土状況 (礫除去) (北東から)

(3) 3号窯跡焼成部右側焼成不良須恵器出土状況 (南から)

図版10 (1) 3号窯跡燃焼部左側壁 (北東から)

(2) 3号窯跡燃焼部右側壁 (南東から)

(3) 3号窯跡焼成部右側壁 (貼壁) (南から)

図版11 (1) 3号窯跡焼成部～排煙部 (東から)

(2) 3号窯跡煙道部1 (東から)

(3) 3号窯跡煙道部2 (東から)

- 図版12 (1) 3号窯跡煙道部3 (東から)
(2) 3号窯跡煙道部4 (東から)
(3) 3号窯跡煙道部5 (南東から)
- 図版13 (1) 3号窯跡煙道部6 (北西から)
(2) 3号窯跡煙道部7 (南東から)
(3) 3号窯跡煙道部8 (南東から)
- 図版14 (1) 3号窯跡煙道部9 (西から)
(2) 3号窯跡当初操業面確認トレンチ (東から)
(3) 3号窯跡当初操業面確認トレンチ土層 (南から)
- 図版15 (1) 3号窯跡完掘状況 (西から)
(2) 4号窯跡排煙部検出状況 (東から)
(3) 4号窯跡排煙部土層 (南から)
- 図版16 (1) 4号窯跡煙道部土層 (西から)
(2) 4号窯跡排煙部完掘状況 (東から)
(3) 3号窯跡埋め戻し状況 (北東から)
- 図版17 (1) 3・4号窯跡調査終了状況 (東から)
(2) 5号窯跡灰原検出状況 (17トレンチ) (北西から)
(3) 5号窯跡燃焼部検出状況 (15トレンチ) (北東から)
- 図版18 (1) 5号窯跡焼成部検出状況 (19トレンチ) (南西から)
(2) 5号窯跡排煙部検出状況 (18トレンチ) (北東から)
(3) 調査地点から四王寺山を望む (南西より)
- 図版19 (1) 調査着手前 (北から)
(2) 作業風景 (12トレンチ)
(3) 1トレンチ (北西から)
- 図版20 (1) 2トレンチ土層 (北東から)
(2) 7トレンチ (北東から)
(3) 8トレンチ (北から)
- 図版21 (1) 9トレンチ (北西から)
(2) 10トレンチ (南から)
(3) 11トレンチ (南から)
- 図版22 (1) 13トレンチ (南から)
(2) 14トレンチ (北から)
(3) 16トレンチ (南から)
- 図版23 (1) 20トレンチ拡張部 (北東から)
(2) 21トレンチ (南から)
(3) 22トレンチ (北から)

- 図版24 (1) 23トレンチ (北から)
(2) 24トレンチ (北東から)
(3) 24トレンチ土層 (北西から)
- 図版25 (1) 25トレンチ (北東から)
(2) 26トレンチ (南から)
(3) 27トレンチ SX01検出状況 (北西から)
- 図版26 (1) 27トレンチ SX01土層 (北西から)
(2) 28トレンチ (西から)
(3) 28トレンチ SX02土層 (東から)
- 図版27 (1) 29トレンチ遺構検出面状況 (西から)
(2) 29トレンチ SX04検出状況 (西から)
(3) 29トレンチ SX04土層 (北西から)
- 図版28 (1) 30トレンチ (東から)
(2) 31トレンチ (南東から)
(3) 現地説明会 (2005.3.5)
- 図版29・30 1号窯跡出土遺物
- 図版31 2号窯跡出土遺物
- 図版32 1トレンチ出土遺物
- 図版33 1・3トレンチ出土遺物
- 図版34 3トレンチ出土遺物、3号窯跡出土遺物 (1)
- 図版35～38 3号窯跡出土遺物 (2)～(5)
- 図版39 11・27トレンチ出土遺物、表採遺物
- 図版40・41 ヘラ記号
- 図版42 炭化材分析写真

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回調査を行った小田浦窯跡群79地点に窯跡の存在が知られるようになったのは、昭和50年代にさかのぼる。このころ福岡県文化財保護指導委員であった前田軍治氏によって、須恵器の散布が確認され、昭和55年に刊行された『牛頸中通遺跡群』の中では、分布図上に小田浦窯跡群の一角としてドットが落とされている。

その後、小田浦窯跡群が分布する地域の大部分は1983年からの区画整理事業によって開発され、この際に多くの須恵器窯跡などが調査されたが、当地点周辺は開発区域から外れていた。

その一方で、こうした区画整理事業等によって牛頸地区一帯での人口増加は順調に進み、既設の平野中学校では増加する生徒数に対応できないという判断が示された。これにより分離校を建設する方針が決定され、平成4年にはその第一候補地として当該地周辺が選定された。この計画に基づいて、平成6・7年度には、大野城市土地開発公社が約35,000㎡の用地を買収し、中学校建設の計画が進められた。

しかしながら、その後状況は急激に変化し、当初見込んでいた程の生徒数の大幅な増加はない見通しとなった。そこで、既存の平野中学校を増築することで対応する方向が検討され、買収地の用途についても、幅広い視野で議論されることとなった。

こうした状況の中、本市の文化財の特色である牛頸窯跡群の保存活用を目指していた教育委員会は、その候補地としての可能性を探るため、当該地を試掘調査することとした。試掘調査は平成11年8月19日～20日、平成12年3月15日～24日の2度に分けて行い、立木の間を縫うように計33条のトレンチを掘削した。その結果、一部で窯壁、灰原等が確認され窯跡の存在が明確になった。

この試掘調査の結果を踏まえて、社会教育課（現ふるさと文化財課）としては、平成14年度に市役所内に設置された「平野中学校分離校用地等利用検討プロジェクトチーム」の検討会で、窯跡の保存活用案を提案した。この検討委員会では、明確な結論は出なかったが、保存活用への方向性がうたわれ、これらの計画を進める中で、用地内に存在する窯跡の数、規模、遺存状況等のより正確な把握が必要となった。

こうした状況を受けて、平成16年3月8日～18日には、保存整備を前提とした確認調査（第1次調査）を実施した。この調査は、平成11年度の試掘調査の結果を踏まえた上で、窯跡の正確な位置や規模の把握を目的とし、11条のトレンチを掘削した。この結果2基の窯跡（1・2号窯跡）が確認され、遺物としては7世紀前半の須恵器のほか、瓦も一定量出土した。

続く平成16年度には、遺跡の範囲確認、窯跡の遺存状況、窯構造等の把握を目指して、9月21日～平成17年3月28日に確認調査（第2次調査）を実施した。この中で、さらに2基（3・4号窯跡）の窯跡を確認し、うち1基は最終操業面まで調査を行ない、窯体構造等の把握を試みた。

続く平成17年度には、さらなる窯跡の広がり、および関連遺構の有無の確認を目的として、12月20日～平成18年3月13日に確認調査（第3次調査）を実施した。この結果、窯跡1基（5号窯跡）と、土坑、ピットを検出した。

整理作業は、当初平成15・16年度調査分を平成17年度に実施し、平成17年度調査分以降についてはその後実施する予定であったが、計画を変更し、平成17・18年度にまとめて行い、報告書は平成18年度末に刊行することとなった。

なお、これらの発掘調査の成果を踏まえて、平成16年度3月議会において、「（仮称）牛頸須恵器の里づくり構想」と牛頸窯跡群の国史跡指定化に向けての方針が示されている。

2. 調査体制

平成15～17年度（発掘調査・整理作業）

大野城市教育委員会	教 育 長	堀 内 貞 夫（～平成15年6月）
		古 賀 宮 太（平成15年6月～）
	教 育 部 長	鬼 塚 春 光（～平成17年3月）
		小 嶋 健（平成17年4月～）
	社会教育課長	秋 吉 正 一（～平成17年3月）
		水 野 邦 夫（平成17年4月～）
	文化財担当係長	舟 山 良 一
	主 査	徳 本 洋 一
		石 木 秀 啓（平成11年度試掘調査担当）
		緒 方 一 幹（平成16年4月～、庶務担当）
		丸 尾 博 恵
	主 任 技 師	林 潤 也（調査・整理担当）
		早 瀬 賢（平成16年4月～）
	主 任 主 事	大 道 和 貴（～平成16年3月、庶務担当）
	嘱 託	平 島 義 孝（～平成16年3月）
		岸 見 泰 宏（～平成16年3月）
		島 田 拓（～平成15年6月）
		上 田 恵（～平成15年4月）
		西 堂 将 夫（～平成18年3月）
		一 瀬 智（平成15年12月～17年7月）
		井 上 愛 子（平成16年4月～）
		北 川 貴 洋（平成16年4月～）
		粟 津 剛 史（平成16年4月～）

平成18年度（整理作業）

大野城市教育委員会	教 育 長	古 賀 宮 太
	教 育 部 長	小 嶋 健
	ふるさと文化財課長	舟 山 良 一
	文化財担当係長	中 山 宏（庶務担当）
主 査	徳 本 洋 一	
	石 木 秀 啓	
	丸 尾 博 恵	
主 任 技 師	林 潤 也（整理担当）	
	早 瀬 賢	
嘱 託	井 上 愛 子	
	北 川 貴 洋	
	城 門 義 廣	
	岡 田 裕 之（5月～）	
	粟 津 剛 史（～6月）	
	能 塚 由 紀（8月～）	

発掘調査作業員

小川ケイ子	三善公子	山下隆子	団野ハマ子	篠崎繁美	東島真弓	安里由利子
川村真樹子	中山文子	槇坂陽子	村岡真由美	大浦旗江	清成健悟	大島五津子
原口美奈子	稲富久子	織田 徹	吉村秀子	松尾純子	末永 勝	宮原ゆかり
野崎美智子	田中悦子	田野和代	高木由佳	松田和美	戸渡京子	倉住孝枝
山田賢治	貞包由紀子	坂本泰子	渡辺久美子	小林敏子	小林久美子	西村清子
広渡隆子	大藺英美	深野人美	船越桃子	穴井和子	仲前富美子	井口るみ子
溝口 忍	飯田三治					

整理作業員

松岡信子	町井裕子	鬼塚穂子	白井典子	村山律子	渡部美香	井上理香
中野浩子	仲村美幸					

なお、今回の発掘調査・報告書作成におきましては、下記の方々をはじめ、多くの方々に様々なご教示、ご協力をいただきました。感謝申し上げます。（肩書きは当時のもの）

玉田芳英（文化庁） 中村 浩（大谷女子大学） 岩永省三・辻田淳一郎・岡田裕之（九州大学）
佐田茂（佐賀大学） 菱田哲郎（京都府立大学） 伊崎俊秋・新原正典・小池史哲・重藤輝行（福岡県教育委員会） 中村昇平（春日市教育委員会） 城戸康利・宮崎亮一・長直信（太宰府市教育委員会） 田中好美・山田稔・冷川昌彦・岩瀬正信・平田善積（大野城市文化財保護審議委員）

3. 調査の経過

平成15年度確認調査（第1次調査）

平成16年	3月8日	人力によりトレンチ掘削開始、1号窯跡一部、灰原検出
	3月11日	2号窯跡一部検出
	3月15日	2号窯跡排煙部検出
	3月16日	全景写真撮影（気球）、地形測量開始
	3月18日	現地作業終了

平成16年度確認調査（第2次調査）

平成16年	9月21日	樹木伐採開始
	10月25日	人力によりトレンチ掘削開始
	11月1日	3号窯跡焚口検出
	11月4日	4号窯跡焚口検出
	11月25日	3号・4号窯跡検出完了、検出状況写真撮影
	12月1日	3号窯跡主軸設定し、燃焼部から掘り下げ開始
	12月2日	3号窯跡灰原上面より土師器甕出土、排煙部掘り下げ開始
	12月6日	3号窯跡煙道部より柱状礫確認
	12月15日	3号窯跡排煙部および溝部ほぼ完掘
	12月20日	3号窯跡焼成部最終作業面より焼成不良須恵器出土
平成17年	1月14日	3号窯跡焼成不良須恵器写真撮影
	1月24日	4号窯跡排煙部のみ掘り下げ
	1月27日	3号窯跡最終作業面までほぼ完掘、中村浩氏（大谷女子大学）来跡
	1月28日	平成15年度トレンチ拡張開始、大野城市長来跡
	2月3日	玉田芳英調査官（文化庁）、新原・小池・伊崎・重藤氏（福岡県教育委員会）より現地指導を受ける
	2月9日	全景写真撮影（気球）
	2月17日	3号窯跡最終作業面トレンチ掘削開始
	2月22日	1・2号窯跡（3～6トレンチ）検出写真撮影、大野城市文化財保護審議委員来跡
	3月2日	発掘調査成果記者発表（朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、西日本新聞、NHK、ケーブルステーション福岡 取材）
	3月4日	地形測量開始
	3月5日	現地説明会開催（約180名参加）
	3月10日	3号窯跡土嚢を用いて埋め戻し開始
	3月28日	発掘機材搬出し、現地調査完了

平成17年度確認調査（第3次調査）

12月20日	機材搬入・調査開始
1月16日	5号窯跡焚口検出
1月23日	5号窯跡排煙部検出
2月21日	文化財保護審議委員（佐田委員、岩瀬委員）来跡
12月20日	機材搬入・調査開始
1月16日	5号窯跡焚口検出
1月23日	5号窯跡排煙部検出
2月22日	27トレンチ SX01掘り下げ開始
2月28日	28・29トレンチ全景写真撮影
3月13日	埋め戻し完了、機材等撤収

Ⅱ．位置と環境

1．地理的環境

小田浦窯跡群79地点は、大野城市牛頸1丁目2392-1他に所在し、大野城市南端の牛頸山から北側に派生する丘陵北～西斜面（標高約86～94m）に位置する。この牛頸山（標高447.9m）は、背振山系の一角をなしており、地質的には花崗岩類を基盤とし、その風化土が被覆した状況を呈している。この北麓を、牛頸川、足洗川などの中小の河川が開析することによって、無数の丘陵が形成され、その丘陵斜面に数多くの須恵器窯跡が分布している。この窯跡群は、「牛頸窯跡群」と呼ばれ、大野城市牛頸地区を中心に春日市の一部から太宰府市の一部（南北約4.0km、東西約4.6km）まで広がっている。小田浦窯跡群は、この牛頸窯跡群の中でも、やや牛頸山に近く、南西側に位置している。

2．歴史的環境

大野城市南部を中心とした牛頸山北麓地域では、旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が数多く確認されている（第1図）。まず、旧石器時代には、出口遺跡で剥片尖頭器、門田遺跡、柏田遺跡、向谷北遺跡などでナイフ形石器や細石刃核が出土しており、当該期から人間活動の痕跡が確認できる。

続く縄文時代には、遺物量の多少はあれ、門田遺跡、深原遺跡、観音山古墳群、柏田遺跡、原遺跡、九州大学筑紫地区遺跡、塚原遺跡、本堂遺跡などで、草創期から晩期にいたるまでの遺物が出土している。特に、門田遺跡から出土した草創期の爪形文土器、深原遺跡や本堂遺跡の早期押型文土器、柏田遺跡の後期中葉の竪穴住居跡などは、周辺地域を見渡しても特に重要な資料といえよう。

弥生時代になると、奴国の中心域とされる須玖岡本遺跡群からは南側に外れるものの、門田遺跡、辻田遺跡、天神の木遺跡、原遺跡、中白水遺跡、向谷北遺跡、向谷南遺跡、惣利東遺跡など、質・量とも充実した遺跡が多く認められる。中でも、門田遺跡・辻田遺跡は大規模な集落遺跡であり、前期末の袋状貯蔵穴群、中期前葉～後期初頭の甕棺墓群、後期終末のドングリ貯蔵穴群などが確認されたほか、遺物としては、多様な木製品（鋤類、網杵、筥、竪杵、斧柄、盤、杓子、琴など）が特に注目されている。

続く古墳時代には、九州最大の須恵器窯跡群である「牛頸窯跡群」の操業が開始される。この牛頸窯跡群は、6世紀中頃から9世紀中頃に操業した窯跡群で、これまで300基あまりが調査されている。最古相の窯跡については、現時点では窯跡群の北端に近い野添遺跡群において確認されており、6世紀前半の野添6号窯跡、次いで6世紀後半の野添9号窯跡が古く位置づけられている。その後、6世紀末～7世紀前半には、本堂遺跡、梅頭遺跡、惣利東遺跡、浦ノ原窯跡群、神ノ前窯跡、後田窯跡群、ハセムシ窯跡群、中通窯跡群など、当遺跡を含めて、窯跡の分布は飛躍的に広がり、その数も爆発的に増加している。また、この時期の特徴として、神ノ前窯跡や月ノ浦窯跡など須恵器とともに瓦を焼成した「瓦陶兼業窯」が存在する点が挙げられ、その供給先の一つとされる福岡市那珂遺跡（那津官家推定地）は、当遺跡の北東約8.5kmに所在する。

また、当該期の集落は、上園遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、春日平田遺跡、春日平田西遺跡、惣利西遺跡などで確認されている。その立地や粘土塊の出土などから、多くは須恵器工人の集落あるいは工房跡と考えられている。古墳については、当遺跡内に所在する小田浦古墳群のほか、後田古墳群、向谷古墳群、西浦古墳群、観音山古墳群、カクチガ浦遺跡群など、多くの後期古墳が存在し、窯跡群で焼成された須恵器の一部は、これらの古墳に供献されたと推測される。またこれらの古墳群の中には、被葬者を須恵器工人と想定しうる例もあり、小田浦古墳群や後田古墳群からは、須恵器窯の掘削に使用したと考えられるU字型鋤先が出土している。さらに平成14年度に調査を行なった梅頭遺跡1次調査1号窯跡では、廃窯後に鉄刀、鉄鏃等を副葬し「墓」として転用した事例も確認されている。

続く奈良時代にも、牛頸窯跡群は盛んに操業を続け、牛頸ダム周辺（井手窯跡群、道ノ下窯跡群、足洗川窯跡群など）や、石坂窯跡群、後田窯跡群、ハセムシ窯跡群などで、特に群集して窯跡が発見されている。その分布を巨視的に見た場合、前代と比べ、やや南側（牛頸山側）に比重が移る傾向が認められ、その要因として、薪（燃料）の枯渇があったと想定されている。

このように牛頸窯跡群は、9世紀初頭前後まで、盛んに操業を行なっているが、その一方、9世紀前半以降については、ほとんど確認されていない。現時点での最終末期の窯としては、窯跡群最奥部に位置する石坂窯跡群E地点3号窯跡が挙げられる。この窯は9世紀中頃に位置づけられ、年代観や窯構造、器種組成において、これまでの窯とは隔絶した感もあり、連続した系譜上にあるのか否か、課題は多いといえる。



第1図 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

〔春日市〕

- 1. 日拝塚古墳
- 2. 柏田遺跡
- 3. 中白水遺跡
- 4. 門田遺跡
- 5. 天神の木遺跡
- 6. 原遺跡
- 7. 百堂遺跡
- 8. ウトグチ遺跡 A 地点
- 9. ウトグチ遺跡 C 地点
- 10. ウトグチ遺跡 B 地点
- 11. 整理池遺跡
- 12. 天神山水城跡
- 13. 大土居水城跡
- 14. 西浦古墳群
- 15. 浦ノ原窯跡群
- 16. 惣利 1 号窯跡
- 17. 惣利西遺跡
- 18. 惣利東遺跡
- 19. 惣利遺跡
- 20. 惣利北遺跡
- 21. 向谷北遺跡
- 22. 向谷古墳群
- 23. 平田北遺跡
- 24. 円入遺跡
- 25. 春日平田遺跡
- 26. 春日平田西遺跡
- 27. 春日平田東遺跡

〔那珂川町〕

- 28. 中原塔ノ元遺跡
- 29. カイ子遺跡
- 30. カクチガ浦遺跡
- 31. 観音山古墳群
- 32. 楠木遺跡群
- 33. 平蔵遺跡
- 34. 地別当遺跡

〔大野城市〕

- 35. 後田遺跡群（窯跡群）
- 36. **小田浦遺跡群（窯跡群）**
- 37. 石坂窯跡群
- 38. 大谷窯跡群
- 39. 月ノ浦窯跡
- 40. 足洗川窯跡群
- 41. 笹原窯跡群
- 42. 長者原窯跡群
- 43. 井手窯跡群
- 44. 道ノ下窯跡群
- 45. ハセムシ窯跡群
- 46. 中通遺跡群（窯跡群）
- 47. 畑ヶ坂遺跡
- 48. 塚原遺跡
- 49. 日ノ浦遺跡
- 50. 屏風田遺跡
- 51. 華無尾遺跡
- 52. 華無尾窯跡
- 53. 平田窯跡群
- 54. 野添遺跡群
- 55. 大浦窯跡群
- 56. 上大利小水城
- 57. 梅頭遺跡
- 58. 本堂遺跡
- 59. 上園遺跡
- 60. 出口窯跡
- 61. 池田・池の上遺跡

〔太宰府市〕

- 62. 島本遺跡
- 63. 神ノ前遺跡
- 64. 篠振遺跡
- 65. 宮ノ本遺跡

3. これまでの調査と調査地点名の設定について

小田浦遺跡群（窯跡群）は、これまで大きく2度の発掘調査が行なわれてきた。1回目は、宅地造成に起因する調査で、昭和51年度に小田浦窯跡調査団（団長 立正大学 坂詰秀一氏）によって実施された。1基の古墳と、A地点、B地点で計4基の窯跡を調査している。

2回目の調査は、牛頸土地区画整理事業に伴うもので、昭和58年度から61年度にかけて大野城市教育委員会が実施した。この際、事業地内に1～67地点の試掘調査地点（第2図）を設定（1976年度調査範囲も事業地内に含まれるため、A地点を38地点、B地点を39地点、古墳確認地点を37地点として再設定）した上で、遺構が検出された地点の発掘調査を実施した。遺跡名は、この際の遺跡の広がりなどを考慮し呼称したもので、各地点を小田浦窯跡群、後田窯跡群、月ノ浦窯跡、塚原遺跡群、畑ヶ坂遺跡、日ノ浦遺跡などに分離し、整理・報告を行っている。

このうち、小田浦窯跡群・古墳群は、28・33・34・37～40・50・51・57地点を指し、報告時には「小田浦窯跡群50地点」といった表記をしている。

さらにその後、区画整理事業地の周辺において、墓地造成、最終処分場建設などの要因で数度の発掘調査を実施している。この際の調査地点名は、区画整理地事業地内遺跡からの続き番号を用いるのが通例となっており、こうした経緯のもと、今回の調査地点名を「小田浦窯跡群79地点」と呼称した。

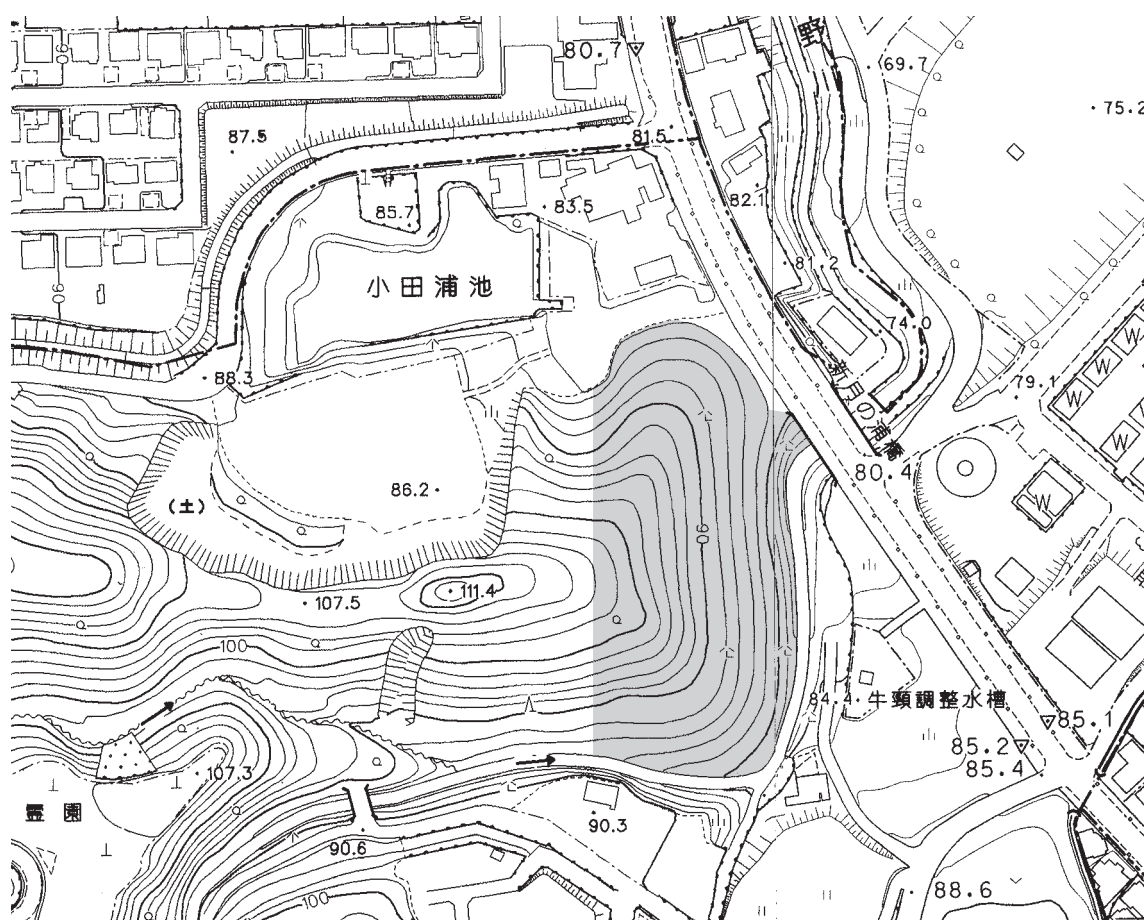
なお、区画整理事業後に設定した68～78地点は、いずれも後田窯跡群に含まれており、小田浦窯跡の調査は区画整理事業以来となっている。

調査地点名	調査年度	内 容	報 告
小田浦窯跡群28地点	1986	灰原のみ（Ⅳ期）、瓦多量出土	39集
小田浦窯跡群33地点	1983	窯跡1基（Ⅳ期）	35集
小田浦窯跡群34地点	1983	窯跡1基（Ⅵ期）	35集
小田浦窯跡群37地点	1976・85・86	窯跡2基、Ⅱ号窯は空焚き時に崩落か（Ⅰ号窯はⅣ期、Ⅱ号窯もⅣ期か）、円墳3基	35・36・40集
小田浦窯跡群38地点	1976	窯跡2基、Ⅱ号窯は空焚き時に崩落か（Ⅰ号窯はⅣ期、Ⅱ号窯もⅣ期か）	40集
小田浦窯跡群39地点	1976	窯跡2基（Ⅰ号窯はⅣ期、Ⅱ号窯はⅥ期）	40集
小田浦窯跡群40地点	1986	窯跡2基、Ⅱ号窯は未使用（Ⅰ号窯はⅣ期、Ⅱ号窯は不明）	35集
小田浦窯跡群50地点	1984	窯跡2基（Ⅰ号窯はⅤ期、Ⅱ号窯はⅥ期か）	35集
小田浦窯跡群57地点	1986	窯跡1基（Ⅶ期）	35集
小田浦窯跡群79地点	2003～05	窯跡5基	本報告

第1表 小田浦窯跡群のこれまでの調査



第2図 牛頸土地区画整理事業地内における調査地点名 (1/10,000)



第3図 今回の調査範囲 (1/2,500)

Ⅲ．調査の成果

1. 調査の方法・成果の概要

「調査に至る経緯」で示したとおり、当該窯跡は、将来の保存整備を目的とした調査であったため、窯跡の分布範囲・基数の確認、遺存状況・窯体構造の把握、および時期認定を目的とした。

平成15年度の調査（第1次調査）は、平成11年度の試掘調査の結果を踏まえて、周辺の立木を伐採し、計11条のトレンチを設定、人力で掘削した。調査の手順としては、まず丘陵裾部に等高線に沿った1・2トレンチを掘削し、その結果、灰原を検出した。これをもとに、その上方に3トレンチを設定し、1号窯跡の焚口を検出した。その後、この窯の規模を把握するために、上方に4～6トレンチを設定し調査を行ったが、これを進める中で、1号窯跡に並列して、2号窯跡の存在も明らかとなった。このため、数度にわたり、トレンチの拡張を行い全容の把握に努めたが、排煙部の状況等は判然としなかった。

さらに、1・2号窯跡周辺以外にも須恵器の散布が認められたため、窯跡の広がり进行予想し、未伐採区域に8～11トレンチを設定し、調査を行なった。この結果、灰原およびこれに関連する黒色～黒褐色土が検出され、比較的多くの須恵器が出土した。窯体の確認には至らなかったが、11トレンチの上方に窯跡の存在を予想し、次年度の調査課題とした。なお、1・2号窯跡上方の7トレンチは、尾根線端部に設定したが、少量の須恵器細片が出土したのみであった。

平成16年度の調査（第2次調査）は、立木の伐採範囲をさらに広げ、11トレンチの上方の窯跡を確認することを最初の目的とした。まず、11トレンチ上方に12m×0.8mの12トレンチを人力で掘削し、その結果、灰原を検出した。窯体は検出できなかったものの、検出した灰原の幅や丘陵斜面の状況から、焚口はこの付近にあると予測でき、このトレンチの上方（西方）を伐根を進めながら拡張した。この予測のとおり、直後に3号窯跡の焚口を確認し、さらにトレンチ北端の灰原の広がり不自然な点があることから、北側にも約4m拡張（延長）した。この結果、4号窯跡の焚口が確認され、3号窯跡とともに全容を確認するために、引き続き上方へのトレンチの拡張を進めた。上方に約16m拡張を進めた結果、3・4号窯跡の全容を検出した。

これにより、4基の窯跡の存在が明らかとなったが、続けて将来の整備に向けての窯体構造の把握が必要となった。遺構の保存という観点から原則1基のみの調査に留め、その調査対象として3号窯跡を選定した。これは、1・2号窯跡と比べて比較的緩斜面に所在する点（将来上屋を架けた整備施設を建設することを想定した場合の利便性）、整備を行なった場合に規模の異なる窯（4号窯跡）が同時に見学できる点を考慮し、決定した。

3号窯跡の調査は、通常の発掘調査に準じた手法を用い、上面検出を行ったのち、窯跡の主軸と横断面のポイントを設定し、基本的に焚口から排煙部に向かい横断面・縦断面で土層の堆積状況を確認しながら最終操業面まで掘り下げた。さらに焚口から灰原にかけて設定した幅約30cmトレンチを掘削し、灰原の深さや焼成回数等のデータを収集した。その結果、窯跡の補修・改修の状況や排煙部の構造、また最終操業時の廃窯行為の過程などが明らかとなり、大きな成果を得ることができた。その一方で、遺構の損傷を最小限に留めるために、通常の床面の断ち切りは行なっておらず、

操業当初の構造や操業面の重なりなどについて不明な点も多い。排煙部に取り付く溝については、土層ベルトを除去していない。

3号窯跡に近接する4号窯跡については、排煙部の構造を把握するために、この部分のみの限定的な調査を行った。その結果、牛頸窯跡群に特有の多孔式煙道を確認することができ、窯体構造の一部が明らかとなった。

さらに15年度に確認した1・2号窯跡に関連したトレンチの拡張を進め、両窯全体の検出に努めた。その結果、1・2号窯跡ともに、焚口・排煙部を明確に把握することができ、窯の規模や遺存状況の一端を理解することができた。

こうした調査により、1～4号窯跡の概要はある程度把握できるようになったが、周辺を踏査すると3号窯跡の南側にもう1ヶ所須恵器の散布が認められた。窯跡の存在を予想し、この部分に13～15トレンチを設定し掘削したが、14トレンチ南側をはじめ、各トレンチから比較的多くの須恵器は出土するものの、明確な灰原は確認できず、次年度の課題とした。

なお、最終操業面まで調査を行なった3号窯跡は、今後の整備の方針が決定するまで現状保存する必要があり、土囊約2200体を用いて埋め戻したうえで、上部をブルーシートで被覆し、現在一時的な保存を図っている。

平成17年度の調査（第3次調査）は、窯跡分布の更なる広がり、関連遺構の有無の確認を目的として実施した。まず、地表面に須恵器の散布が見られ、前年度の調査で須恵器が比較的多く出土した14トレンチ周辺に窯跡の存在を予測し、上方に0.3m×16mのトレンチ（15トレンチ）、下方に0.4m×9.8mのトレンチ（16トレンチ）を設定し、掘り下げを行った。この結果、15トレンチほぼ中央において、等高線に直交するように壁面の被熱した大形遺構を確認することができた。このため、トレンチを一部拡張し、遺構の概要の把握に努めた結果、この検出部分は須恵器窯跡（5号窯跡）の焚口に相当することが明らかとなった。次に窯跡の規模、天井部の遺存状況、灰原位置の確定のため、17～19トレンチを設定し、調査を行った。この結果、17トレンチで灰原、18トレンチで排煙部を検出し、さらに19トレンチの状況から、天井部のほとんどが崩落していることが確認できた。5号窯跡については、遺構の保全のため、掘り下げは行っていない。

5号窯跡の検出後、さらに南側の窯跡の分布を確認するため、20～23トレンチの掘り下げを行った。20トレンチでは、北端付近で若干の炭化物を確認したため、トレンチを一部拡張し、さらにその斜面上方に25トレンチを設定したが、炭化物は広がりを見せず、遺構も確認できなかった。21～23トレンチでも遺構は検出できなかった。

24・26～31トレンチは、窯跡の発見された斜面下方の緩斜面に設定し、一部バックホウを用いながら調査を行った。24トレンチでは落ち込み1ヶ所、27トレンチでは土坑1基、28トレンチでは土坑2基、29トレンチでは土坑2基およびピットを検出した。このうち土坑3基、ピット1基については、半裁等の部分的な掘り下げを行ったが、須恵器窯跡との有機的な関係を把握することはできなかった。



第4図 小田浦窯跡群79地点トレンチ配置図 (1 / 500)

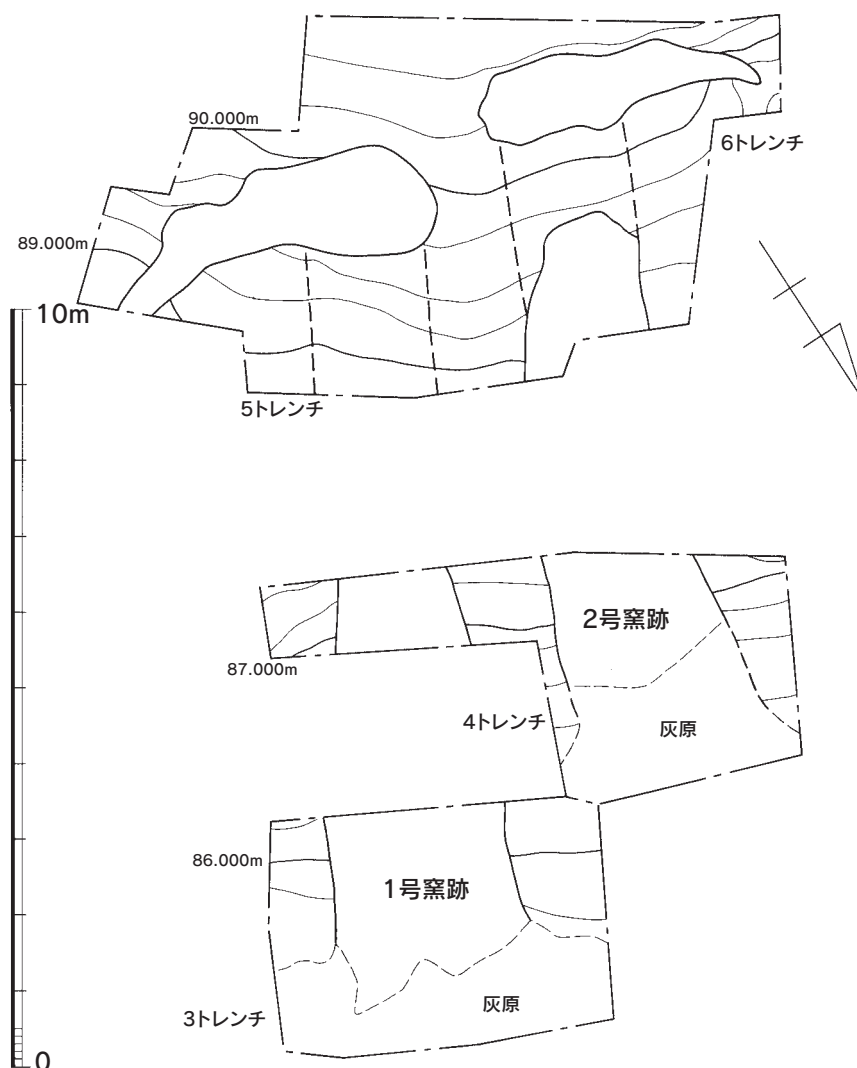
2. 遺構と遺物

(1) 1号窯跡 (第5図、図版1～3)

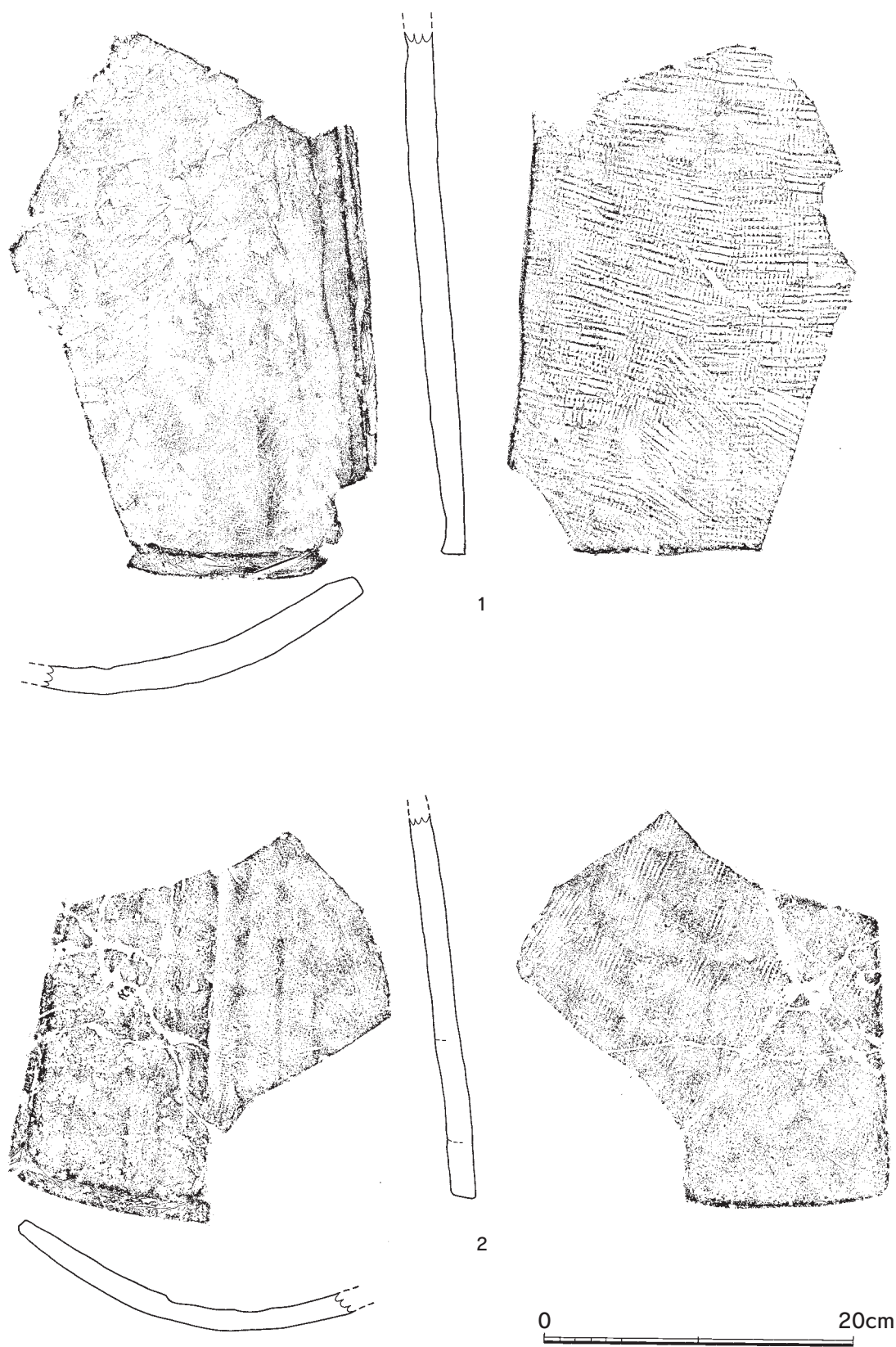
北東向きの丘陵尾根線の先端付近、3～6トレンチで検出され、標高85.5m～90mに位置する。検出面では、排煙部奥壁上端までの全長10.5m、最大幅2.5mを測り、排煙部からは南東向きの溝が弧状に伸びる。排煙部付近では地山の陥没が確認できず、天井は一部残存するようである。下方には灰原が確認されるが、その広がりや堆積状況は不明である。

窯体内の調査は実施しておらず、基本的に上面検出に留めたが、ちょうど排煙部の真上に巨木が自生しており、この伐根の際に排煙部の埋土を部分的に掘削することとなった。この部分からは、比較的多くの瓦片が出土しているが、これらの瓦は、灰原から出土する瓦片より明らかに大形の破片であること、排煙部に多くの遺物が自然に流入するとは考え難いことなどを勘案すれば、人為的に持ち込まれた可能性が高い。なお、この想定が妥当ならば、これらは煙道の封鎖（排煙調整）を目的としたものとも考えられるが、出土した瓦自体には、特異な2次被熱の痕跡等は確認できなかった。

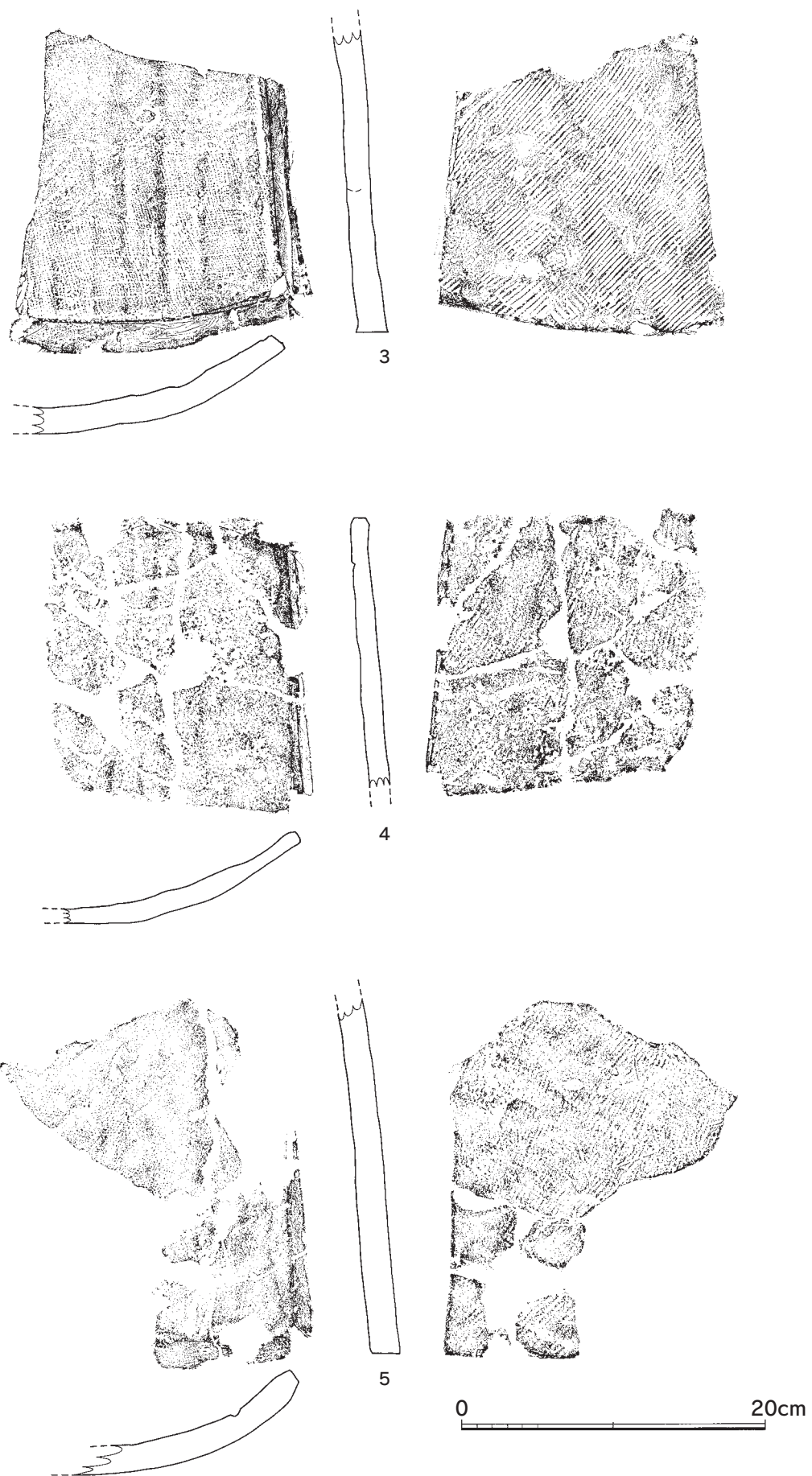
なお、後述するとおり、1号窯跡の灰原と考えられる2トレンチで瓦がほとんど出土していない



第5図 1号・2号窯跡実測図 (1/100)



第6図 1号窯跡排煙部出土遺物実測図 (1) (1/4)



第7図 1号窯跡排煙部出土遺物実測図 (2) (1/4)



第8図 1号窯跡排煙部出土遺物実測図 (3) (1/4)

ことを考慮すると、当該窯跡は瓦陶兼業窯でない可能性が高い。

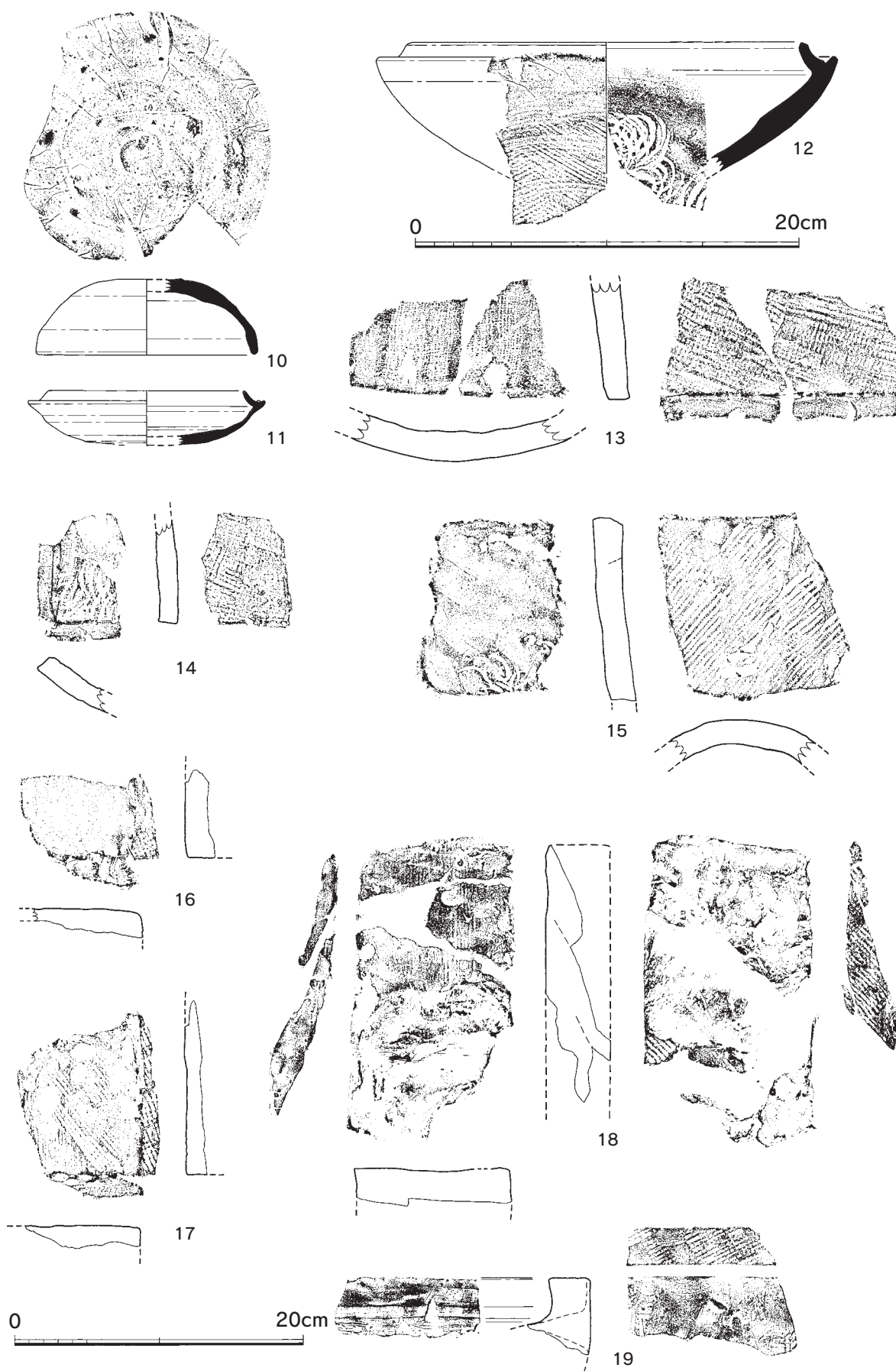
遺物（第6～8図） 先述したとおり、排煙部の一部を除き、窯体内の調査を行っていないため、確実に1号窯跡に帰属する遺物は極めて少ない。1～9は、排煙部の伐根時に出土した遺物である。1～8は平瓦。凸面は平行（擬格子）タタキを施し、凹面は模骨痕・布目痕を残す。凹面は基本的に布目痕の後にナデ調整を行うが、1・6・8のように模骨痕が不明瞭になるほどナデた資料と、3のように積極的にナデた痕跡が確認できない資料とがある。また5・8には、布の綴じ合わせ部分の圧痕が概ね縦方向に観察される。2・3には粘土紐の接合痕が残る。9は丸瓦。広端面と狭端面が確認できる唯一の資料である。凸面は平行タタキ、凹面は布目痕の後にナデ（ケズリ）調整を施す。目釘孔が穿たれている。

（2）2号窯跡（第5図、図版3）

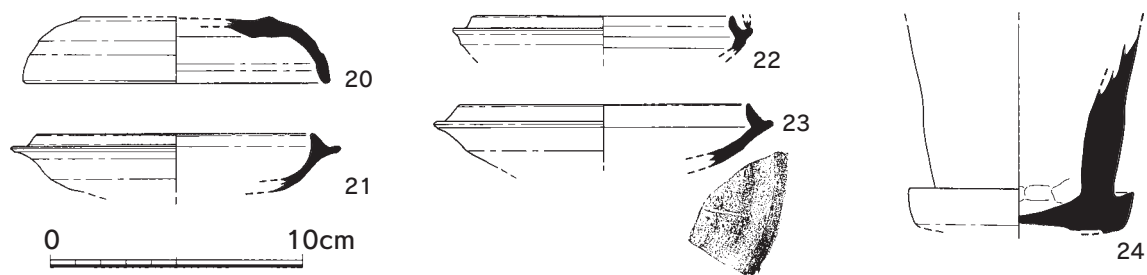
1号窯跡の西側に隣接し、4～6トレンチで検出された。標高は86.5m～90.5mに位置する。検出面では、排煙部奥壁上端までの全長8.7m、最大幅2.2mを測り、排煙部からは北西向きの溝がやや伸びる。排煙部付近では地山の陥没が確認できず、天井は一部残存するようである。下方には灰原が確認されるが、その広がりや堆積状況は不明である。窯体内の調査は実施しておらず、上面検出に留めた。

なお、燃焼部～灰原検出面（4トレンチ）からは、比較的多くの瓦片が出土しており、後述する斜面下方の1トレンチにおいても瓦の出土は顕著であることから、当該窯は瓦陶兼業窯の可能性が極めて高い。1号窯跡排煙部出土の大形瓦片も当該窯から搬出されたものであろうか。

遺物（第9・10図） 窯体内の調査を行っていないため、確実に2号窯跡に帰属するとは言えないが、燃焼部～灰原（4トレンチ）では検出時に瓦片を含む遺物を確認した。10～20は検出時に窯体内埋土から一部露出した遺物である。10は杯蓋。実測図では表現していないが、大きく歪んでいる。ヘラ記号を有する。11は杯身。口縁部が一部しか遺存しておらず、復元径には確証が持てない。12は大形の杯身。受け部径24.0cmを測る。外面は細かな平行タタキの後、カキメを施し、内面は同心円当て具痕の後、回転ナデを施している。法量的にも技法的にも特異な器種といえる。13・14は平瓦。凸面は擬格子タタキ、凹面は布目痕が明瞭に残る。14は布目痕の後、同心円当て具痕が観察される。15は丸瓦。凸面は平行タタキを施し、凹面は同心円当て具痕の後、ナデられている。16～18は熨斗瓦。18は擬口縁の状況から、やや薄い粘土板を斜め方向に重ねながら成形した状況が明瞭に観察できる。16・17についても同様の成形方法であった可能性が高い。その後全面タタキ整形を行い、最終的にナデ調整を施す。19はL字形に屈曲する瓦片で、平瓦の水返し部の可能性が高い。上面にタタキ痕を残す。無文の軒平瓦の可能性も考えたが、瓦当面（水返し部の場合の外側面）があまりにも直線的であるため肯定できなかった。20～24も4トレンチの出土遺物であるが、検出面からの出土ではない一群である。20は杯蓋。21～23は杯身。20・21・23は残存部分の問題から復元径に確証が持てない。またいずれも回転ヘラケズリの有無は判然としない。23はヘラ記号を有する。25はすり鉢。外底部が剥落しているため、当該器種に特徴的な刺突文は確認できない。



第9図 2号窯跡検出面出土遺物実測図(1)(10~12: 1/3、その他: 1/4)



第10図 4トレンチ（2号窯跡）出土遺物実測図（1／3）

（3）1トレンチ（第4図、図版19）

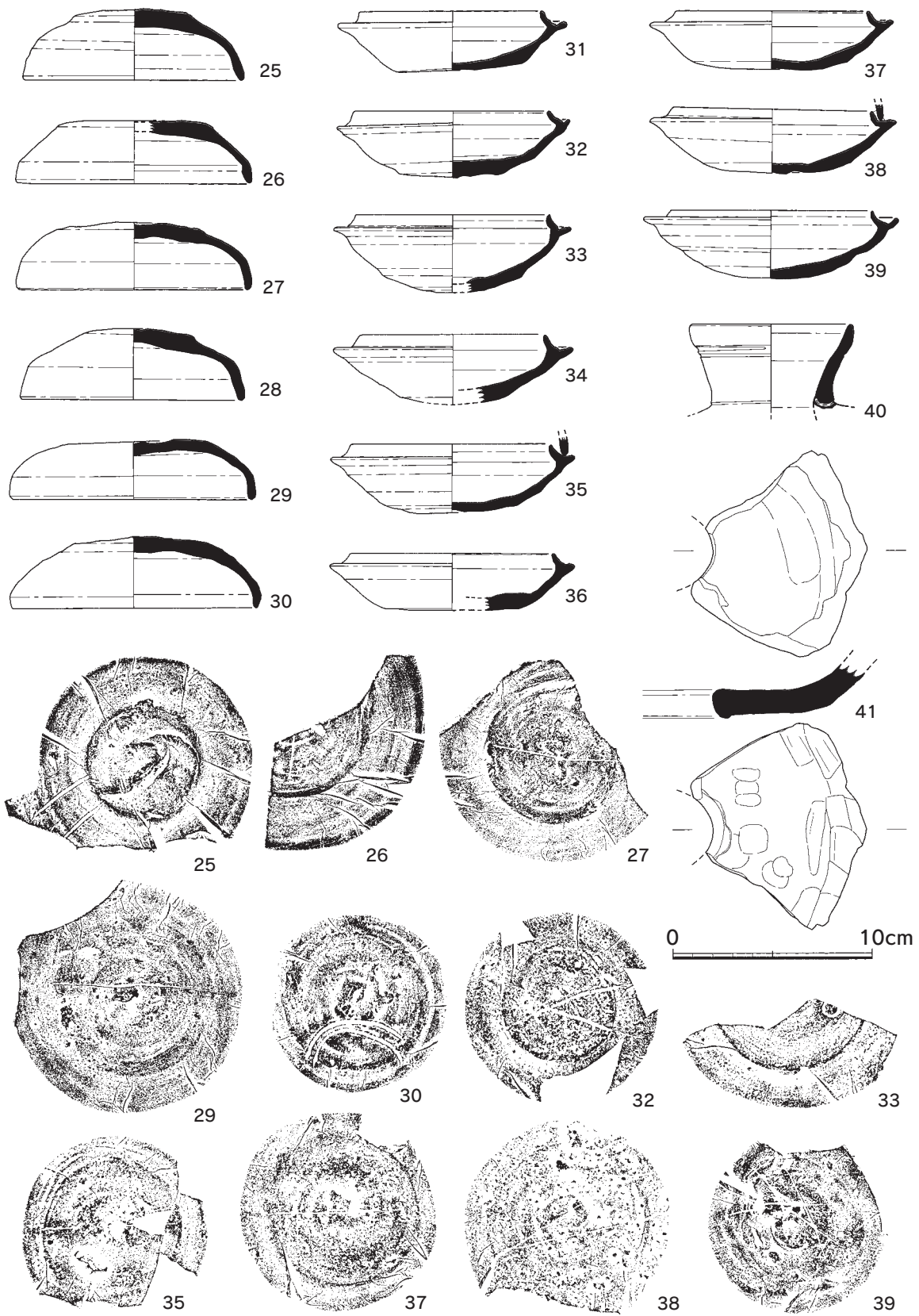
周辺に須恵器片が散乱していたことから、窯跡の存在を想定し設定した最初のトレンチ（4.0m×1.0m）である。厚さ約20cmの灰原を確認し、600点を越える須恵器片と、150点を越える瓦片が出土した。1・2号窯跡双方の遺物を包含するものと考えられるが、総体的には2号窯跡の遺物を多く含んでいる可能性が高い。

遺物（第11～14図） 25～30は杯蓋。口径は、11.1～12.6cm（平均11.8cm）を測る。いずれも明瞭な回転ヘラケズリ痕が観察できない。28以外は外面にヘラ記号を有する。31～39は杯身。受部径は、11.7～12.8cm（平均12.1cm）を測り、特に12.2cm前後が分布の中心となる。明確に回転ヘラケズリを観察できるものはない。36・39以外は外面に降灰が認められ、身蓋逆位で焼成されていた可能性が高い。32・35・37～39は外面にヘラ記号を有する。33は竹管文と考えられる施文がある。40は平瓶口縁部。41は瓶類の底部であろうか。ただ瓶類としては器面調整が粗く、器壁も厚い感がある。底部に焼成前穿孔を施す。42～47は甕。45～47は中～大甕に属する。46は上位の横位沈線→波状文→波状文を分断する横位沈線の順に、47は下位の横位沈線→粗雑な斜線文→上位の横位沈線の順に施文された可能性が高い。48～52は平瓦。48の凹面は糸切り痕と考えられる条線の後、布目痕、同心円当て具痕が観察できる。49は凹面に布の合わせ目痕が横位に残る。51は凹面に粘土板の合わせ目の痕跡が観察され、また凸面狭端部付近では、横位に縄状の圧痕が残る。桶巻きの際に粘土板を固定した痕跡であろうか。53は第9図19と類似したL字形に屈曲する瓦片で、平瓦の水返し部の可能性が高い。水返し部の外側面には擬格子タタキの痕跡が残る。54・55は丸瓦。54は他の瓦と比べ器壁が非常に薄い。55は凹凸両面ナデ調整が施され、凸面には鋭利な工具で刻んだような条線が2条認められる。実測図上端の破断面の状況および凹面の指頭痕から、瓦当面を欠損した軒丸瓦の可能性もある。

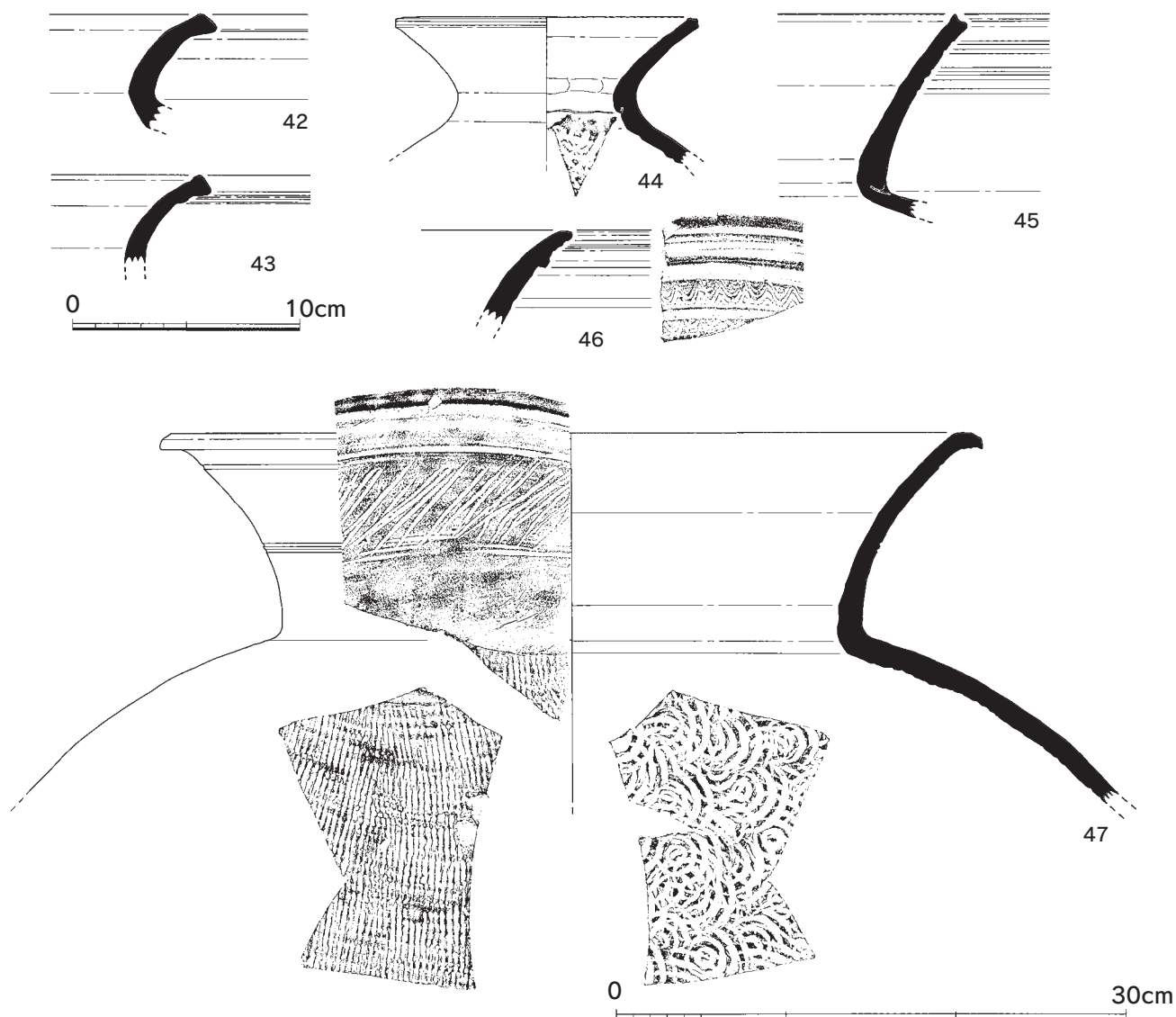
（4）2トレンチ（第4図、図版20）

1トレンチと同時に調査したトレンチ（5.2m×0.7m）で、1トレンチの東側、等高線に沿うように設定した。最大15cmの厚さの灰原を確認し、200点を越える須恵器片が出土したが、瓦片は1点のみであった。1・2号窯跡双方の遺物を包含するものと考えられるが、特に1号窯跡の遺物を多く含んでいる可能性が高い。

遺物（第15図） 56・57は杯身。受け部径は12.2cm・12.4cmを測る。56の外底部はヘラ切り後ナデ調整。ヘラ記号を有する。57は小片のため外底面の調整は不明。58は短頸壺の蓋であろうか。天井部外面回転ヘラ切り後ナデ調整。59は甕の口縁部。



第11図 1 トレンチ出土遺物実測図 (1) (1/3)

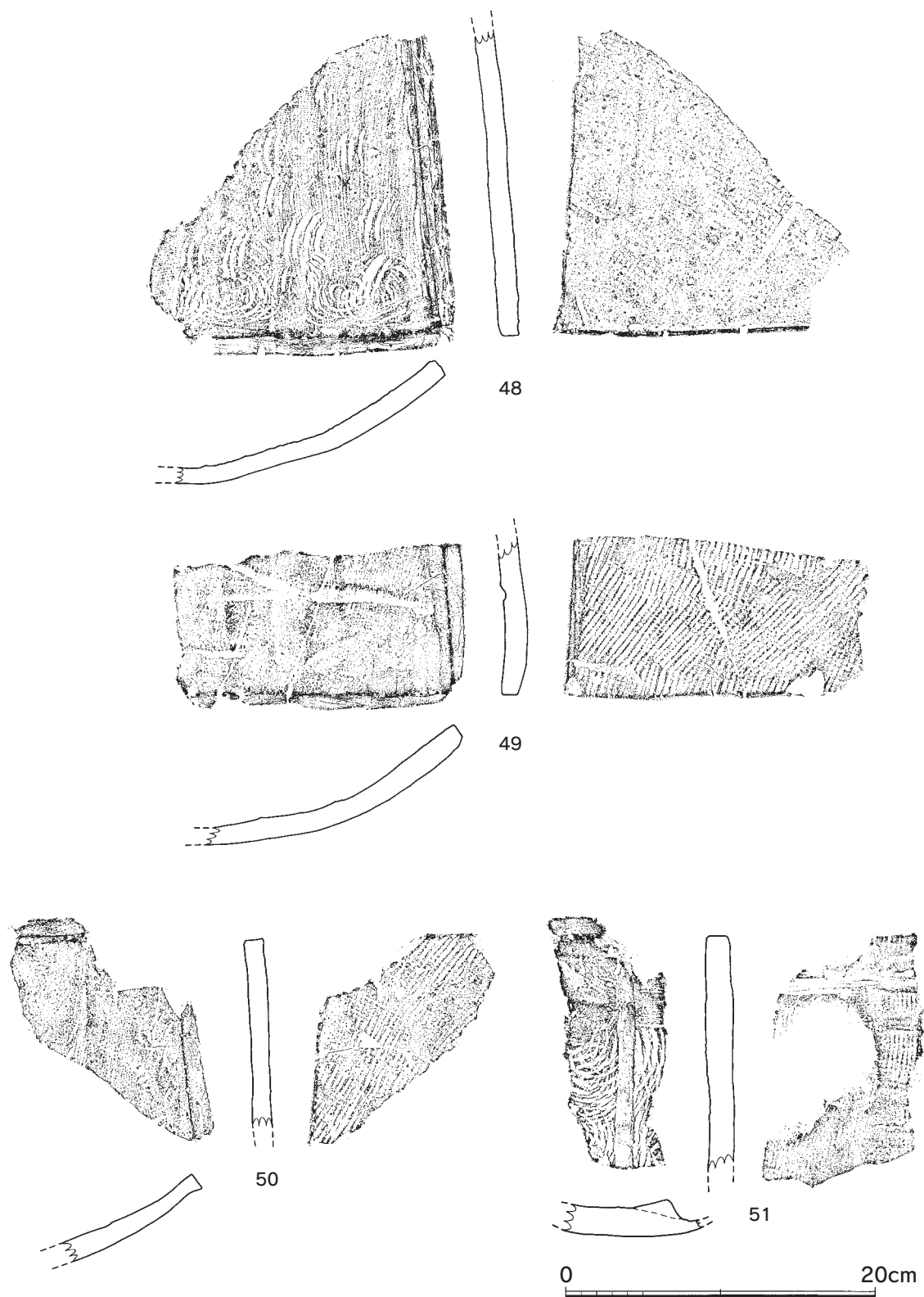


第12図 1トレンチ出土遺物実測図(2)(42~44:1/3、その他:1/4)

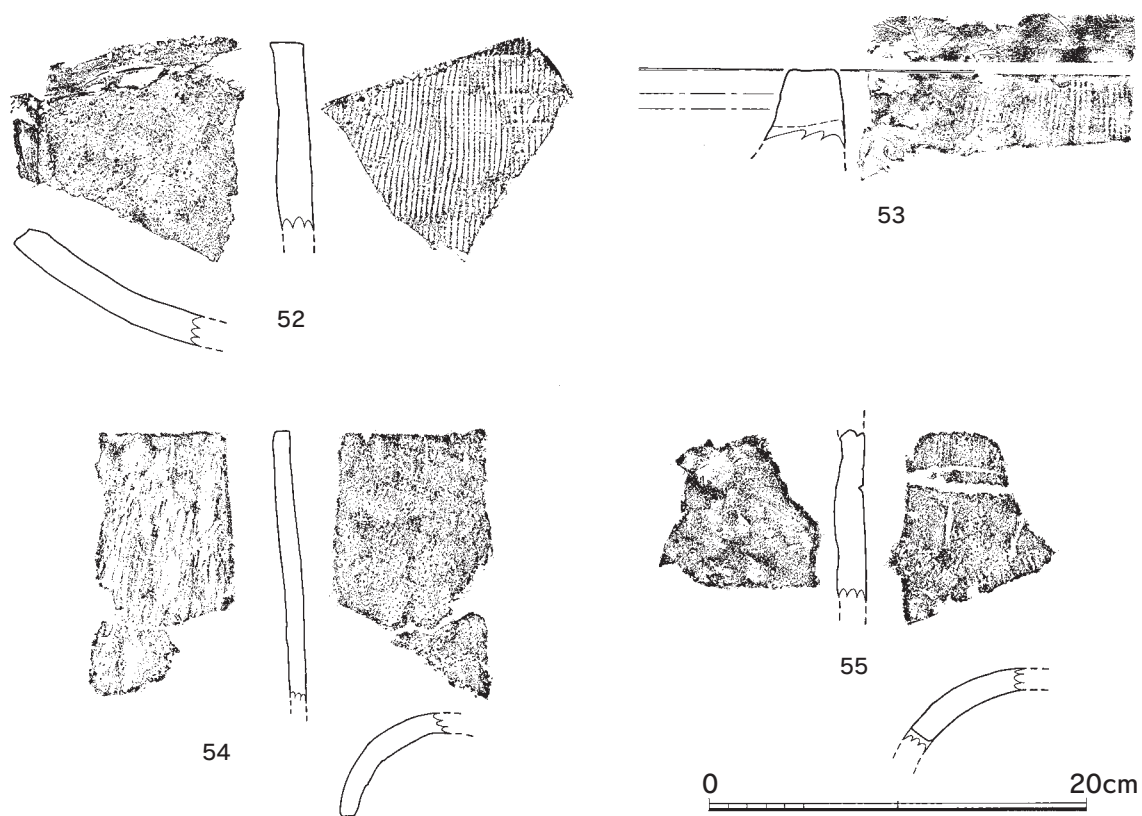
(5) 3トレンチ(第5図、図版3)

1号窯跡の燃焼部～灰原を検出したトレンチで、結果的には4.5m×3.2mの範囲を調査した。出土遺物は1号窯跡の遺物を主体としながら、西側に隣接する2号窯跡の遺物も一定量含むものと考えられる。

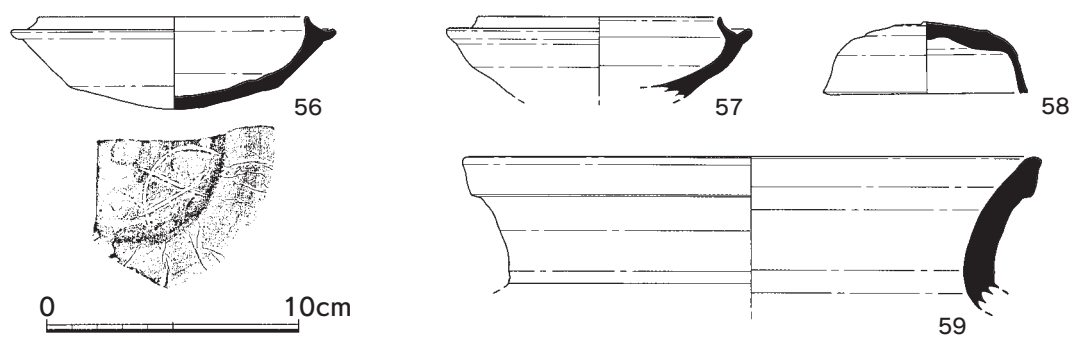
遺物(第16・17図) 60~67は杯蓋。口径は11.2~12.8cm(平均11.8cm)を測る。65に回転ヘラケズリが観察されるが、それ以外は回転ヘラ切り後ナデ、あるいは調整が不明瞭な資料である。61~66は外面にヘラ記号を有する。66は体部外面中位に連続した刻み状の擦過痕が認められる。68~71は杯身。受部径は、11.6~12.6cm(平均12.1cm)を測る。69の外底面は回転ヘラケズリ、68・71は回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。72は身・蓋の判断がつかない。内外面ともにヘラ記号が観察されるが、外面は先端の細い工具で「×」状のモチーフを描くのに対し、内面はやや先端の太い工具で葉脈状のモチーフを描く。73は杯蓋(杯G)。74は杯身(杯G)。75は短頸壺の蓋であろうか。76は横瓶。外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕が残る。径2.0cm程度の焼



第13図 1トレンチ出土遺物実測図 (3) (1/4)

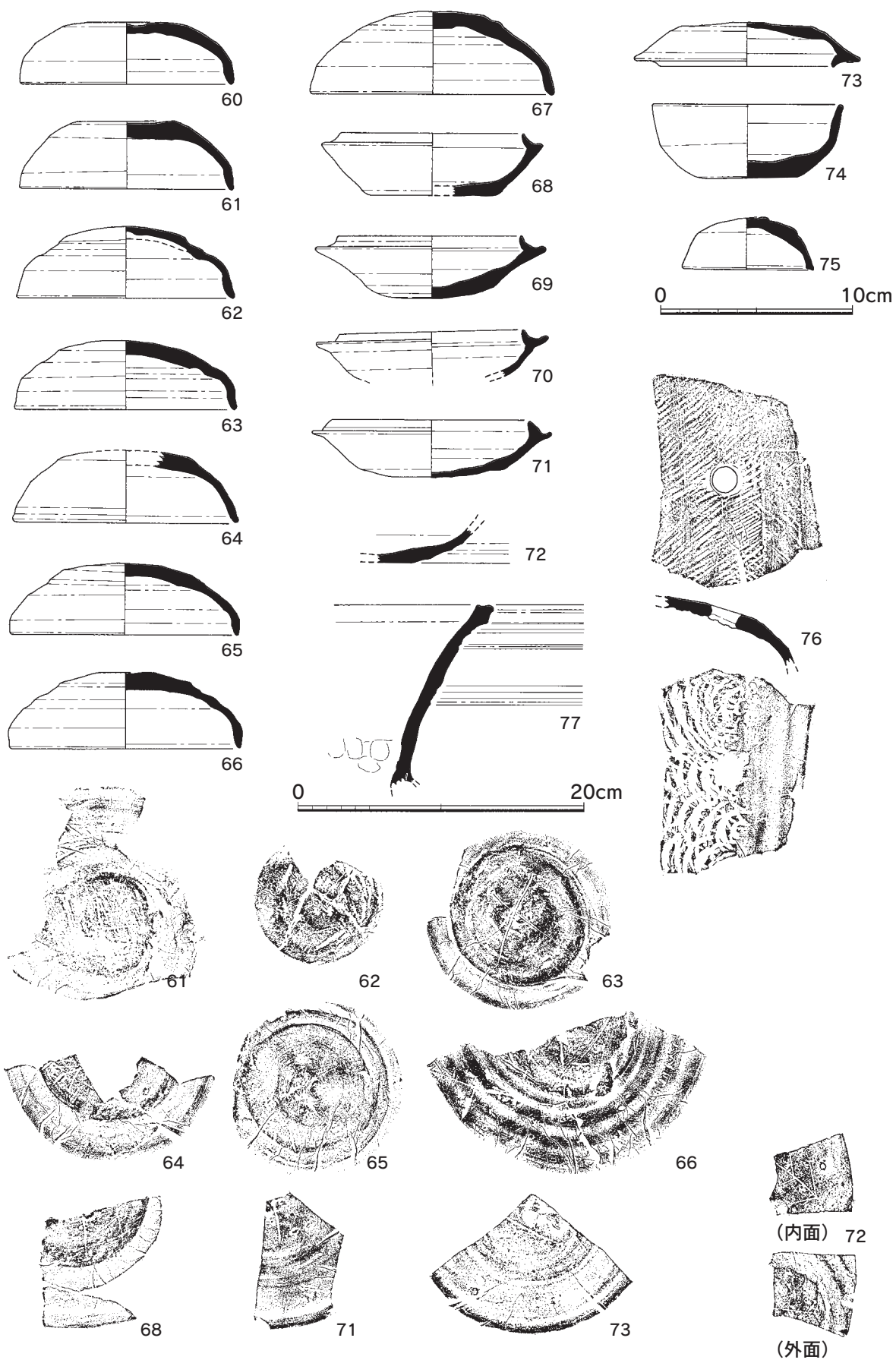


第14図 1 トレンチ出土遺物実測図 (4) (1/4)

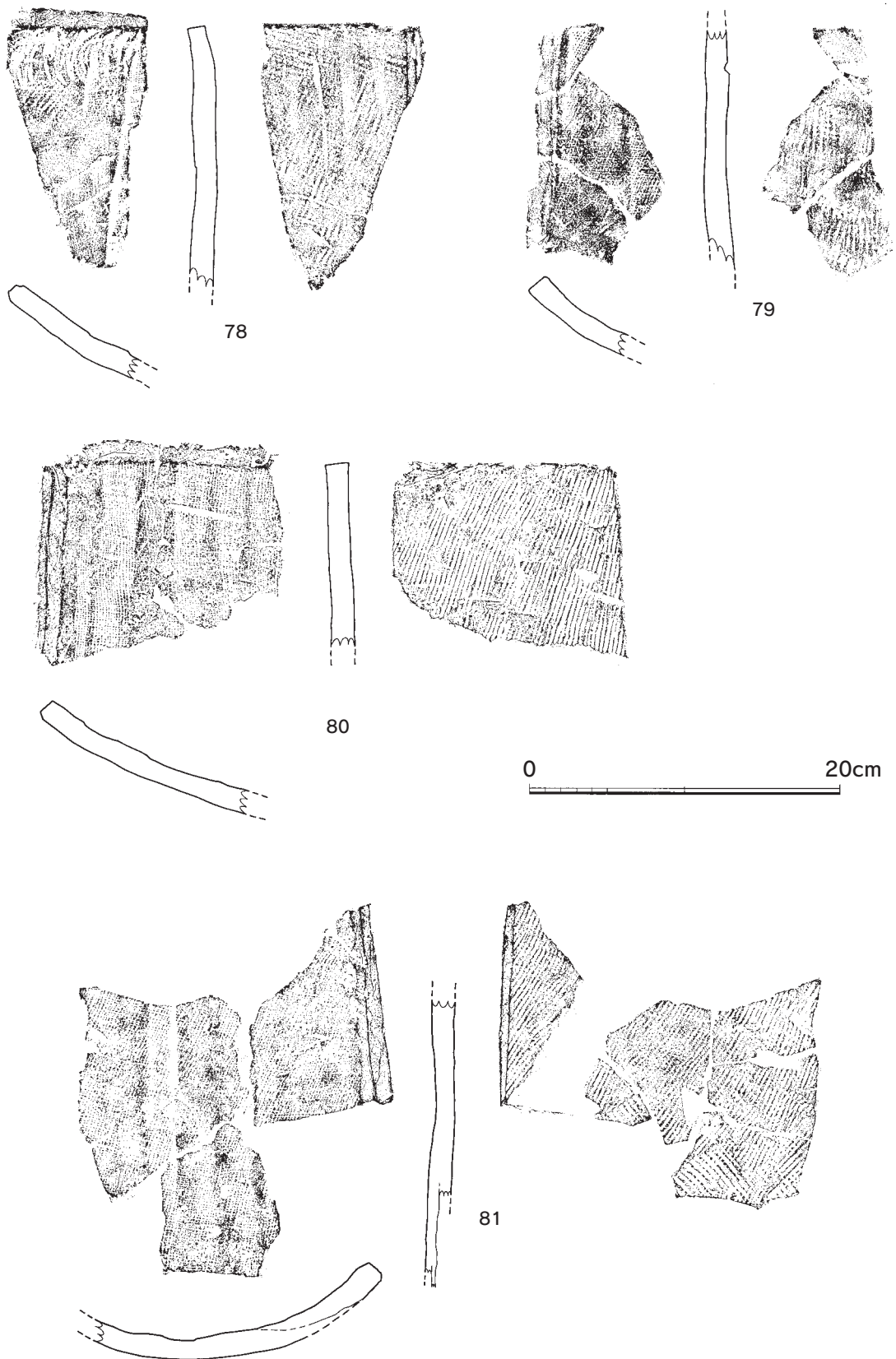


第15図 2 トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

成前穿孔が認められる。2 次的に被熱した可能性が高い。77は甕。横位沈線のみで斜線文等は見られない。78～81は平瓦。凸面は平行（擬格子含む）タタキ、凹面は布目痕を明瞭に残す。78は布目痕の後、同心円当て具痕が観察される。81は破断面の状況から粘土板の合わせ目部分であったことがわかる。



第16図 3トレンチ出土遺物実測図 (1) (76・77：1/4、その他：1/3)

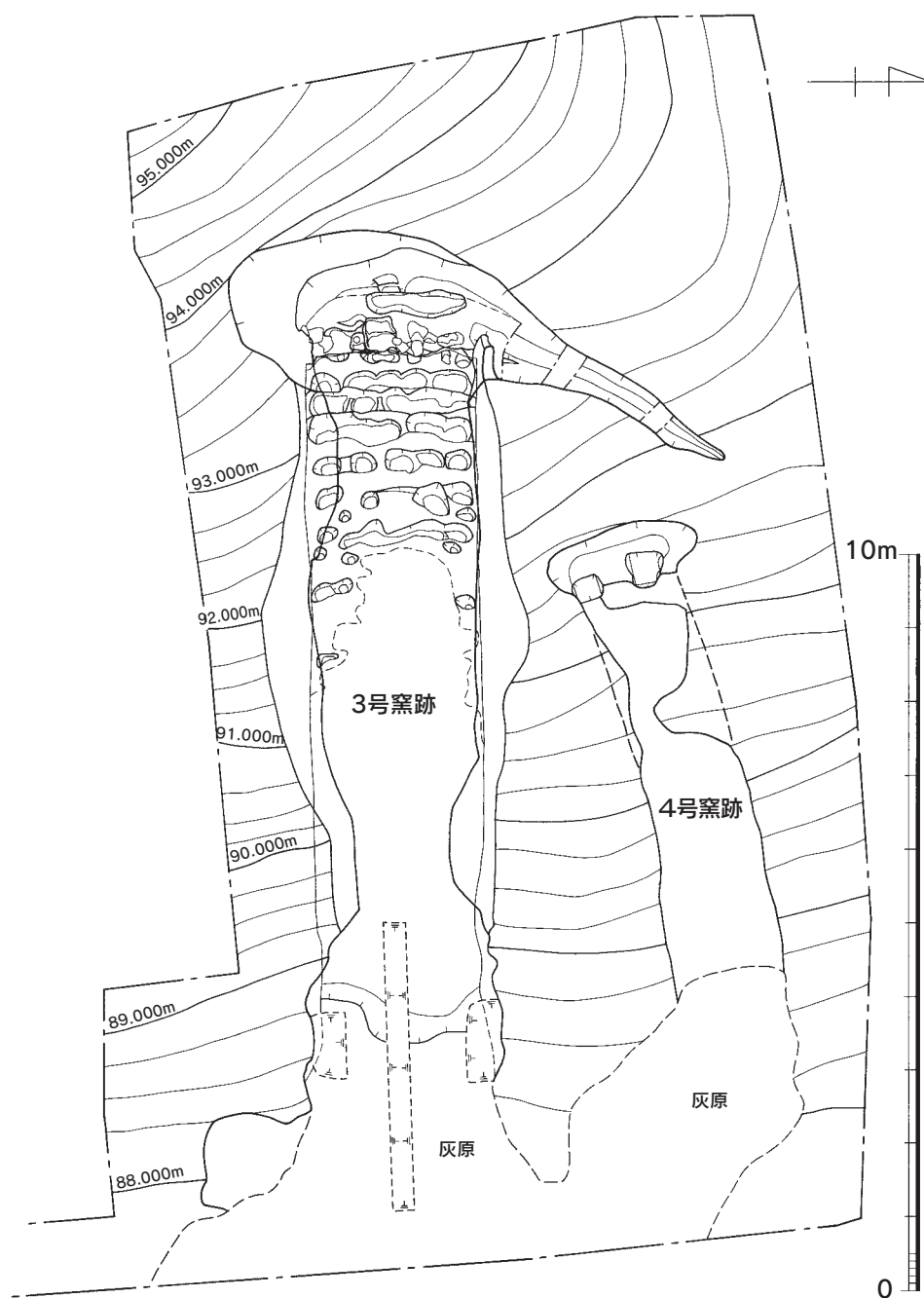


第17図 3トレンチ出土遺物実測図 (2) (1/4)

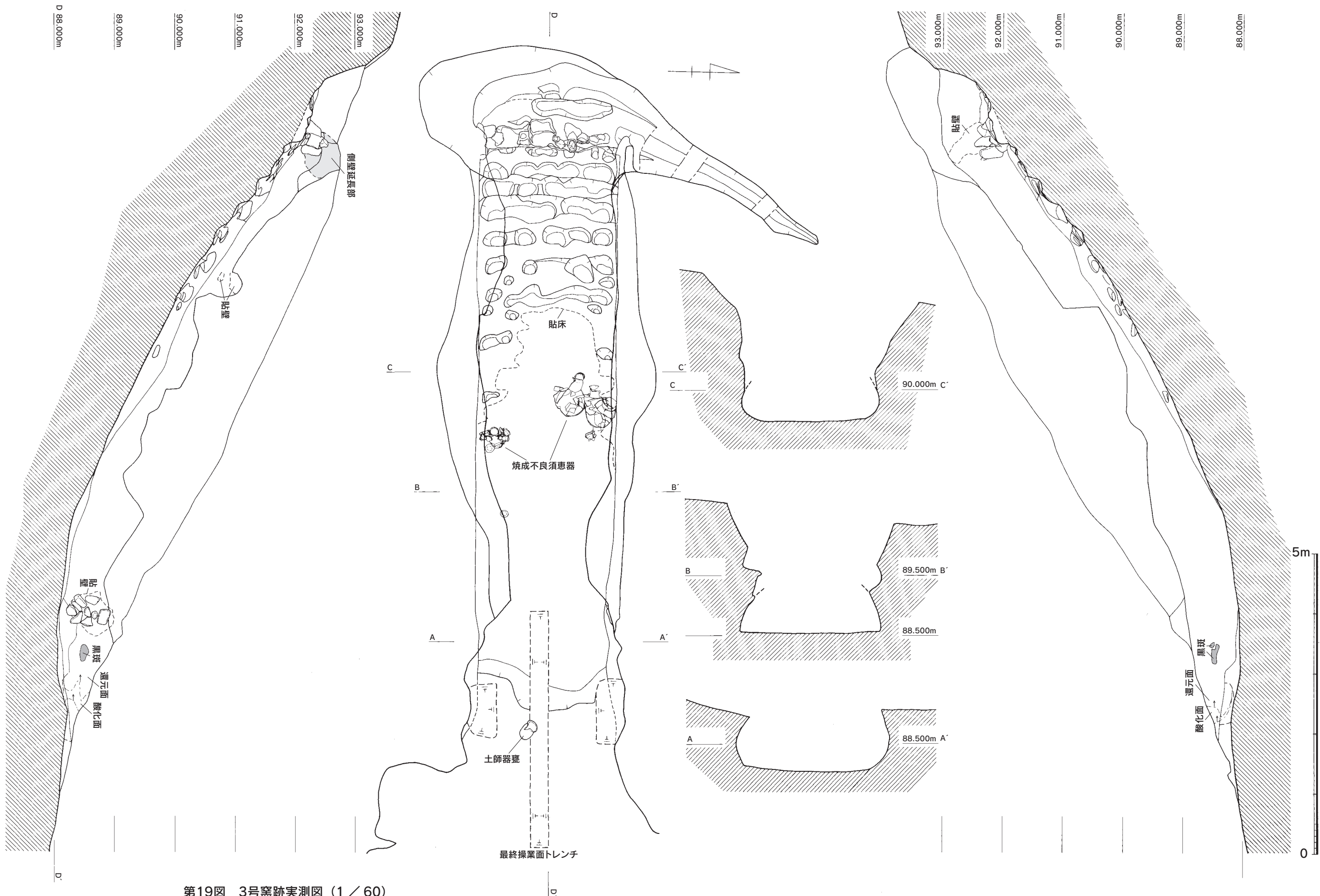
(6) 3号窯跡 (第18～23図、図版4～15)

丘陵先端付近の東斜面に位置し、12トレンチを拡張する中で確認された。標高は88.5m～94mと1・2号窯跡より高く、1号窯跡との最短距離は7.4mである。今回確認された5基の中で、唯一最終操業面まで調査を行った窯跡である。全長11.0m、底面の幅2.3mを測り、5基の窯跡の中で最も規模が大きい。表層のバイラン土が窯体内に落ち込んでおり、地下式であったことがわかる。平面プランは焚口から燃烧部～焼成部～排煙部にかけて、両側壁がほぼまっすぐに伸び、排煙部に多孔式煙道を備えることから、牛頸窯跡群に特有な多孔式煙道窯であることが明らかとなった。

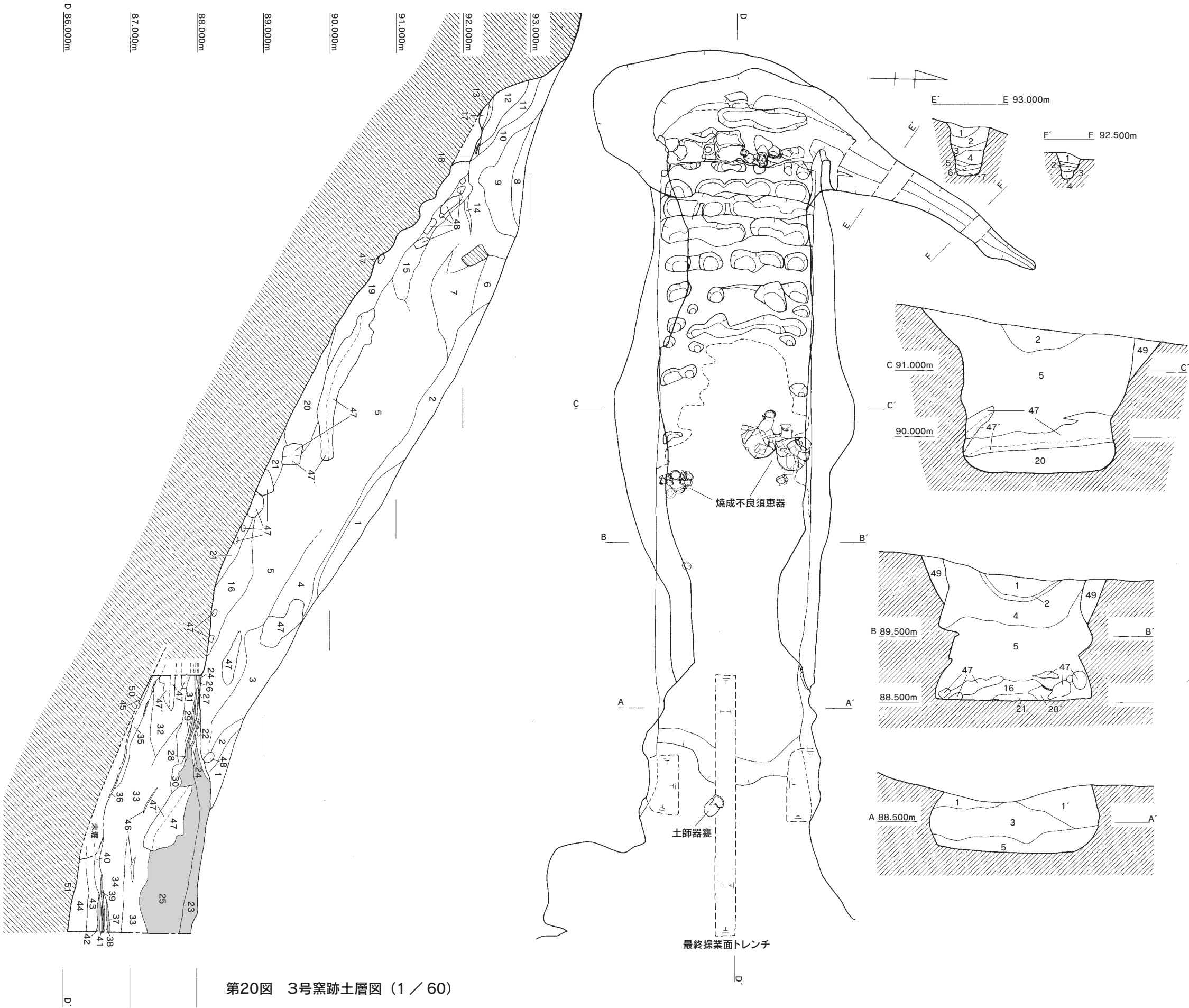
調査は基本的に最終操業面で終了し、通常の断ち割り作業を行っていないが、燃烧部から灰原



第18図 3号・4号窯跡実測図 (1/100)



第19図 3号窯跡実測図 (1 / 60)



- (E-E')
1. にぶい黄橙色土 (10YR7/4)
 2. にぶい赤褐色土 (2.5YR4/4)。暗赤褐色土多く含む
 3. にぶい褐色土 (7.5YR5/4)
 4. 灰褐色土 (5YR5/2)
 5. 暗赤褐色土 (10R3/3)
 6. にぶい赤褐色土 (2.5YR5/4)
 7. にぶい黄橙色土 (10YR7/3)。他層と比べしまりあり

- (F-F')
1. にぶい赤褐色土 (2.5YR4/4)
 2. にぶい黄褐色土 (10YR5/4)。バイラン土主体。炭化物・焼土少量含む
 3. にぶい黄褐色土 (10YR5/4)。炭化物・焼土少量含む
 4. にぶい赤褐色土 (5YR5/4)。上部に暗赤褐色土やや多く含む

- (A-A'～D-D')
1. にぶい黄褐色土 (10YR6/4)。2層を少量含む
 - 1'. にぶい橙色土 (7.5YR6/4)
 2. 灰黄褐色土 (10YR6/2)
 3. にぶい赤褐色土 (5YR5/3)
 4. にぶい黄褐色土 (10YR7/3)
 5. にぶい黄褐色土 (10YR7/4)。にぶい赤褐色土を少量層状に含む
 6. にぶい黄褐色土 (10YR7/4) と赤褐色土 (10YR6/6) の混土
 7. 6層と多量の天井崩落土の混土
 8. にぶい黄色土 (2.5Y6/3)
 9. 暗灰黄色土 (2.5Y5/2)
 10. 灰黄色土 (2.5Y6/2)
 11. にぶい黄色土 (2.5Y6/3)
 12. にぶい赤褐色土 (5YR5/4)。被熱土の堆積
 13. にぶい黄褐色土 (10YR6/3)。11層を少量含む
 14. 暗灰黄色土 (2.5Y5/2)
 15. 赤褐色土 (10R4/4)。礫・天井ブロック等多く含む
 16. にぶい赤褐色土 (2.5YR4/3)
 17. にぶい橙色土 (7.5YR7/3)。バイラン土質
 18. にぶい橙色土 (7.5YR6/4)
 19. にぶい黄褐色土 (10YR7/3)
 20. にぶい橙色土 (7.5YR7/4)。窯壁小片少量含む。砂質
 - 20'. 橙色土 (7.5YR7/6)
 21. 天井崩落土と20層の混土
 22. 明黄褐色土 (10YR7/6)。炭化物・赤褐色土をやや多く含む
 23. 黒色土 (N1.5/)。黄褐色土ブロック少量含む
 24. にぶい黄褐色土 (10YR7/4)
 25. 黒色土 (N2/)。黄褐色土ブロック少量含む。軟質。炭化物層
 26. 黒色土 (N2/)。軟質。炭化物層
 27. にぶい黄褐色土 (10YR7/3)。やや硬質。砂質
 28. 黒褐色土 (10YR3/1)。軟質。炭化物主体
 29. 暗赤灰色土 (10R3/1)。極めて硬質
 30. 灰黄褐色土 (10YR5/2)。軟質。砂質
 31. 赤褐色土 (10R4/4)。やや軟質
 32. にぶい赤褐色土 (2.5YR5/3)。軟質。天井ブロック多く含む
 33. にぶい黄褐色土 (10YR7/3)。軟質
 34. にぶい黄褐色土 (10YR7/4)。32層・炭化物少量含む
 35. 褐灰色土 (10YR5/1)。やや硬質。砂質。上面に礫片
 36. 橙色土 (5YR6/6)。やや粘質
 37. 黒色土 (N1.5/)。軟質。炭化物層
 38. 灰黄褐色土 (10YR5/2)。硬質。炭化物やや多く含む
 39. 黒色土 (N1.5/)。軟質。炭化物層
 40. 褐灰色土 (10YR5/1)。硬質。砂質。炭化物少量含む
 41. 暗灰色土 (N3/)。やや軟質。炭化物多く含む
 42. 黒色土 (N2/)。軟質。炭化物層
 43. にぶい赤褐色土 (5YR4/3)。硬質
 44. 浅黄褐色土 (10YR8/4)。軟質
 45. 灰色土 (N6/)。硬質。砂質
 46. にぶい赤褐色土。被熱土
 47. 天井崩落ブロック
 - 47'. 天井崩落ブロック (還元部)
 48. 礫
 49. 橙色土 (7.5YR6/6)
 50. 灰白色花崗岩 (地山・被熱)
 51. にぶい褐色土 (7.5YR5/4)。風化花崗岩層。やや硬質。粘質

第20図 3号窯跡土層図 (1 / 60)

にかけて設定したトレンチによって、大規模な改修の過程が窺えた。

なお、灰原は将来の整備活用を計るため、調査対象としなかった。

焚口・燃烧部 長さ3.4m、幅2.1m～2.2m、床面傾斜角度は7°を測る。この幅は焼成部よりやや狭いが、これは最終操業時の床面の壁際が平坦でなかったことに起因しており、本来の窯の側壁はより直線的であったと考えられる。右側壁は、複数の礫を含む貼壁によって補修されているが、この貼壁と地山の間には、一部灰層が挟まれており、貼壁が最終操業時に近い段階で施されたことがわかる。また、天井開始部付近の側壁に、概ね長楕円形の黒斑が観察されるが、この位置は両側壁ともに酷似しており興味深い。還元面の内側にあることから、薪の積み方など窯焚き技術の還元に関与する可能性がある。なお、最終操業面直上で完形の土師器甕（第24図88）が横転した状況で出土した。

なお、操業面の両脇をトレンチ状に一部掘り下げているが、これは窯体内の調査に先立って、両壁面を一部露出させ窯の主軸設定を行う必要があり、この際に先行して掘削した部分である。結果的に最終操業面で止めることができず、トレンチ状の痕跡として残ることとなった。

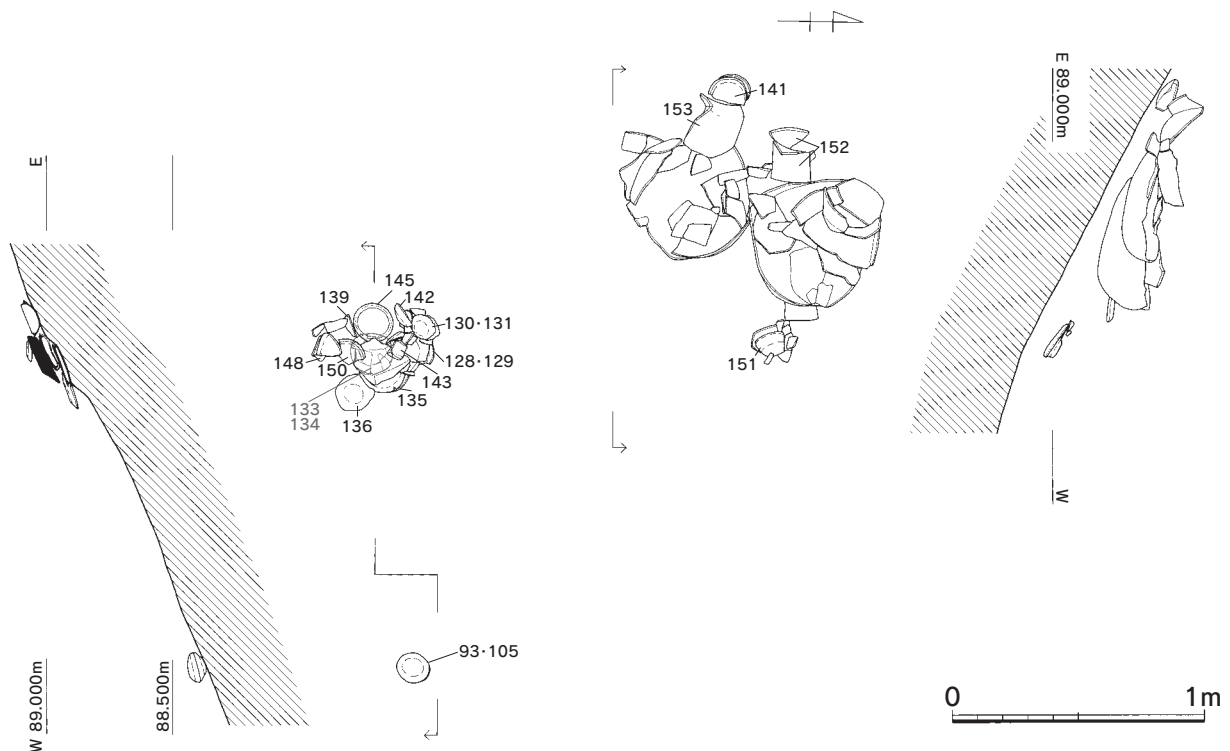
焼成部 長さ6.0m、幅2.3m、床面傾斜角度は30°を測る。両側壁とも直線的な平面プランを呈している。床面には、置き台と呼ばれる半円状の窪みが多く見られる。この置き台は、上方に向かうにつれ顕著になり、規則的に横位に連結するように並んでいる。

また最終操業面からは、比較的多くの須恵器が出土したが、特に注目されるのは極めて焼成不良の一群である。この一群の須恵器は被熱したかどうか迷うほど軟質であり、一部は現地でバインダーを塗布したが、取り上げ時に細片化し、図化できなくなった資料も存在する。これらは、焼成部手前側（横断面B-B'、C-C'間）（第21図）で多く出土し、それ以外においては小片が少量出土するのみであった。出土状況としては、大きく2つのブロックに分けられ、右側のブロックでは大甕と杯身・杯蓋が原位置を若干遊離して出土し、左側のブロックでは杯身・杯蓋のみが一部原位置を保って出土した。特に左側のブロックは注目され、明らかに原位置を遊離した須恵器片と還元硬化した天井片を取り上げたところ、焼成途中の杯身杯蓋が潰れたように組み合わせのまま確認することができた。この組み合わせは、身と蓋が逆位で出土したもの5例（128・129、130・131（132）、133・134、135、136）、身のみ正位で出土したもの1例（145）の計6例があり、焼成時には身と蓋の上下の区別なく窯詰めした可能性が指摘できる。

なお、土層縦断面図を検討すると、左側ブロック付近の天井が最初に崩落していたことが想定でき、その後に被熱した痕跡は認められない。この点とこれ以外の場所で焼成不良須恵器がほとんど出土しないことを考慮すれば、焼成開始後間もなく天井が一部崩落し、これに伴い焼成を中止した後、無傷の焼成途中の須恵器は搬出された可能性が高いといえよう。

また、焼成不良須恵器群から焚口側約1.1mの地点で、焼成が完了した杯身（第26図105）杯蓋（第25図93）がセットとなって出土している（図版8（2））。以前焼成した製品をそのまま置いていた可能性も否定できないが、廃窯に伴う祭祀的な意味合いが想定できるのではないだろうか。

排煙部（第22図） 奥壁上端までの水平長1.6mを測る。燃烧部との接続部には還元硬化した粘土によって段（比高差約20cm）が作り出され、これによって排煙部底面の傾斜角度は緩やかになっ



第21図 3号窯跡焼成不良須恵器出土状況 (1/30)

ている。この段の前面部分（焼成部側）に関しては、激しく被熱し還元硬化しているが、背面側（奥壁側）では、それほど強く被熱した痕跡はない。粘土の質も異なっているようで、段の前面付近以外では、炭化物等を含んだ堆積土をそのまま用いた感さえある。また、排煙部の最前列で多孔式煙道の痕跡が認められた。関連する各痕跡をA～Fと仮称し、解説を加えると次のようになる（第22図）。

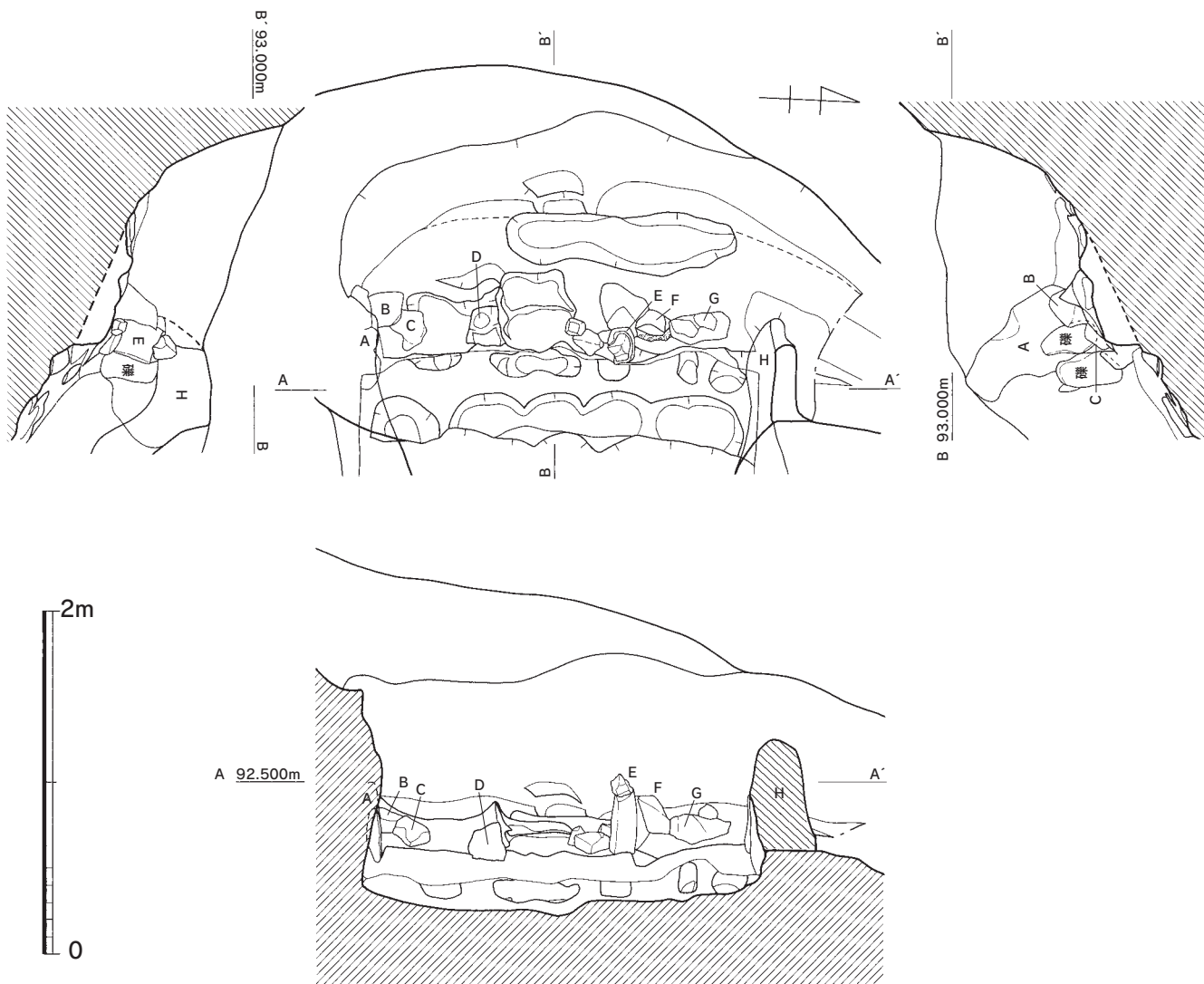
A：左側壁であり、2点の大形の礫を含む貼壁を施している。

B：A－C間を充填するように位置する土で、被熱のためか焼成部側から奥壁側に向けてオリーブ黄色～灰オリーブ色（5Y6/3～4/2）→暗赤褐色土（10R3/3）に変色している。周辺の埋土とは明らかに異なり、A－C間の煙道を閉塞するための用土であった可能性が高い。

C：平面24cm×20cmの不定形、残存高15cmの黄褐色の粘土柱である。粘土の質は、排煙部の段を作り出している粘土と類似している。

D：23cm×20cmの略方形のピット状の窪みで、最深部と上端の比高差は23cmを測る。ピット内は強く被熱しておらず、Eのような礫が外れた痕跡の可能性が高い。また、ピットの背後は、被熱した黄褐色粘土の高まりが確認されており、その礫を補強していたと考えられる。

E：角柱状の礫（花崗岩）で高さ38cmを測る。下端は排煙部の段を形成する粘土によって埋め込まれ、背後はこれと質の異なる黄褐色粘土を用いて補強している。また礫の上面には略円錐形に還元硬化した粘土が遺存し（第23図）、この前面には横位に半円状の圧痕が残されている。煙道および天井構築のために用いられた補強材に起因するものであろう。なお、この角礫の左側には3点の礫が連なっており、本来この上に粘土柱を設け、角礫とともに一つの分煙柱を構成していた可能性もある。

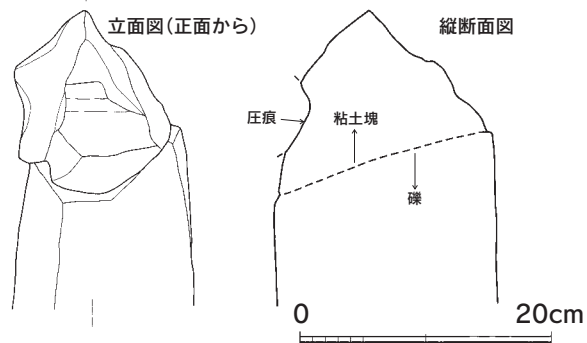


第22図 3号窯跡排煙部実測図 (1/40)

F: E-G間を充填するように位置する土で、被熱のためかBと同様に変色している。周辺の埋土とは明らかに異なり、煙道を閉塞するための用土であった可能性が高い。なお、底面との間には須恵器甕胴部片が挟まるように確認されている。

G: 平面17cm×35cmの略方形を呈する黄褐色粘土柱である。高さ約20cmを測る。

H: 右側壁にあたる。通常の右側壁をそのまま延長・突出させた場所に位置し、地山とは明確に異なった暗赤褐色土（一度被熱した土を使用した可能性高い）を用いて構築している。補強のためか大形の礫を1点含ませている。また調査時に実測できないうちに壊れてしまったが、Gに向かっていたアーチ部分が一部観察された（図版14(1)）。なお、平面図を見てわかるとおり、この不自然な側壁延長部がなければ、煙道と排煙部に取り付く溝の位置の整合が取れない。こうしたことから判断して、この側壁は、窯体改修（焼成部



第23図 3号窯跡排煙部柱状礫実測図 (1/6)

を排煙部側に拡張)に伴い、構築されたものと考えておきたい。

A～Hの煙道部の状況をまとめると、C・D・E・Gは分煙柱あるいはその痕跡と考えられ、A－C間、C－D間、D－E間、E－G間、G－H間の5つの煙道を有する多孔式煙道であったと想定できる。また、煙道部付近については、半地下式であった点も興味深い。

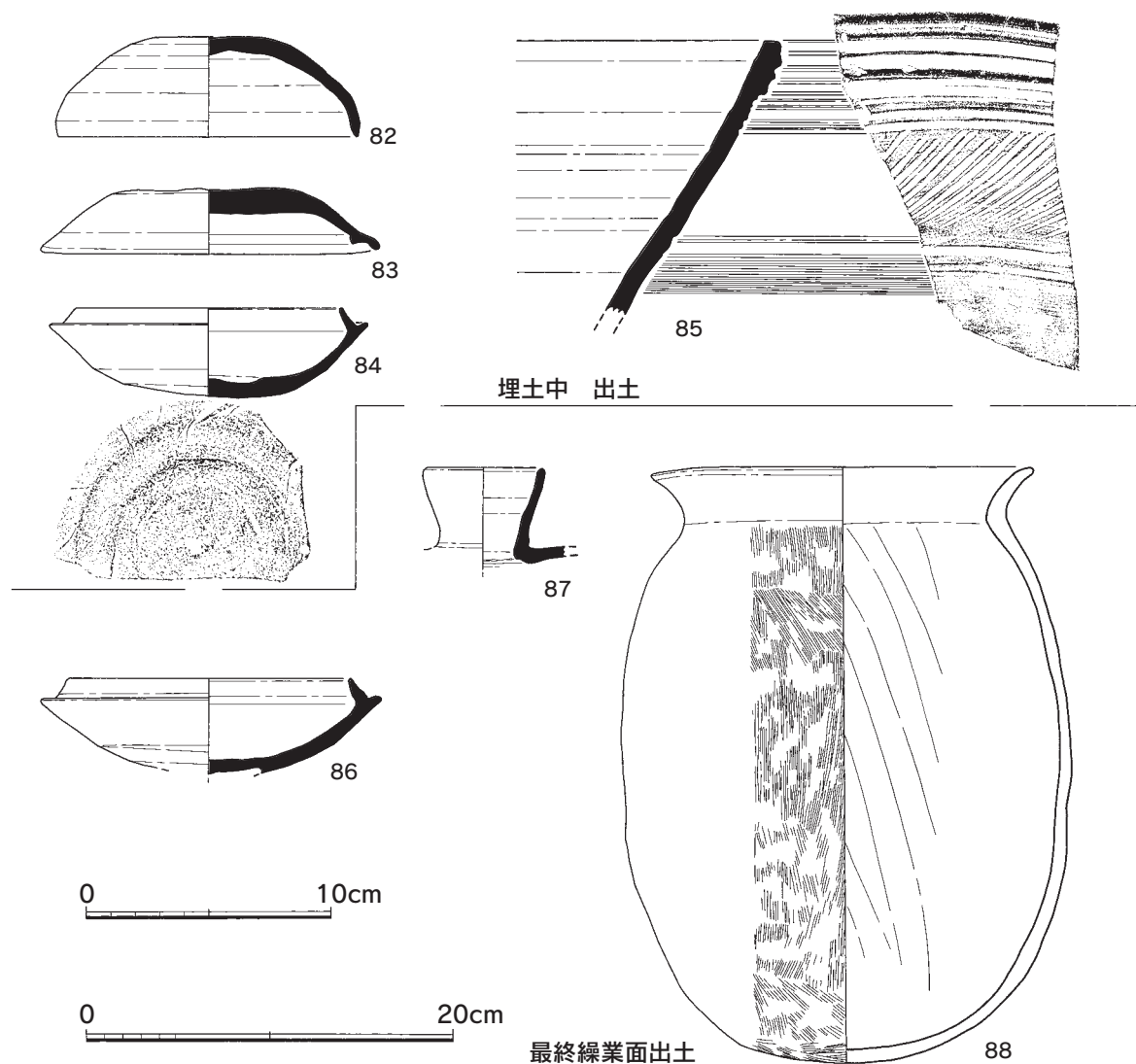
溝 排水溝や作業路と呼ばれる排煙部に取り付く「溝」は、右下方に3.9mの長さで確認された。深さは最大85cmを測り、先端に向かうにつれ浅くなる。埋土下層は基本的に被熱したと考えられる赤褐色系土である。本来この部分では被熱しないことを考えると、排煙部で被熱した堆積土が再堆積（自然流入、人為的移動）したものと想定される。

最終操業面トレンチ 燃焼部から灰原の一部にかけて、当初操業面の状況や灰層の厚さを確認するための幅約30cmのトレンチを設定し掘削した。その結果、最終操業面下に3枚の薄い灰層と硬化層を確認し、その下層に窯体内埋土を思わせるにぶい黄橙色土、さらにその下層で、4枚の灰層と硬化層を把握した。最終的に当初操業面を確認したのは、最終操業面から焼成部側で72cm、灰原側で183cmの深さであった。さらに興味深いのは、トレンチほぼ中央部で確認した大形の天井片であり、下層の灰層開始位置とを勘案すれば、当初の窯の天井は概ねこの位置まで伸びていた可能性が極めて高い。なお、土層図を見てわかるとおり、危険防止のため完掘には至っておらず、トレンチ幅が狭いため土層観察も十分とは言い難い。将来の整備に向けての再調査が必要であろう。

灰原 先述したトレンチ以外の調査は行なっていない。この結果、このトレンチ内での灰層の最大厚が86cmであることが確認できたが、灰原の範囲等に関しては全く不明である。なお、ここから出土した炭化材については樹種同定を行なっており、その結果は58～60ページに掲載した。

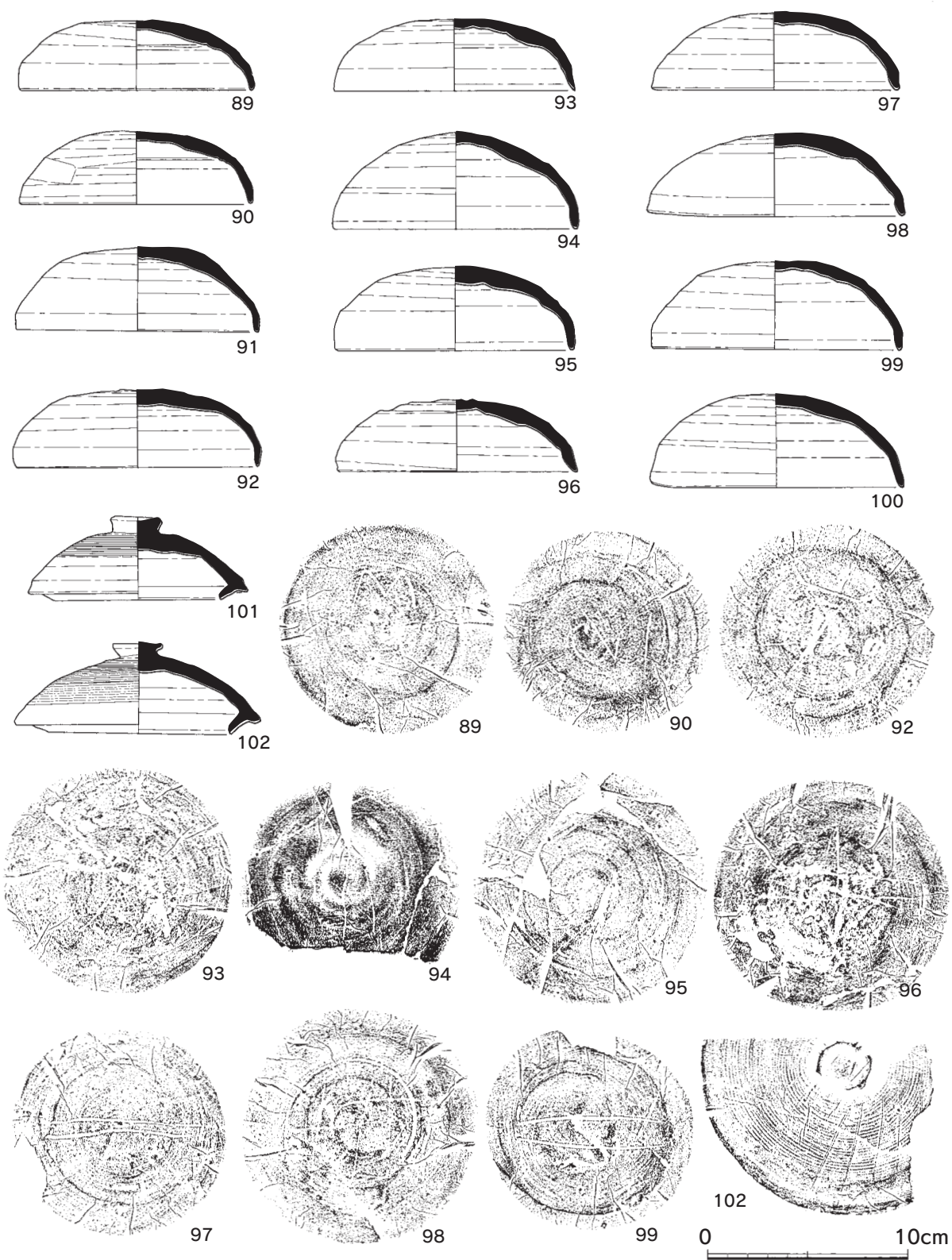
遺物(第24～32図) 82～88は燃焼部出土の遺物である。82・83は杯蓋。82は杯H。83は杯B。天井部の器壁が厚く、他の須恵器より焼成不良。出土状況は図版7(3)(甕の左側)にあるとおり、最終操業面より浮いた状況で出土している。84は杯身。外面に降灰が確認される。85は甕。やや粗雑な斜線文を比較的密に施す。86は高杯。脚部との接合面で剥落している。87は平瓶。体部の閉塞板が一部残っている。88は土師器甕。灰原との境界付近の最終操業面直上において、斜めに傾いた状態で出土した。外面は細かな縦位のハケメ、内面はケズリ調整を施す。胴部下位以下では二次被熱の痕跡が顕著に認められる。

89～153は焼成部出土の遺物である。89～100は杯蓋。口径分布は11.6cm～12.7cmの範囲内(平均12.4cm)で、特に12cm台前半に集中する。外面2/5以上の範囲で回転ヘラケズリを施す。91・100を除いて、外面にヘラ記号を有し、そのバリエーションは豊かである。なお、93は第21図(図版8(2))に示すとおり105と身蓋セットになって最終操業面直上から出土した。ヘラ記号も同種である。94は天井部内面に4条の条線で構成されるヘラ記号状の痕跡があるが、他のヘラ記号と比べるとシャープさに欠け異質な感がある。101・102は壺類の蓋であろうか。当初杯蓋とも考えたがつまみの形状等から判断した。カキメを施す。102はヘラ記号を有する。103～113は杯身。受部径の分布は、12.1～15.0cm(113を除けば、12.1～13.7cm)の範囲(平均13.0cm)となる。外面は2/3～1/3回転ヘラケズリを施している。103・109・110は底部を穿孔した「穿孔杯」と呼ばれるもの。特に110の穿孔部は正円に近く切り口の処理も丁寧に行なってい

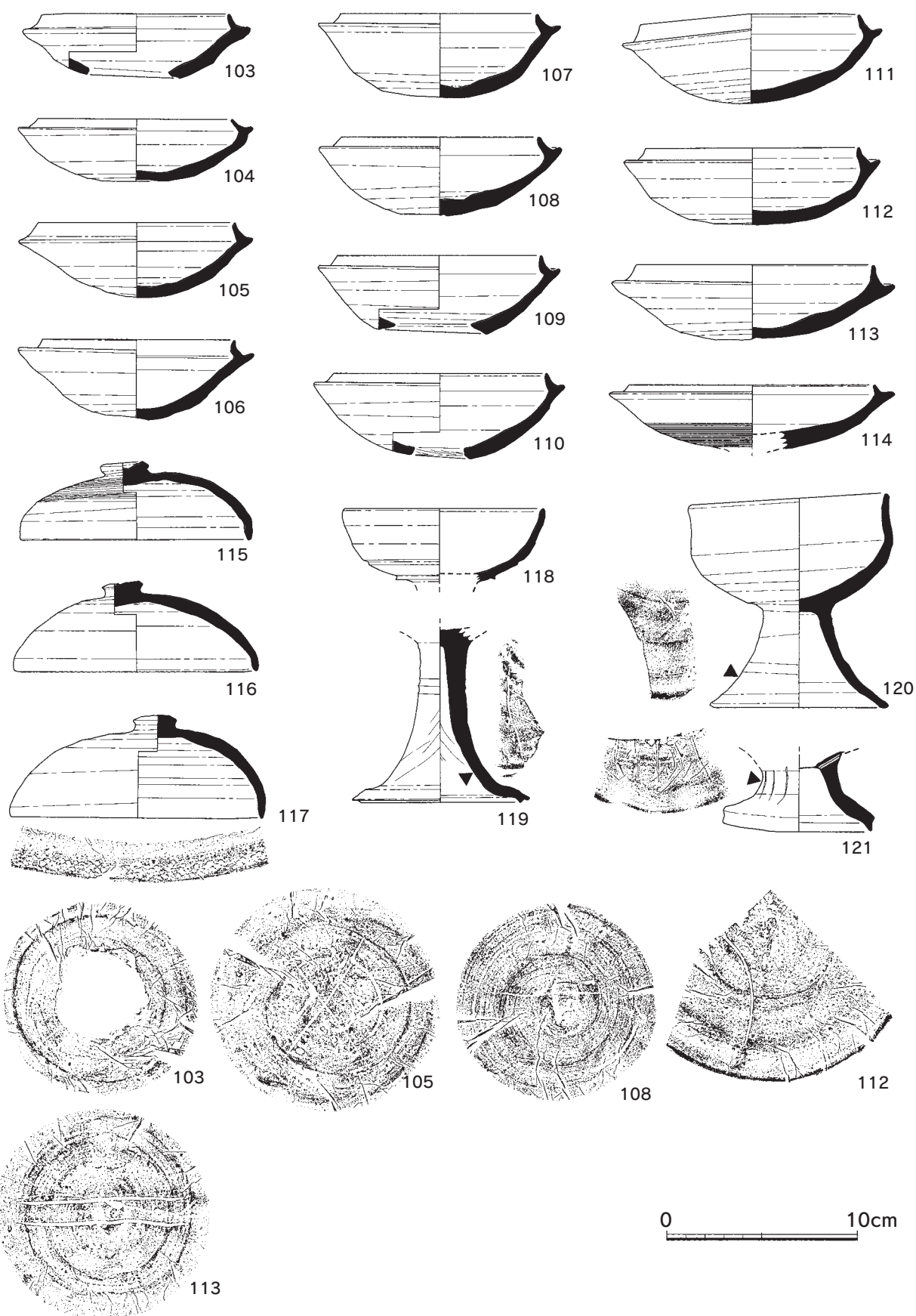


第24図 3号窯跡燃烧部出土遺物実測図 (85・88：1/4、その他：1/3)

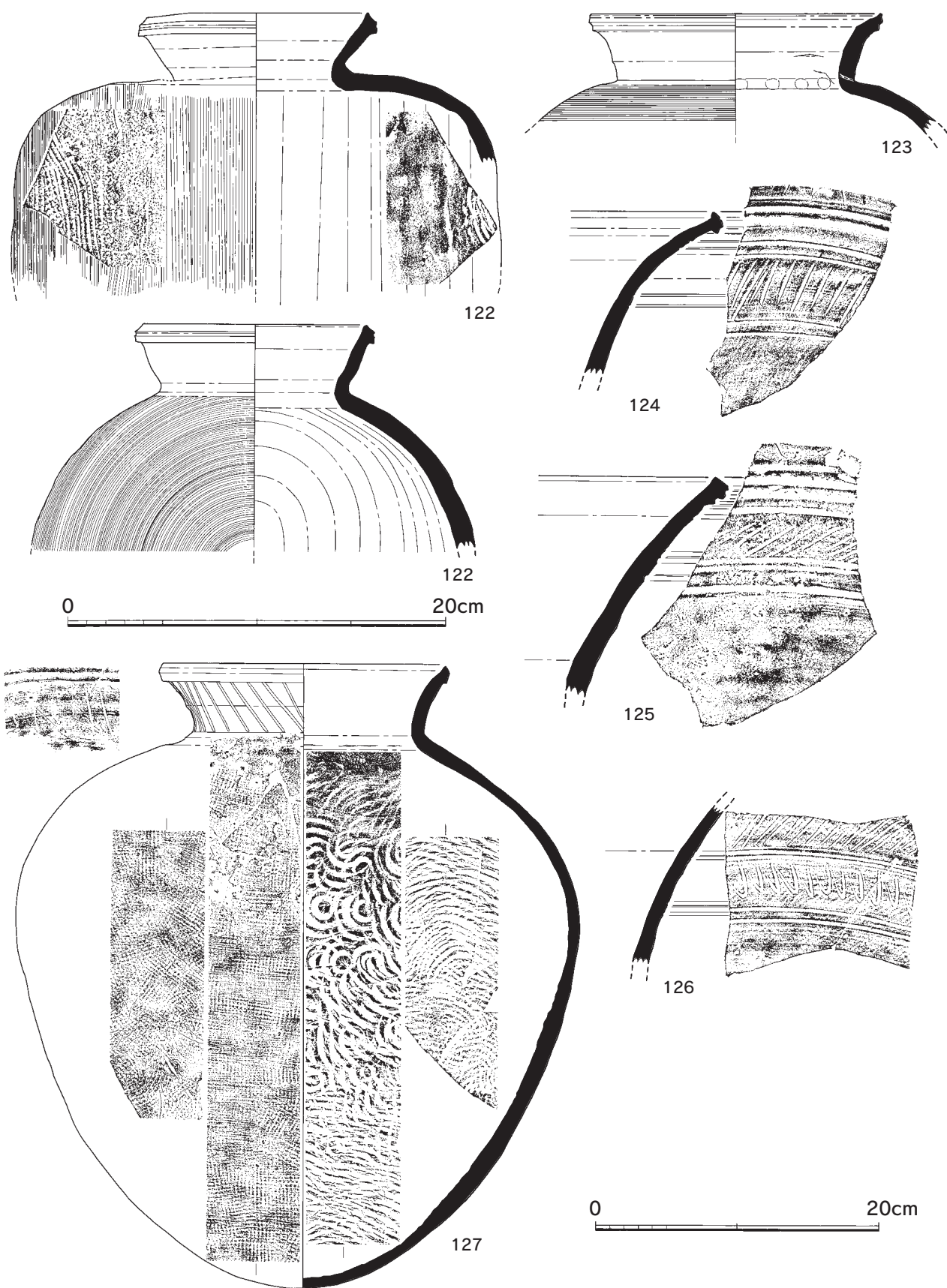
る。107の外面には顕著に降灰が認められる。103・105・108・112・113はへら記号を有する。114は有蓋高杯身であろうか。蓋の可能性も否定できない。115～117は有蓋高杯蓋。いずれも焼け歪みのためか、つまみの位置が中心からずれている。117の口縁部外面には、ナデ調整の後に約1cmの幅で格子目タタキ状の圧痕が巡る。118～120は無蓋高杯身。118の器壁は薄手で、体部最下位の稜は著しく強調されており特徴的。119は降灰の様子から横倒しの状態で焼成していたと考えられる。119は脚部内面に、120は脚部外面にへら記号を有する。121は脚部。壺類であろうか。外面に5条の平行直線によるへら記号（102と類似）を施す。122は横瓶。外面に一部タタキ状の痕跡、内面に一部当て具痕が観察される。123～127は甕。124・125は斜線文を施すが横位沈線に先行との先後関係は判然としない。126は斜線文と波状文（左右反転した「し」を連続するように右から左へ）を施す。127はほぼ全形が知れる資料で、やや胴部上位に最大径を持つ。外面は擬格子タタキの後、胴部中位にカキメ、内面は同心円当て具痕が左から右の順に残されている。頸部に斜線文が施されるが、全周は巡らず、約1/2は無文のままである。なお、この類の小形甕に斜線



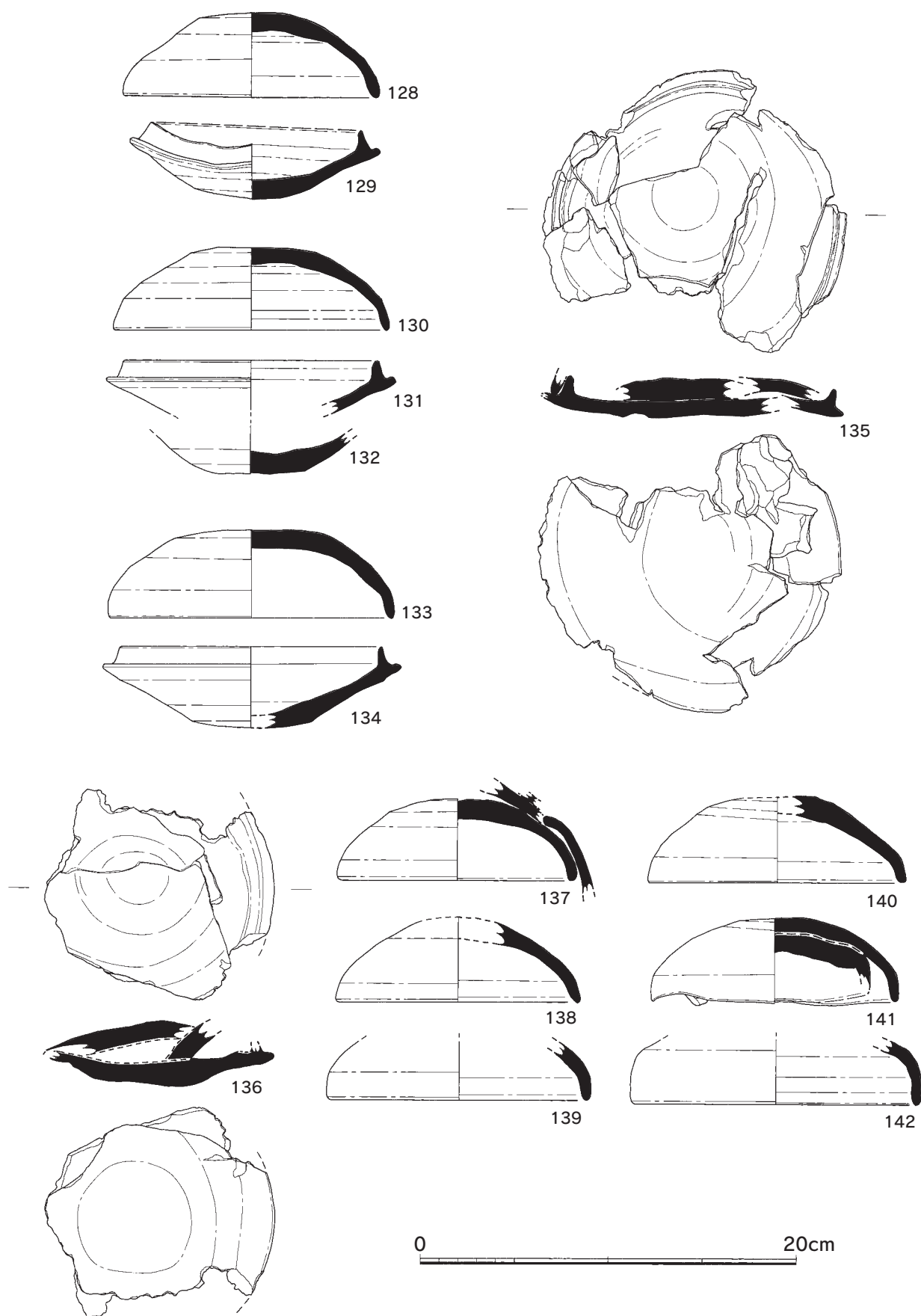
第25图 3号窑迹烧成部出土遗物实测图 (1) (1/3)



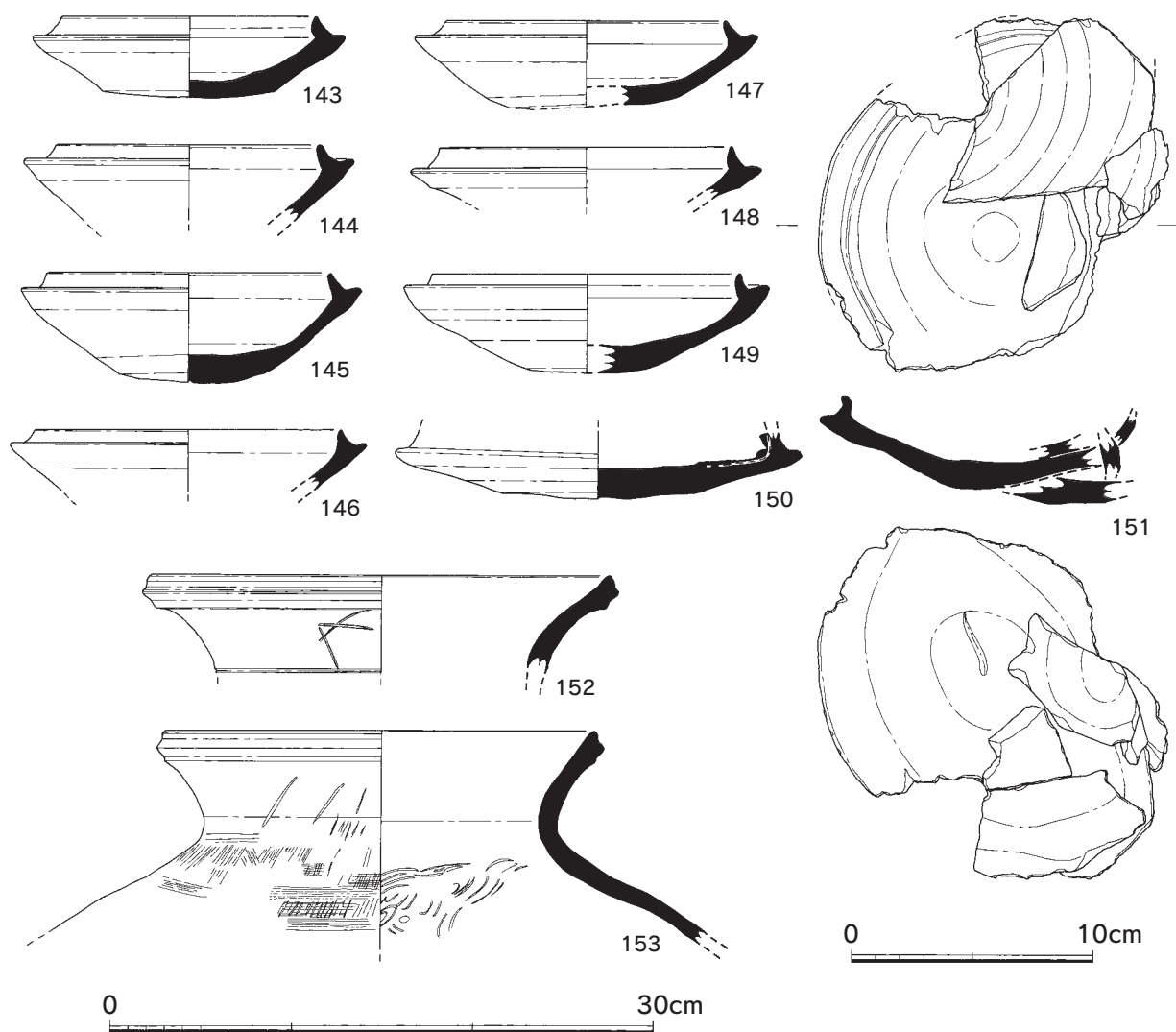
第26図 3号窯跡焼成部出土遺物実測図 (2) (1/3)



第27図 3号窯跡焼成部出土遺物実測図 (1) (122・123: 1/3、その他: 1/4)



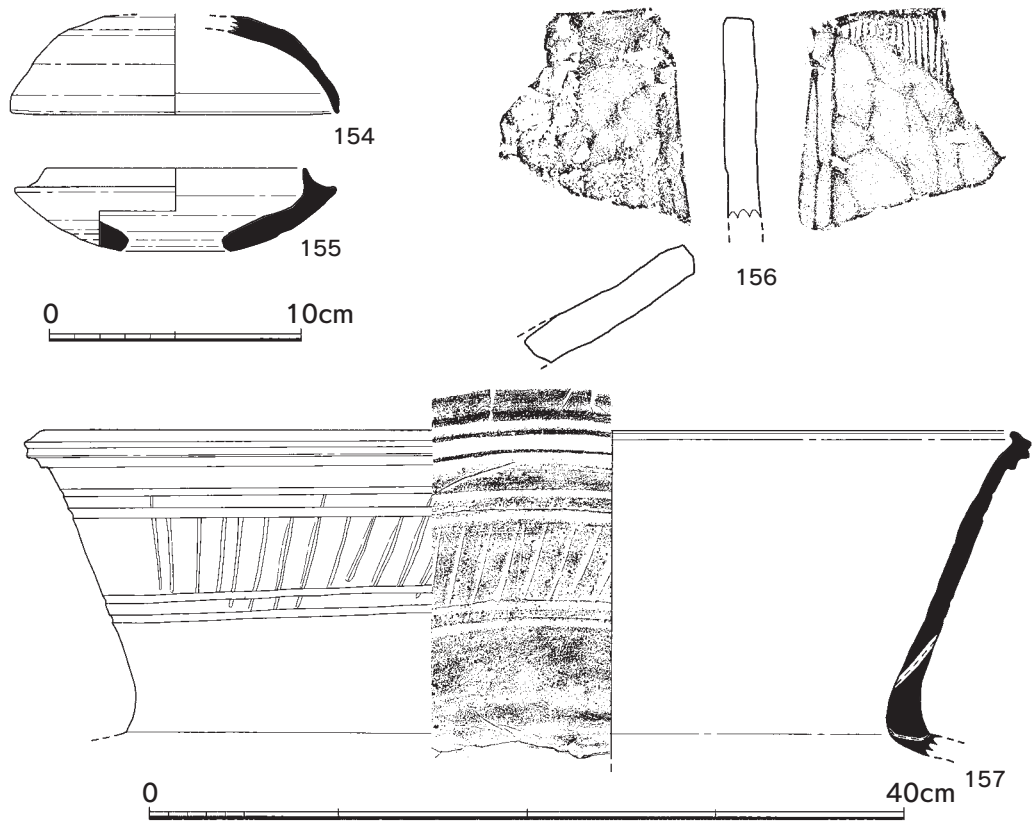
第28図 3号窯跡焼成部出土遺物実測図（4：焼成不良須恵器）（1／3）



第29図 3号窯跡焼成部出土遺物実測図（5：焼成不良須恵器）（152・153：1/4、その他：1/3）

文を施すことは稀で、さらに斜線文が右下がりである点も一般的ではない。

128～153は極めて焼成不良の須恵器の一群である。128～136・145はほぼ原位置を保って出土している。128・129、130・131（132）、133・134はそれぞれセットとなって出土した杯身・杯蓋。128は遺存状況が良好な杯蓋で、外面約1/2の範囲で回転ヘラケズリを施す。129は杯身。土圧のために変形している。身（129）と蓋（128）が逆位の状態で出土した。130は杯蓋。外面1/2の範囲に回転ヘラケズリを施す。131・132は杯身。本来同一個体であるが、取り上げの際に細片化し、接合できなかった。身（131・132）と蓋（130）が逆位の状態で出土した。133は杯蓋。134は杯身。身蓋とも外面1/2の範囲に回転ヘラケズリを施す。身（134）と蓋（133）が逆位の状態で出土した。135・136は杯身と蓋が接着した資料。土圧のため変形し、全体が平坦化している。いずれも身と蓋が逆位となって出土した。137～142は杯蓋。137は外面に他個体の可能性が高い杯蓋が2片接着している。原位置を遊離して出土した。140は外面約2/5の範囲で回転ヘラケズリを施す。141は内面にも杯蓋が入れ子状に接着している。原位置を遊離し内面を上に向けた状態で出土した。143～151は杯身。143は接合できる口縁部片が小さく、復元径に確証がない。145

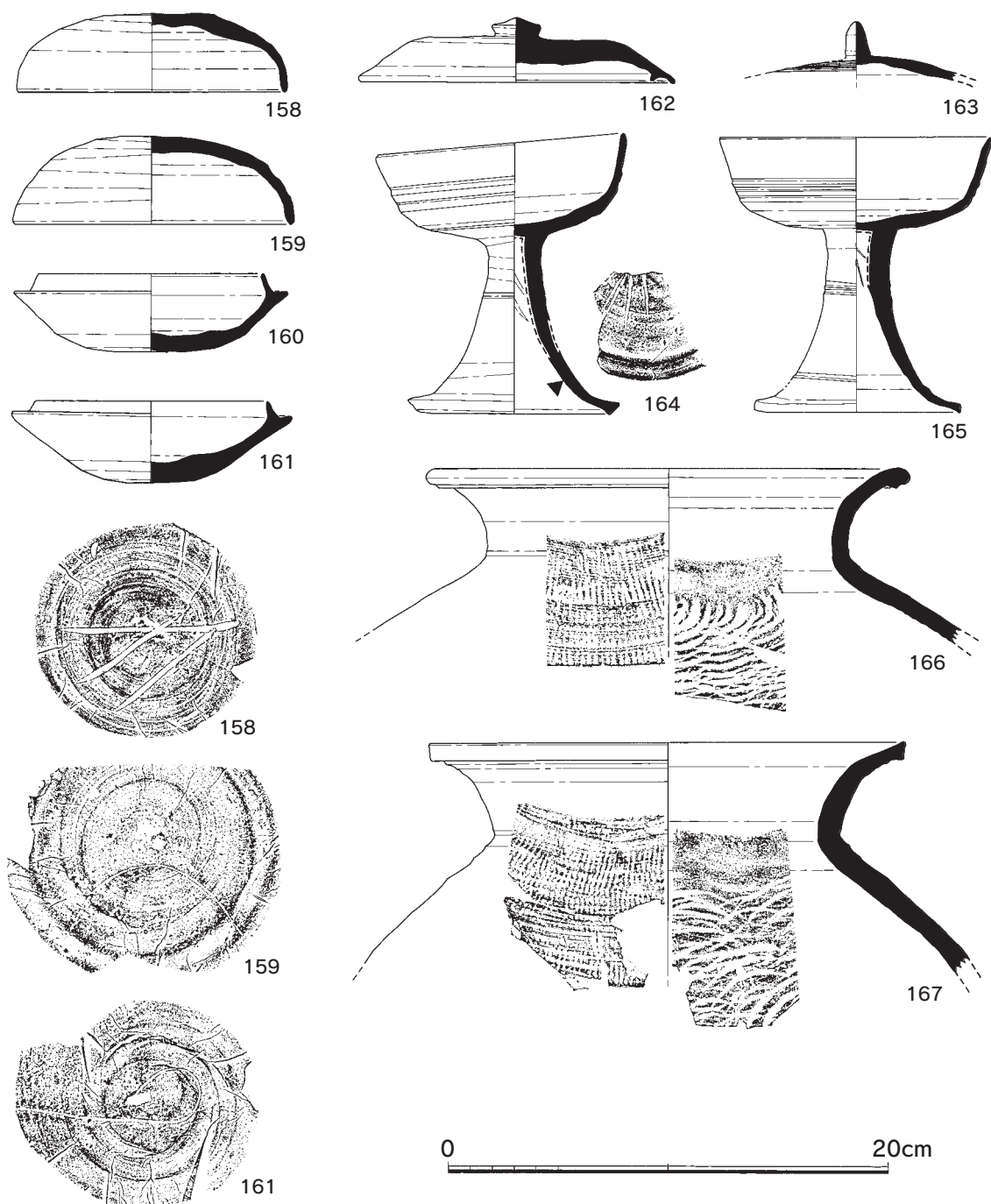


第30図 3号窯跡排煙部出土遺物実測図(1)(154・155:1/3、その他:1/4)

は非常に遺存状況が良く、外面約1/2の範囲に回転ヘラケズリを施す。内面を上に向け、原位置を保って出土した。蓋は確認できなかったが、元々蓋なしで焼成していたとは考え難い。147・149は外面約1/2の範囲に回転ヘラケズリを施す。150は土圧のため変形している。151は3/5残存する杯身と1/4残存する杯蓋で主に構成され、その他数片の焼成不良須恵器片が接着している。原位置を遊離して出土した。152・153は甕。同一個体の可能性もある。152の頸部にはヘラ記号が施される。153の頸部にも斜線文状の痕跡が微かに観察されるが、判然としない。なお、甕の胴部片は多量に出土しているが、十分に接合できなかったため図化していない。

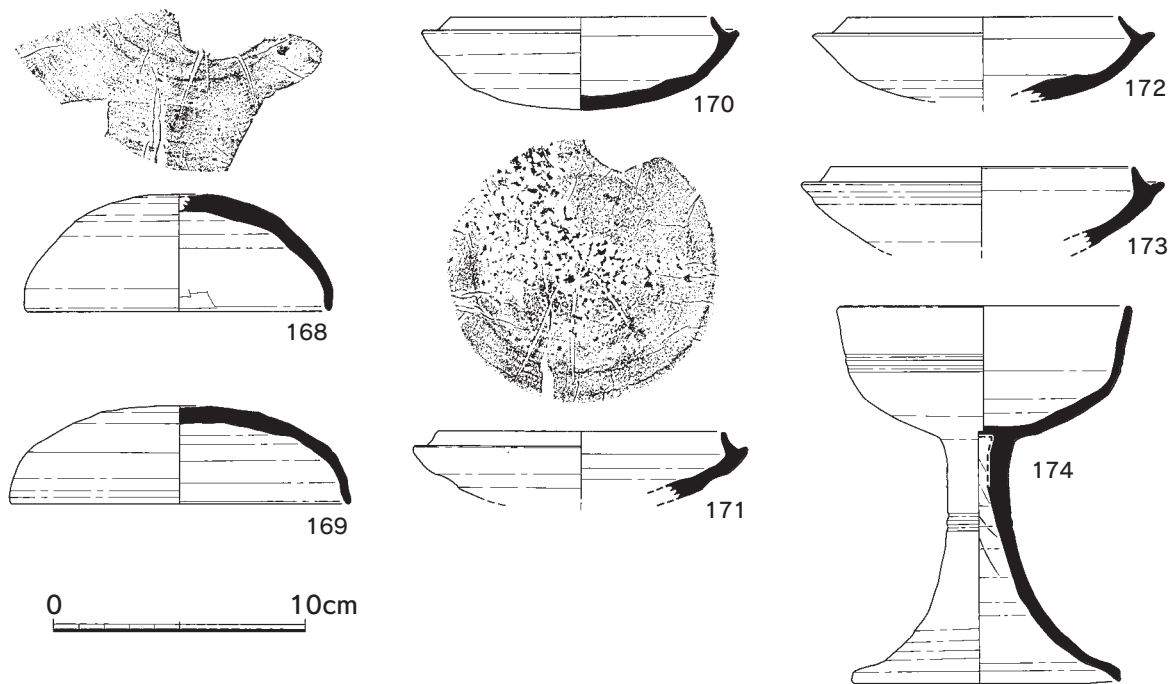
154～157は排煙部出土の遺物である。全て埋土内から出土した。154は杯蓋。155は杯身。底部を穿孔している。156は平瓦。凸面は平行タタキの後ケズリ、凹面に布目痕は確認できない。157は甕。横位沈線に先行して斜線文が施される。約27cm×18cmの大形の破片で、意図的に排煙部に持ち込まれた可能性も否定できない。

158～167は灰原上面出土の遺物である。158・159は杯蓋。ともにヘラ記号を有する。159は外面に降灰が認められる。160・161は杯身。162は杯蓋(杯B)。天井部の器壁が厚い。163は高杯蓋。つまみの形状は乳頭形に近い。164・165は無蓋高杯。164は脚部内面にヘラ記号が認められる。165は降灰の様子から杯部を若干高くした斜めの状況で焼成されていたと想定される。166・167は甕。内面の同心円当て具痕は、166は上方に向け重ね、167は下方に向け重ねた状況が観察できる。



第31図 3号窯跡灰原上面出土遺物実測図 (1/3)

168～174は最終操業面トレンチ出土の遺物である。168は25層出土の杯蓋。口径12.1cm、外面約1/2の範囲に回転ヘラケズリを施す。169は33層出土の杯蓋。口径13.5cm、外面は約1/2の範囲に回転ヘラケズリを施す。170は34層出土の杯身。受部径12.6cm、外面は約2/3の範囲に回転ヘラケズリを施す。171は34層出土の杯身。受部径13.3cm。172は35層出土の杯身。受部径13.5cm。173は40層出土の杯身。受部径14.6cm。174は34層出土の無蓋高杯。杯部は焼け歪む。降灰の様子から杯部をやや斜め上方にした状態で焼成されたと想定できる。以上が最終操業以前の遺物となるが、資料は少ないながらも、最終操業面出土の杯身・蓋と比べ、若干ながら法量が大きい傾向が指摘できよう。



第32図 3号窯跡最終操業面トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

(7) 4号窯跡 (第18・33図、図版15・16)

丘陵先端付近の東斜面、3号窯跡の北側に隣接して位置し、標高は88.5m～91.7mを測る。3号窯跡とともに12トレンチを拡張する中で確認された。排煙部のみ調査を行い、それ以外は上面検出に留めた。検出面での全長6.5m、最大幅1.5mを測り、5基の窯跡の中で最も規模が小さい。平面形が歪であるが、これは天井が部分的に残存した結果であると考えられ、表層のバイラン土が窯体内に落ち込んでいることと合わせ、地下式窖窯であったことがわかる。

排煙部 地山を削り貫いた2孔の多孔式煙道が確認された。各煙道の幅は約30cm、壁面は比較的まっすぐ立ち上がるが、天井の高さ・形状は明確でない。煙道部の傾斜角度は約40°を測る。基本的に煙道部の底面・壁面は白色～灰色に還元硬化しているが、部分的に煤けたように黒化している箇所があった。

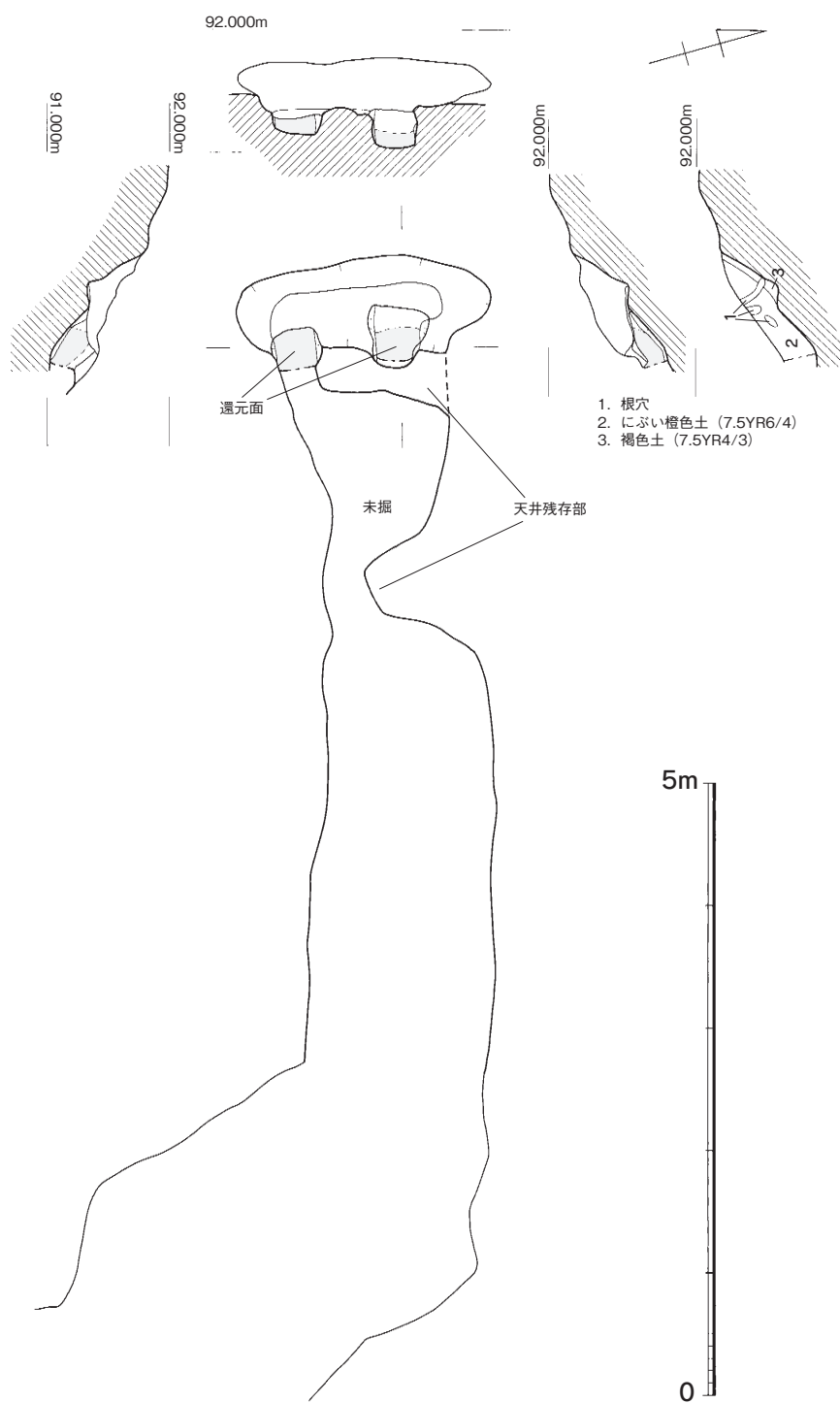
排煙部に通常取り付く溝は、削平のためか確認できなかった。

灰原 厚さ・範囲とも、未確認である。現時点では、比較的浅く、範囲もあまり広がらない可能性が高い。

遺物 (第34図) 窯体内および灰原を掘り下げていないため、確実に4号窯跡に伴う遺物はないが、175～189は、表土の掘削、遺構検出時等に出土した遺物である。

175～181は4号窯跡検出の際に出土した資料で、遺構埋土から一部露出した状況ではなく、あくまで遺構面より上層(表土)からの出土と捉えたものである。175・176は杯蓋(杯H)。外面に回転ヘラケズリを施し、ヘラ記号を有する。177は杯身(杯H)。外面に回転ヘラケズリを施す。178・179は杯蓋(杯B)。180は杯身(杯B)。高台はやや外側に踏ん張る。181は高杯。178～181は総じて焼成不良といえる。

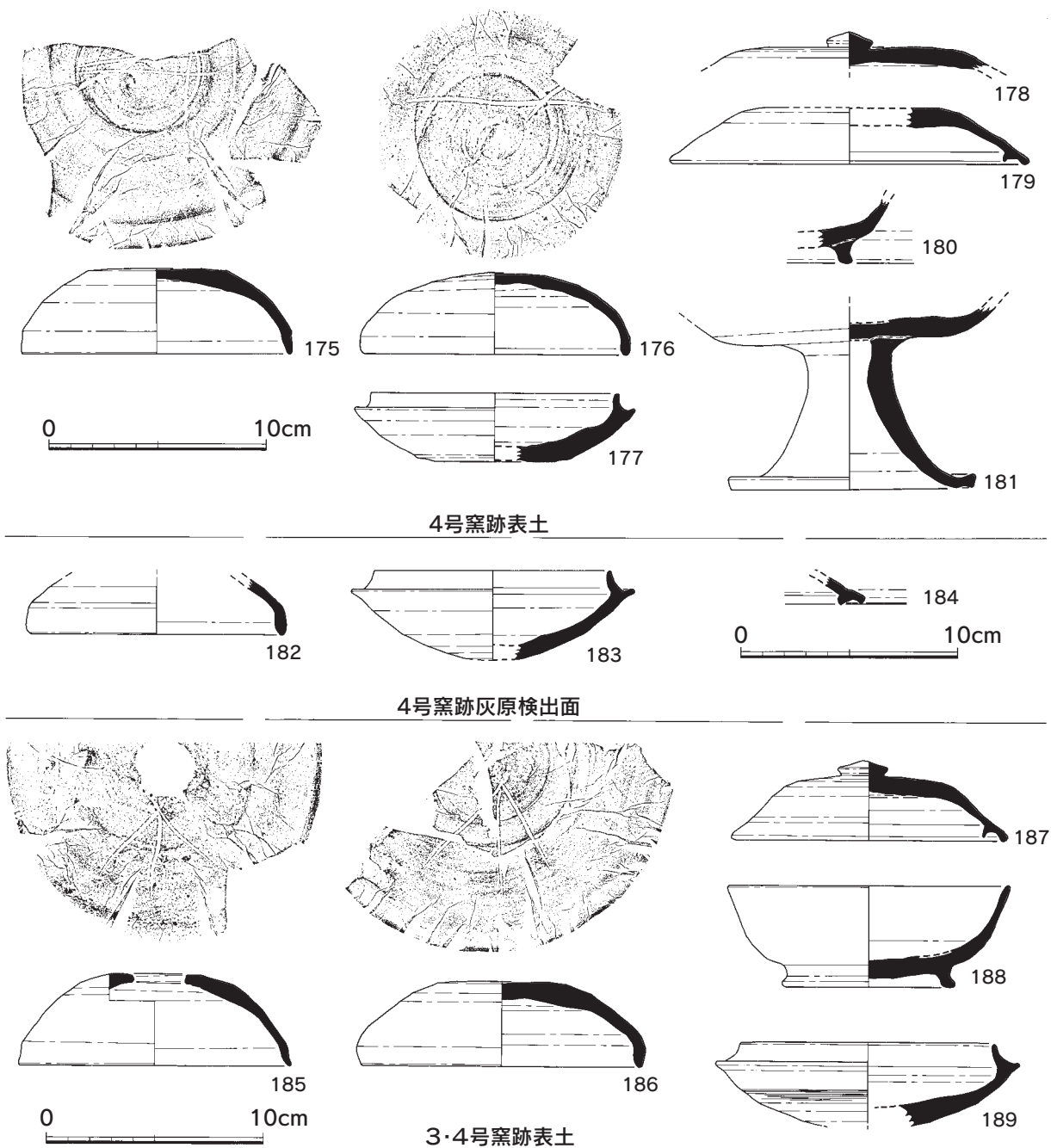
182～184は4号窯跡灰原の検出面において出土した遺物であるが、南側にある3号窯跡灰原の



第33図 4号窯跡実測図 (1/60)

遺物を含んでいる可能性が高い。182は杯蓋 (杯H)。183は杯身 (杯H)。両資料とも口縁部が小片のため、復元径に確証がない。184は杯蓋 (杯B)。焼成不良。

185～189は、12トレンチを拡張しながら3・4号窯跡を検出する際に、遺構面より上層で出土した資料である。185・186は杯蓋 (杯H)。両資料とも三叉状のヘラ記号を有する。185は天井部に穿孔を有し、穿孔部は丁寧に処理している。187は杯蓋 (杯B)。188は杯身 (杯B)。高台



第34図 4号窯跡表土・灰原検出面出土遺物実測図 (1/3)

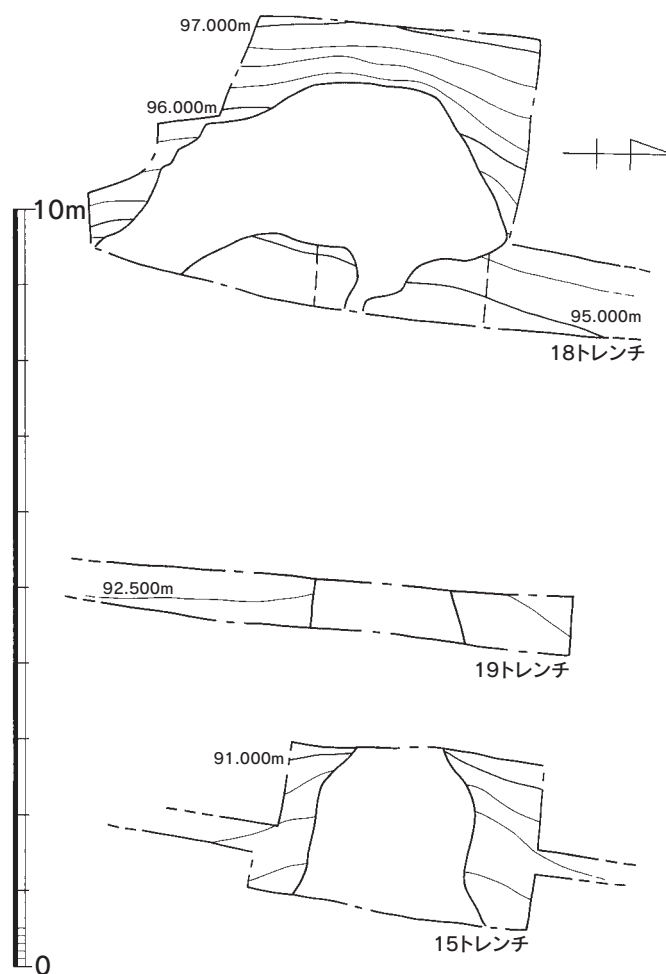
はやや外側に踏ん張る。189は高杯であろうか。カキメを有する。186・189を除きやや焼成不良。

以上が4号窯跡に関連する資料であるが、杯類は大きく2種（杯H、杯B）認められ、このうち杯Hに関しては、3号窯跡出土須恵器と酷似しているため混在と判断すべきであろう。本来の4号窯跡の遺物は178～181・184・187・188と考えられ、またこれらが総じてやや焼成不良であることも興味深い。

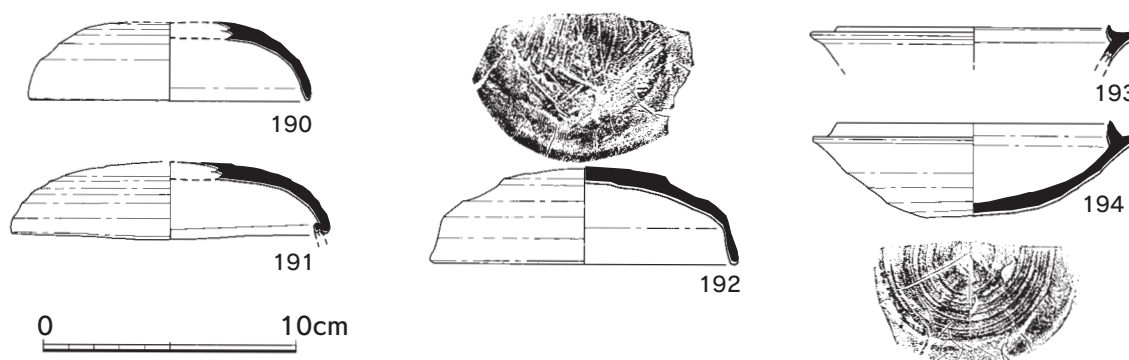
(8) 5号窯跡 (第35図、図版17・18)

3号窯跡の南側約20mの丘陵東斜面に位置し、標高約91m～97mを測る。平成17年度調査の15・17～19トレンチで検出した。窯体の主軸は、等高線に概ね直交する。トレンチ調査であった上に、上面検出に留めており、窯体構造等の詳細は不明である。検出面の状況では、燃焼部幅2.0m、全長10.5mの規模を測る。19トレンチの状況から天井部の大部分は崩落しているものと推測される。なお、現況を見る限り、排煙部の幅が広いように感じられ、何らかの窯体改修の結果なのかもしれない。窯体の下方には灰原が検出(17トレンチ)されているが、堆積状況、範囲ともに確認できていない。

遺物 (第36図) 窯体内を掘り下げておらず、確実に5号窯跡に伴うとは判断できないが、190～194は関連する15・17～19トレンチで出土した遺物である。190～192は杯蓋。190は外面約1/2の範囲で回転ヘラケズリを施す。17トレンチ出土。191は天井部外面に回転ヘラ切り後ナデ調整を行なう。やや焼け歪む。15トレンチ出土。192は天井部外面を回転ヘラ切り後、粗いナデ調整を行なう。ヘラ記号を有する。15トレンチ出土。193・194は杯身。193は小片のため、復元口径に確証がない。17トレンチ出土。194は外面約1/3の範囲で回転ヘラケズリを施す。18トレンチ出土。



第35図 5号窯跡遺物実測図 (1/100)



第36図 5号窯跡出土遺物実測図 (15・17・18トレンチ) (1/3)

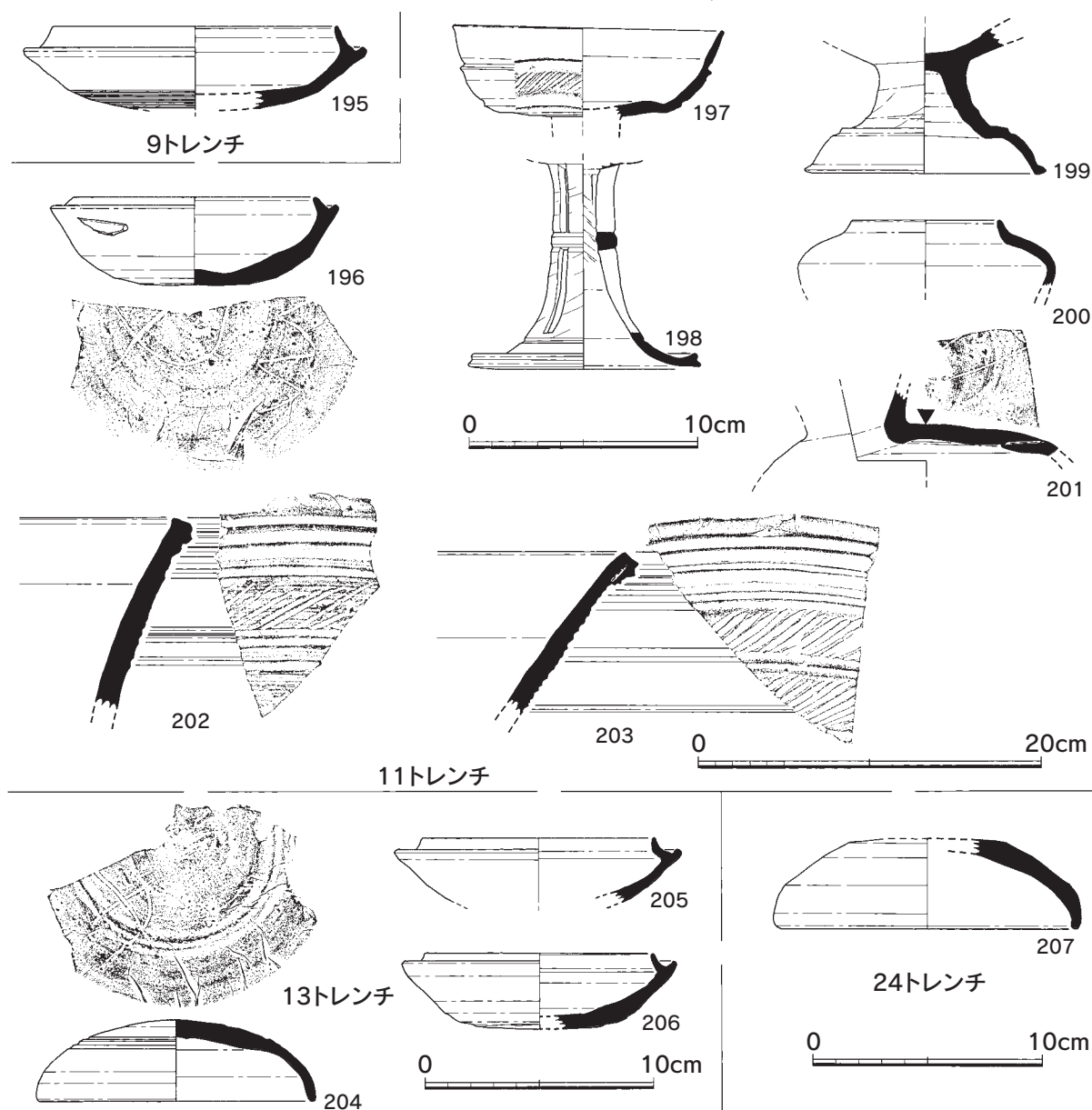
(9) 7トレンチ (第4図、図版20)

丘陵尾根上に設定した2.0m×2.0mのトレンチである。現地表下20～30cmで黄橙色土(遺構検出面)に達したが、遺構は検出できなかった。2点の須恵器細片が出土した。

(10) 8～11トレンチ (第4図、図版20・21)

1・2号窯跡確認後に調査したトレンチで、1・2号窯跡の南側に位置する。最初に設定した8・9トレンチを調査した結果、炭化物を含む黒褐色土が確認できたことから、この上方に窯跡・灰原の存在を予測し、9トレンチの上方に10トレンチを、さらに上方に11トレンチを設定し、調査を行った。この結果、10・11トレンチともトレンチの北側を主体として、灰原の一部と考えられる黒色土を確認した。8トレンチで80点以上、9～11トレンチで各300点以上の須恵器が出土した。甕片が圧倒的に多く、少量の杯身・杯蓋等を含む。灰原およびこれに含まれる須恵器は、後(平成16年度)に斜面上方で確認された3・4号窯跡(特に3号窯跡)に由来するものと考えられる。

遺物 (第37図) 195は9トレンチ出土の有蓋高杯。外面約2/3の範囲にカキメをめぐらす。



第37図 9・11・13・24トレンチ出土遺物実測図 (202・203: 1/4、その他: 1/3)

196～203は11トレンチ出土。196は杯身。体部外面に杯蓋の可能性が高い口縁部片が釉着している。外面2ヶ所にヘラ記号を有する。197は無蓋高杯。器壁は薄い。2条の横位沈線下端の稜を強調し、その沈線間には密に斜線文を施す。198は高杯脚部。2段透かしを有する。199は壺類の脚部であろうか。200は短頸壺。降灰の状況から蓋付きで焼成されていたことがわかる。201は平瓶。径6.9cm程度の粘土板で一旦胴部を閉塞し、その閉塞部の左端を中心として径約3.0cm程度の穿孔を行い、そこに口頸部を取り付けた状況が確認できる。天井部外面にヘラ記号を有する。202・203は甕。斜線文を施す。203は上段の横位沈線→上段の斜線文→下段の横位沈線→下段の斜線文の順に施文された可能性が高い。

(11) 13・14トレンチ (第4図、図版22)

3・4号窯跡確認後、約30m南東側に設定したトレンチである。14トレンチ南端で灰原に近似した黒褐色土の堆積が確認されたほか、13トレンチから150点以上、14トレンチから120点以上の須恵器片が出土した。甕片が圧倒的に多く、少量の杯身・杯蓋等を含む。これらは、斜面上方で確認された5号窯跡に由来するものと考えられる。

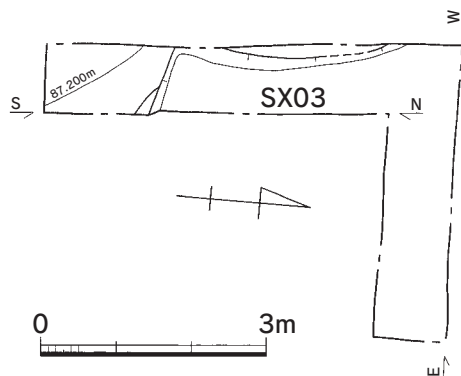
遺物 (第37図) 204～206は13トレンチ出土。204は杯蓋。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整。205・206は杯身。外面に降灰が確認される。

(12) 20～22・25トレンチ (第4図、図版23)

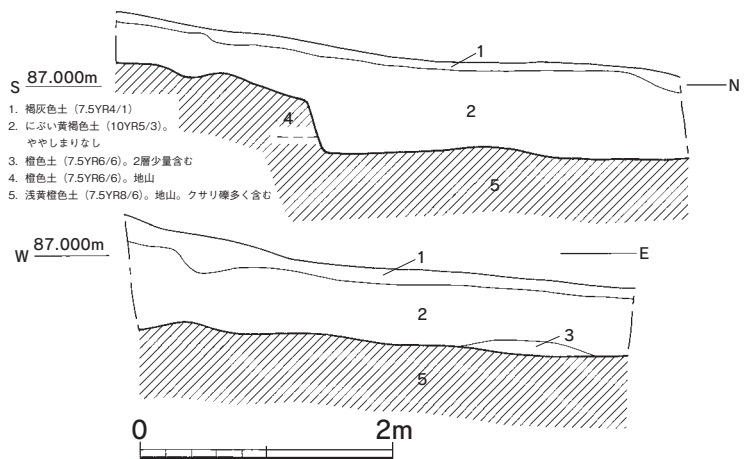
20～22トレンチは、5号窯跡確認後、さらに南側の窯跡の広がりを把握するためのトレンチで、3～5号窯跡焚口とほぼ同じ等高線上に設定した。22トレンチの北端付近では、遺構検出面直上に若干の炭化物の分布が見られたため、トレンチ幅を拡張し、さらに斜面上方に25トレンチを設定・調査したが、更なる炭化物の広がりや遺構の存在は確認できなかった。20トレンチで5点、21・25トレンチで各1点の須恵器片が出土し、22トレンチでは遺物は出土しなかった。

(13) 23トレンチ (第4図、図版24)

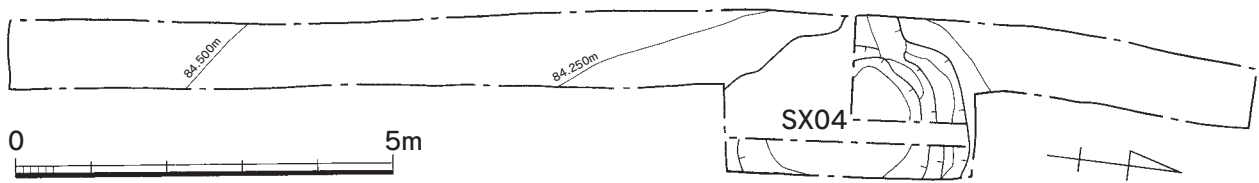
5基の窯跡が分布する斜面の下方には緩斜面～平坦面が見られ、さらにその下方には急斜面が展開している。当該急斜面については、当初から旧地形ではないと想定していたが、状況を確認するために斜面下端にトレンチを設定した。現地表下55cmで遺構検出面に達したが、遺構・遺物とも確認できなかった。



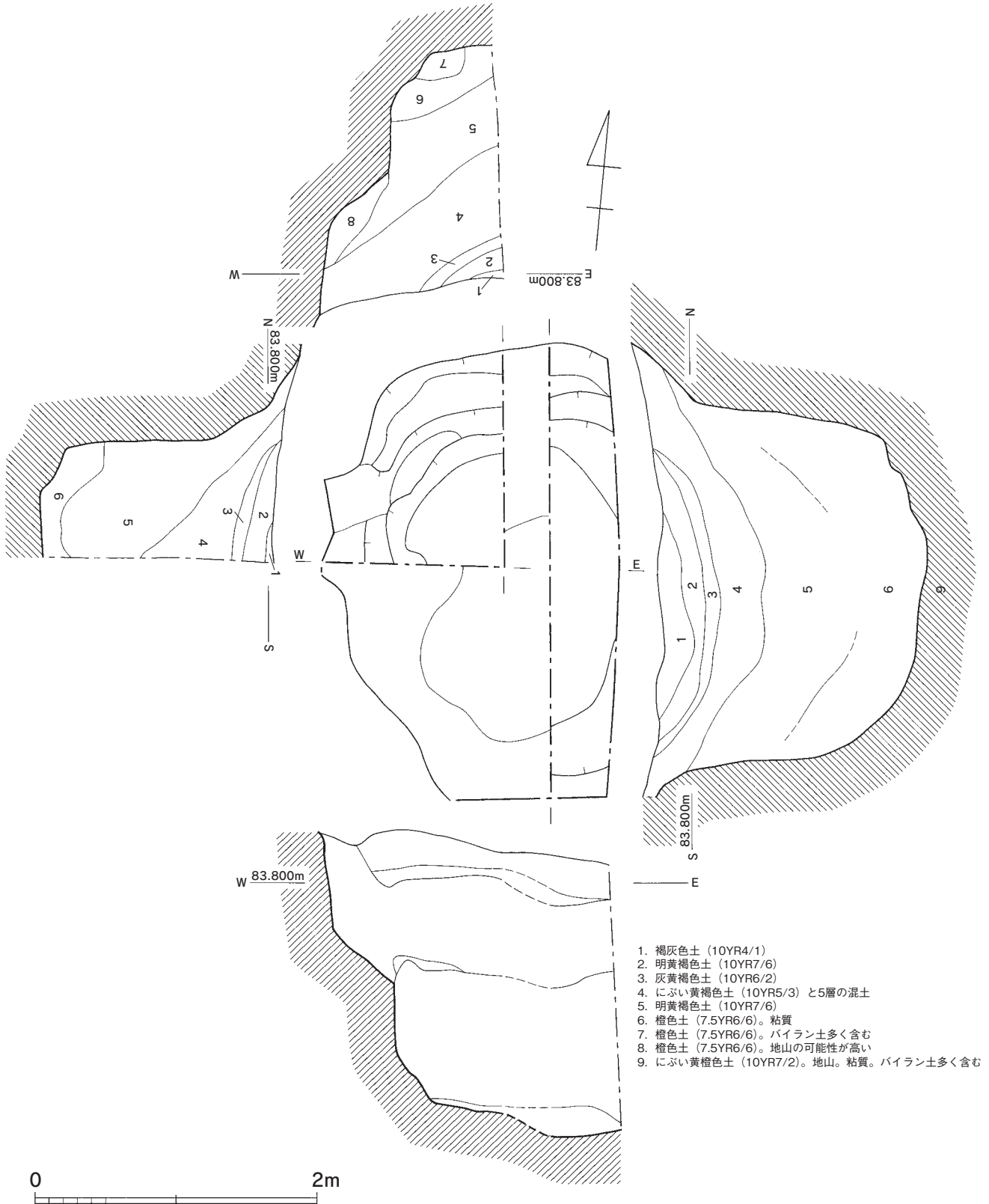
第38図 24トレンチ遺構配置図 (1/100)



第39図 24トレンチ壁面土層図 (1/60)

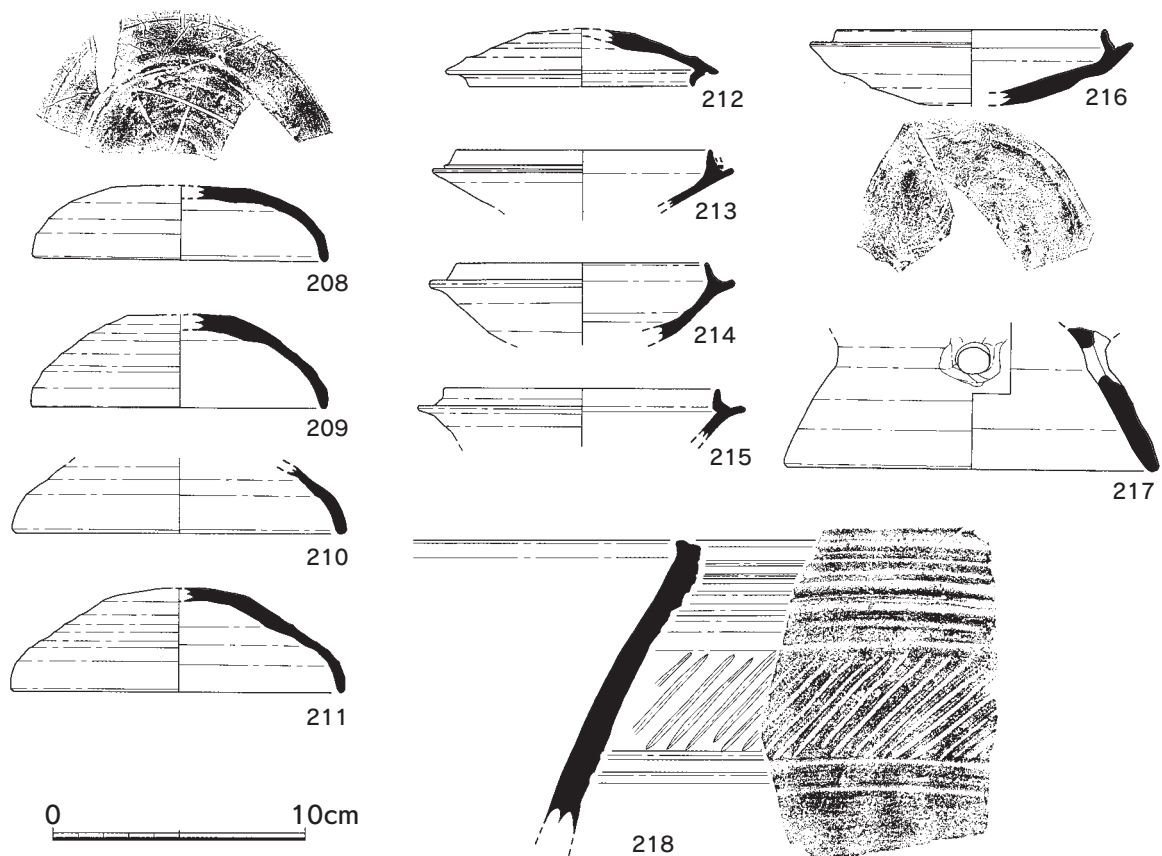


第40図 27トレンチ遺構配置図 (1/100)



1. 褐灰色土 (10YR4/1)
2. 明黄褐色土 (10YR7/6)
3. 灰黄褐色土 (10YR6/2)
4. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) と5層の混土
5. 明黄褐色土 (10YR7/6)
6. 橙色土 (7.5YR6/6)。粘質
7. 橙色土 (7.5YR6/6)。パイラン土多く含む
8. 橙色土 (7.5YR6/6)。地山の可能性が高い
9. にぶい黄褐色土 (10YR7/2)。地山。粘質。パイラン土多く含む

第41図 27トレンチSX01実測図 (1/40)



第42図 27トレンチSX01出土遺物実測図 (1/3)

(14) 24トレンチ (第38・39図、図版24)

5号窯跡南東側の緩斜面に設定した、全長8.5m (南北5.6m、東西2.9m)、幅1.0mの「L」字形の調査区である。第39図を見てわかるとおり、地山(橙色土)が急激に落ち込む状況が確認された。自然地形とは考え難いため、一応 SX03として呼称しておくが、埋土の状況から判断して、人為的なものであったとしても極めて新しい時期の所産と想定される。須恵器片が7点出土した。

遺物 (第37図) 207は杯蓋。外面約3/4の範囲で回転ヘラケズリを施す。出土位置が不明瞭で、SX03に伴うものか判然としない。

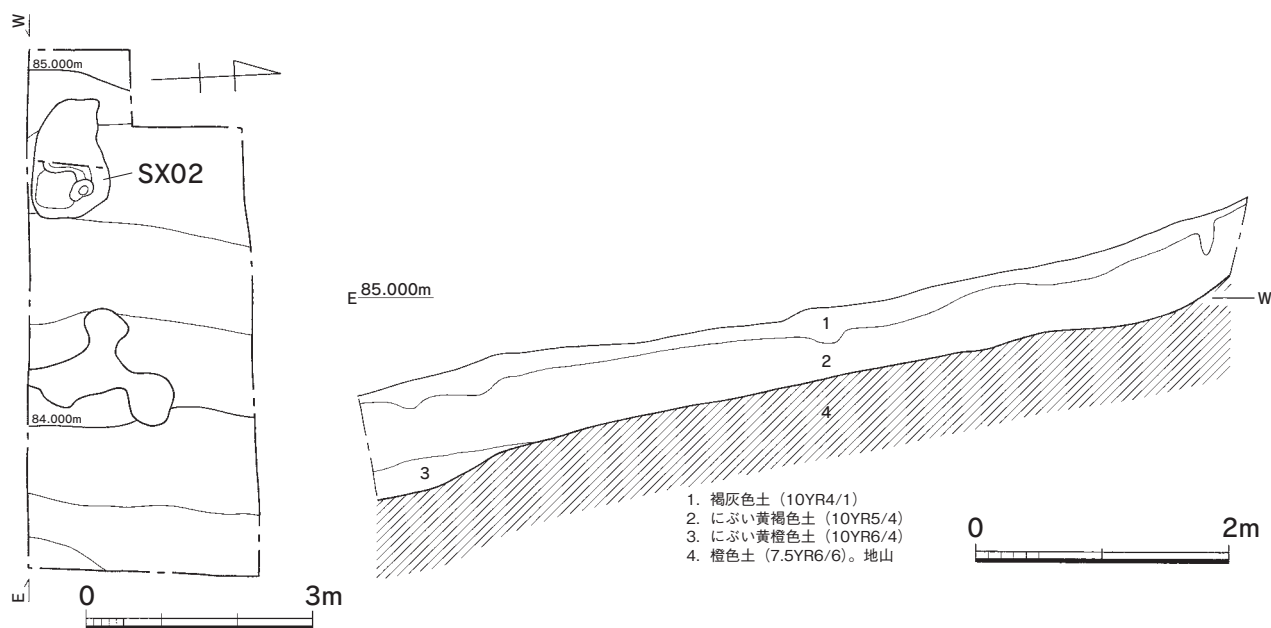
(15) 26トレンチ (第4・50図、図版25)

21トレンチ下方の緩斜面に設定し、関連遺構の検出を目的とした。約60cmの深さで遺構検出面に達したが、遺構・遺物とも確認できなかった。

(16) 27トレンチ (第40・41図、図版25・26)

5号窯跡の下方(東側)の緩斜面に、等高線に沿うように設定した長さ16.5m、幅1.0mの調査区である。調査区やや北寄りで比較的大形の土坑(SX01)を確認し、さらにこの土坑が調査区外にも続くことが明らかとなったことから、調査区幅を東側に一部拡張した。

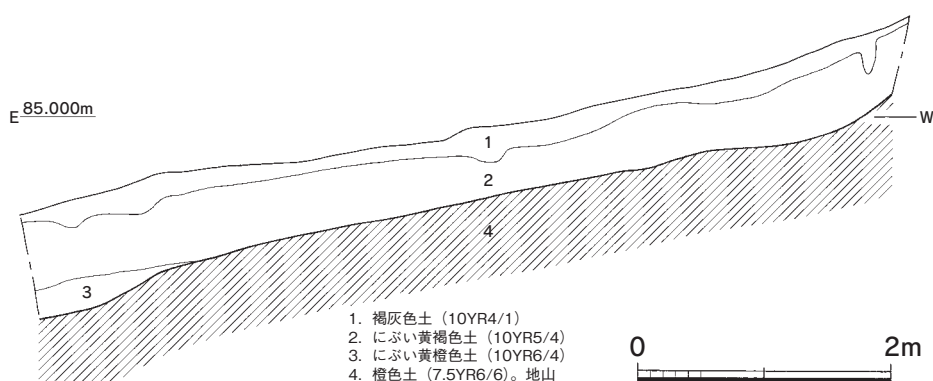
A) SX01：南北3.2m以上、東西2.1m以上、検出面からの深さ1.9mを測る。全体形は判然としないが、推定すれば南北3.4m、東西2.6m程度の平面楕円～隅丸長方形を呈するものであろうか。東西上端がやや広がるものの、断面形状は概ね「U」字形を呈する。遺物としては、纏まった量の須恵器が出土したが、その大部分は最上層からの出土であり、3層以下からの出土は数点のみであつ



第43図

28トレンチ遺構配置図 (1/100)

第44図 28トレンチ南壁土層図 (1/60)



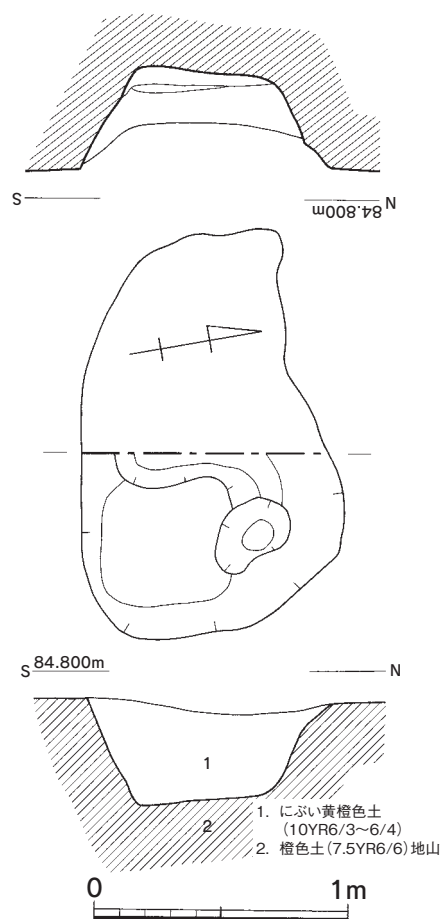
た。遺物の出土状況や埋土の状況から、最上層は5号窯跡灰原の2次堆積土の可能性はある。

遺物 (第42図) 208～211は杯蓋 (杯H)。208・211は回転ヘラ切り後ナデ調整。209は回転ヘラケズリの可能性があるが判然としない。212は杯蓋 (杯Gあるいは杯B) と判断した。天井部の破断面に接して、つまみの接合痕らしき痕跡が観察できる。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。213～216は杯身 (杯H)。いずれも口縁部の残存状況は良好でなく、復元径には確証がない。213・214は外面に降灰が確認できる。216は回転ヘラ切り後ナデ調整。217は脚部。壺類であろうか。体部との接合部に接して焼成前穿孔が認められる。218は甕。下段の横位沈線に先行して比較的密な斜線文が施される。

(17) 28トレンチ (第43・44図、図版26)

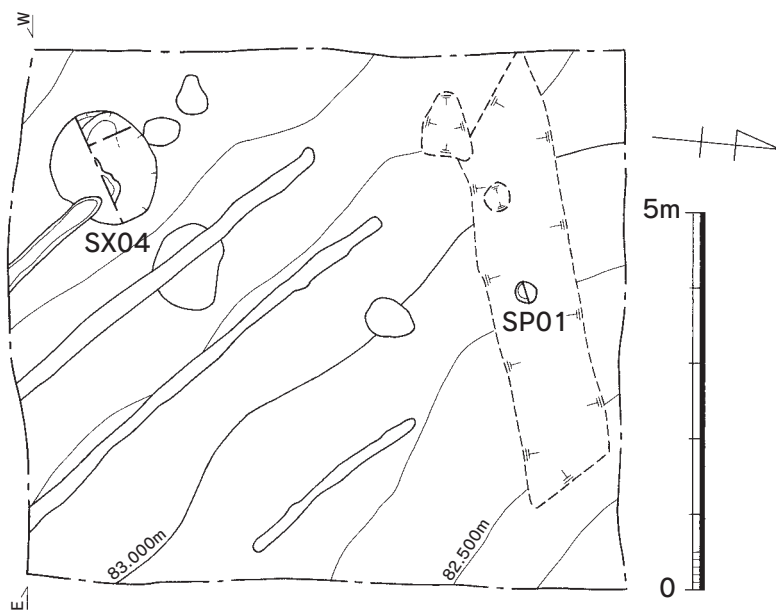
27トレンチと29トレンチの中間の緩斜面に設定した東西5.9m×南北2.9mの調査区である。土坑が2基検出され、そのうち1基が調査区外に続いたため、トレンチ西側を部分的に拡張した。

A) SX02 (第45図)：東西1.55m、南北1.0mの不整楕円形を呈する。埋土は、にぶい黄褐色土の単層であった。遺物は須恵器細片が出土したが図化に堪える資料はない。

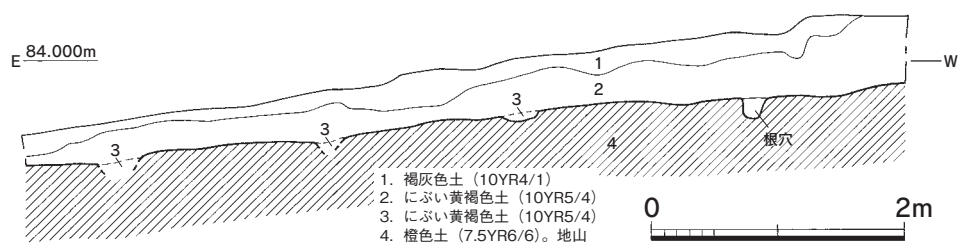


第45図

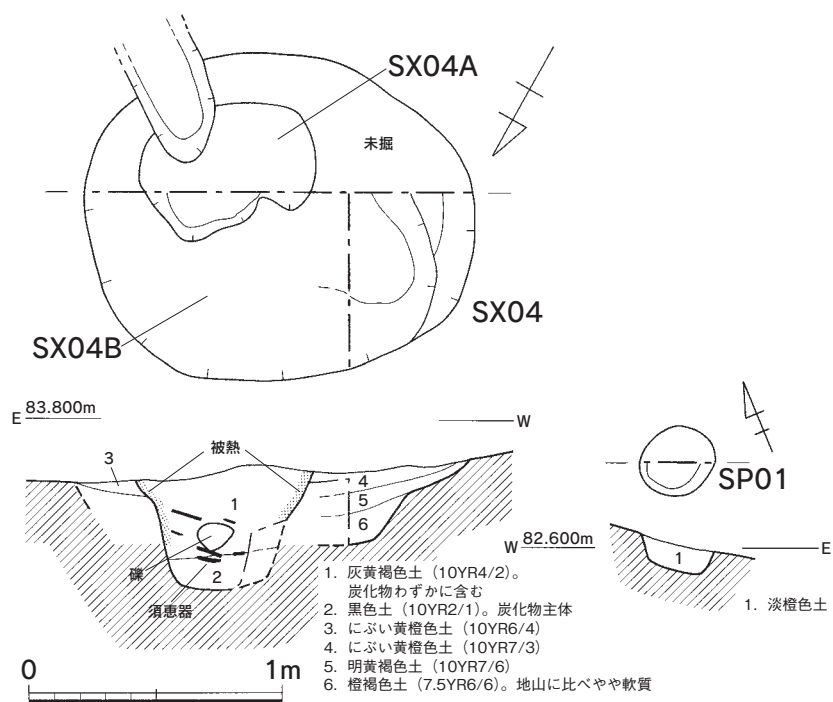
28トレンチ SX02 実測図 (1/30)



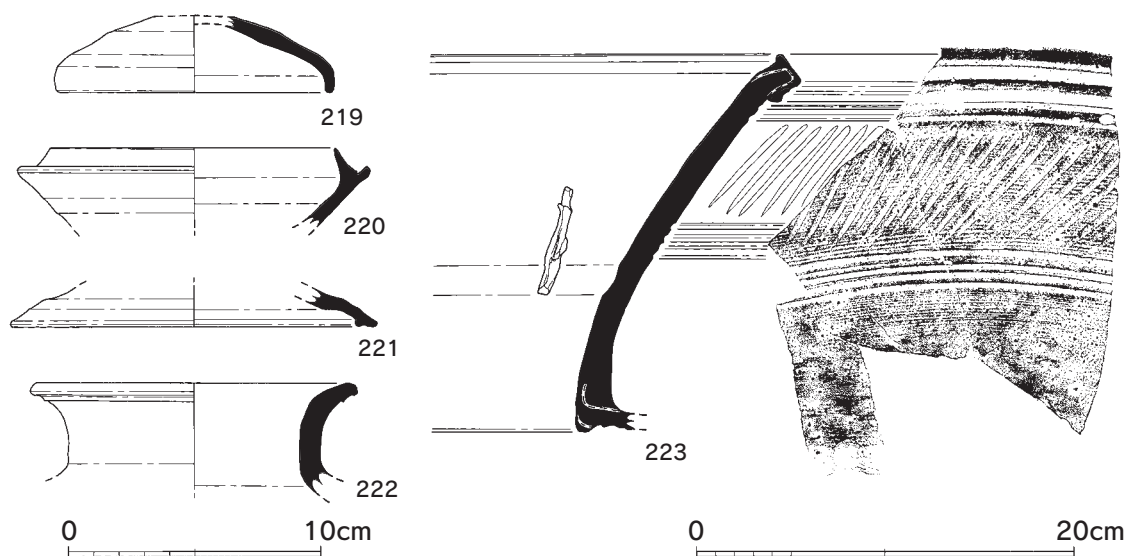
第46図 29トレンチ遺構配置図 (1/100)



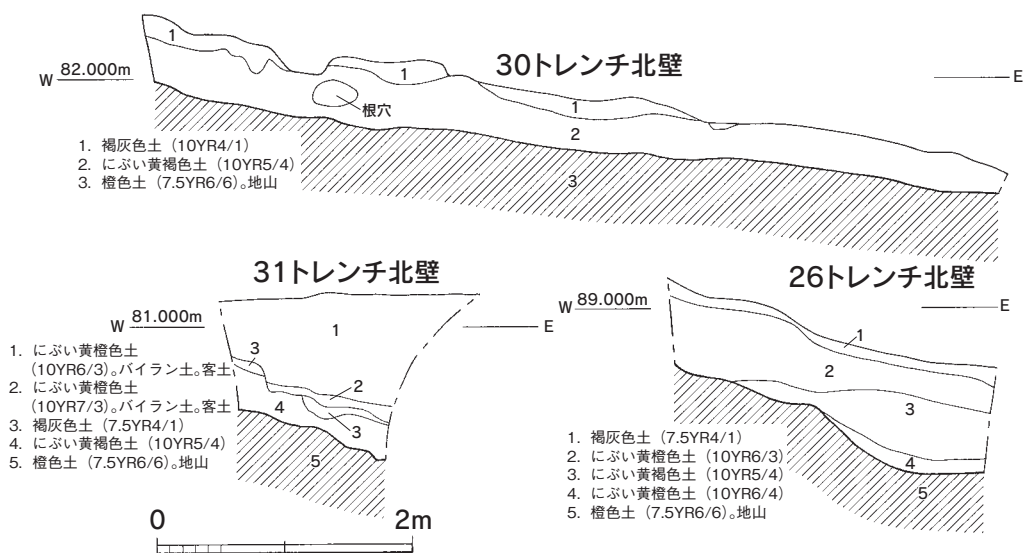
第47図 29トレンチ南壁土層図 (1/60)



第48図 29トレンチ SX04 SP01 実測図 (1/30)



第49図 29トレンチ出土遺物実測図 (233 : 1/4、その他 : 1/3)



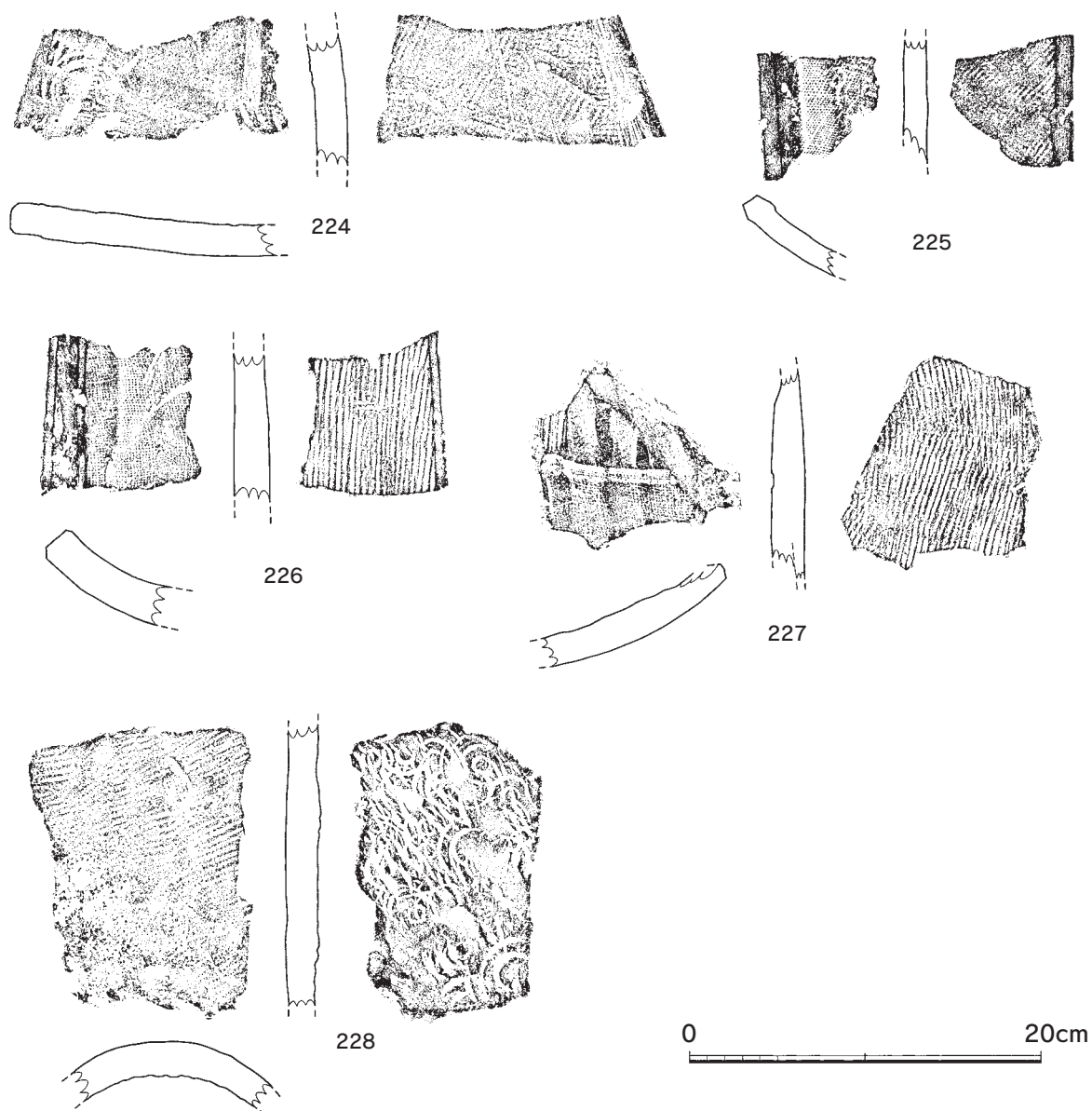
第50図 26・30・31トレンチ壁面土層図 (1/60)

(18) 29トレンチ (第46・47図、図版27)

3・4号窯跡の下方(東側)の緩斜面に設定した東西7.0m×南北8.2mの調査区である。土坑2基とピット6基、溝状遺構4条を確認した。表土剥ぎ時に少なからず須恵器片が出土したが、これらは斜面上方の灰原から流入した可能性が高い。

遺物 (第49図) 219～222は表土剥ぎ時に出土した。219は杯蓋。220は杯身。221は高杯の脚部であろうか。脚部と見た場合、径が大きすぎる感があるが、小片のため復元径に確証がない。222は甕。

A) SX04 (第48図) : 調査区南東端近くで検出され、1.55m×1.3mの楕円形を呈する。検出時に、にぶい黄橙色土(遺構埋土)のほぼ中央部において灰黄褐色土の堆積を認識していたが、同一の遺構と判断し半裁を試みた。しかしその後、3～6層の大形土坑(SX04B)に1・2層のピット状の土坑(SX04A)が切り込む状況が確認されたため、別遺構と捉え、SX04Bについては、西



第51図 表採遺物実測図 (1/4)

側の一部を除き掘り下げを中断した。

B) SX04A : 0.75m×0.5mの不整楕円形を呈する。半裁を試みた場所が的確ではなく、これを完了できなかったため、底面形状などについて不明な点が多い。壁面上半が強く被熱し、2層下部には炭化材も確認された。1層及び2層上面では、須恵器甕片がやや纏まって出土したが、3・4号窯跡の遺物が流入した可能性も否定できない。

遺物 (第49図) 223は甕。比較的密に斜線文が施される。破断面の観察によれば、口縁部を包み込むように粘土を継ぎ足し、これによって口縁部を肥厚させている。口頸部内面に須恵器片(器種不明)や窯壁細片が付着する。

C) SP01 (第48図) : 調査区の北側のピット (0.3m×0.25m) を半裁した。深さ10cm程度で、淡橙色土の単層であった。遺物は須恵器甕片が1点出土した。

D) 溝状遺構 : 並行する4条を確認した。一部掘り下げを行ったが、切り合い関係や埋土の状況

等から判断して、近代以降の耕作痕の可能性が高い。須恵器小片が出土した。

(19) 30トレンチ (第4・50図、図版28)

29トレンチ北側の緩斜面に設定した。遺構の検出を目指したが、遺構は確認できなかった。約40点の須恵器片が出土した。

(20) 31トレンチ (第4・50図、図版28)

30トレンチ北側、現在平坦地として整備されている部分に設定した。現地表下80～130cmで地山（橙色土）に達し、北東に向かい深くなる状況が確認された。2点の須恵器片が出土したが、遺構は検出されなかった。当該平坦地は区画整理事業以前、谷部であったことが知られており、当該トレンチの調査結果はこれに符合している。

(21) 表面採集

1・2号窯跡灰原付近や3・4号窯跡灰原周辺では、比較的多くの須恵器片・瓦片が採集できた。

遺物 (第51図) 224～227は平瓦。いずれも凸面は平行（擬格子）タタキを施す。凹面は、224は当て具痕を、それ以外は布目痕を残している。227の凹面では、布の上端を肥厚（折り返しのためか）させた痕跡が観察できる。これより上部では布目は確認できず、直接模骨が接しているようである。228は丸瓦。凸面は平行タタキ、凹面は同心円当て具痕が観察できる。

IV. 自然化学分析の成果

牛頸小田浦窯跡群における樹種同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする本部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、牛頸小田浦窯跡群79地点3号窯跡より出土した炭化材10点である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果を第2表に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科 図版42-1

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片であり広範囲の観察が困難であったため、シイ属の同定にとどまる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版42-2

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材で

ある。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ブナ科 *Fagaceae*

横断面：部分的ではあるが大型の道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科に同定される。ブナ科にはクリ、シイ属、コナラ属などがあるが、本試料は保存状態が悪く広範囲の観察は困難であったため、ブナ科の同定にとどまる。

イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科 図版42-3

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって、一定の間隔で規則的に配列する傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10～20段ぐらいである。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅である。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

5. 所見

同定の結果、牛頸小田浦窯跡群79地点3号窯跡より出土した炭化材は、シイ属4点、コナラ属アカガシ亜属3点、ブナ科1点、イスノキ2点であった。シイ属とコナラ属アカガシ亜属は西南日本に分布する照葉樹林の主要高木であり、イスノキも照葉樹林の構成要素である。いずれも温帯下部の暖温帯に分布しており、遺跡の周囲ないし周辺地域からもたらすことのできる樹種である。こうしたことから、遺跡の周辺には照葉樹林が分布していたと考えられる。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242

試料	結果（学名／和名）	
①	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ
②	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
③	<i>Castanopsis</i>	シイ属
④	<i>Castanopsis</i>	シイ属
⑤	<i>Castanopsis</i>	シイ属
⑥	<i>Fagaceae</i>	ブナ科
⑦	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
⑧	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
⑨	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ
⑩	<i>Castanopsis</i>	シイ属

第2表 小田浦窯跡群79地点3号窯跡灰原出土炭化材の樹種同定結果

V. まとめ

3ヵ年にわたる調査の結果、5基の須恵器窯跡を検出することができた。ここでは、各窯跡の作業時期を検討した上で、調査成果の概要と課題を列挙し、まとめとしたい。

1. 各窯跡の作業時期

まず、各窯跡の時期決定にあたり、それぞれ出土した須恵器（特に蓋杯）の特徴を確認しておきたい。なお、先述のとおり、3号窯跡以外は窯体内の調査を行なっておらず、焼成された窯跡がわかる資料は極めて少ない。あくまでも現段階の所見である。

1号窯跡 確実に1号窯跡で焼成された遺物は確認できないため、ここでは2・3トレンチ出土の蓋杯を時期決定の参考としたい。当該トレンチの蓋杯は、杯Hが圧倒的に多く、一部杯Gを含む。基本的に回転ヘラケズリは施されない。杯蓋の口径は、11.2～12.8cm（平均11.8cm）、杯身の受部径は、11.6～12.6cm（平均12.2cm）を測る。

2号窯跡 2号窯跡で焼成された可能性が高い遺物は、燃焼部～灰原検出面で出土した一群であるが、この遺物の主体は瓦であり、口径の確実な蓋杯は出土しなかった。ここでは、出土量が安定している1トレンチの蓋杯を時期決定の参考としたい。この蓋杯は、杯Hのみで構成され、基本的に回転ヘラケズリは施されない。杯蓋の口径は、11.1～12.6cm（平均11.8cm）、杯身の受部径は、11.7～12.8cm（平均12.1cm）を測る。

3号窯跡 最終作業面まで調査を行なっており、時期認定は比較的容易といえよう。ここでは、燃焼部出土（焼成不良資料を除く）の蓋杯を取り上げたい。燃焼部出土の蓋杯は、杯Hのみで構成され、基本的に1/3～2/3の範囲で回転ヘラケズリが施されている。杯蓋の口径は、12cm台前半を主体として11.6～12.7cm（平均12.4cm）、杯身の受部径は、12.1～15.0cm（平均13.0cm）を測る。

4号窯跡 表土等から出土した遺物のうち、3号窯跡の所産と考えられる遺物を差し引いたものが4号窯跡焼成須恵器に相当すると考えられる。総じて焼成不良な点も、特徴といえるかもしれない。蓋杯は基本的に杯Bによって構成される。蓋には返りが見られ、杯身高台は、わずかに外側に踏ん張る。資料が少なく、口径等は参考とならない。

5号窯跡 すべて検出作業の際の表土出土であるが、15・17～19トレンチの遺物を時期決定の判断資料としたい。これらのトレンチ出土の蓋杯は、全て杯Hで構成され、外面に回転ヘラケズリを施す資料と、ヘラ切り後ナデ調整を行なう資料の双方が認められる。杯蓋の口径は11.1～12.6cm（平均12.0cm）、杯身の受部径は12.8cm、13.0cmを測る。

このように見ていくと、1・2号窯跡は小田編年のⅣB期（7世紀前半）、3号窯跡はⅣA期（6世紀末～7世紀初頭）、4号窯跡はⅥ期（7世紀後半）、5号窯跡はⅣA～B期（7世紀初頭～前半）と概ね判断できよう。なお、1・2号窯跡の先後関係については、出土須恵器からは判断し難く、同時作業の可能性も否定できないが、先に述べた瓦の出土状況を考慮すると、2号窯跡がわずかに先行する可能性が高い。

2. 調査成果の概要と課題

最後に、調査成果とこれに伴う課題について列挙しておきたい。

1) 窯跡の群集 小田編年ⅣA～Ⅵ期の窯跡を5基（うち4基はⅣ期）検出することができた。牛頸窯跡群内において、当該期の窯跡が群集して確認された事例はなく、当地点周辺がⅣ期における須恵器生産の中心地の一つであったことが明らかとなった。

2) 多孔式煙道窯 多孔式煙道窯とは、平面形が燃焼部から煙道部までほぼ一定の幅で伸び、焼成部奥に2～6個の孔を設けることによって煙道部を作り出した窯跡の総称であり、牛頸窯跡群の特色としてすでに認識されている。今回の調査においても、3号窯跡で粘土柱や礫で構築された5孔の煙道を、4号窯跡で地山を掘り抜いた2孔の煙道を確認することができた。遺存状況も比較的良好であり、煙道の構築方法や閉塞方法を検討する上で興味深い資料となった。

3) 3号窯跡の改造（改修）痕跡 3号窯跡については、当初操業時の燃焼部天井の上の地山を新たに掘削し、焼成部に結合させたような大規模な改造の痕跡が明らかとなった。さらに排煙部についても、右側壁部の不自然な延長などから判断して、焼成部の伸長に伴う煙道の移動（再構築）を想定することができた。なお、この煙道の移動は、燃焼部の改造（焼成部の縮小）に起因すると考えられ、焼成部の縮小を補うことを目的とした可能性が高い。牛頸窯跡群内における煙道移動（再構築）の類例としては、小田浦37-I号窯跡、後田65-I号窯跡などが挙げられる。

4) 焼成不良須恵器 3号窯跡焼成部において、極めて焼成不良の須恵器が一部原位置を保ちながら出土した。土層堆積の状況や、これらの須恵器の出土範囲が限られる点から判断すると、焼成開始後間もなく、天井の一部が崩落したため焼成を断念し、破損しなかった焼成途中の須恵器は持ち出されたと想定することが妥当であろう。

また、焼成不良須恵器のうち、ほぼ原位置を保っての出土と判断した6例（セット）のうち5例は身蓋逆位で焼成されていた。焼成が完了した杯身を観察してみても、外面に顕著な降灰が認められる例は少なくなく、やはり身蓋上下の区別なく窯詰めされた可能性は高い。さらに牛頸窯跡群以外の事例として、宗像市三郎丸堂ノ上C遺跡SH3（小田編年ⅣA期）で確認された未焼成須恵器を見てみると、ここでも11例（セット）中5例が身蓋逆位で窯詰めされており、3号窯跡の事例が例外的でないことは確かであろう。

5) 瓦陶兼業窯 牛頸窯跡群内では、今回の調査で明らかとなった2号窯（ⅣB期）のほか、神ノ前2号窯跡、大浦2号窯跡、野添13号窯跡、浦ノ原4号窯跡、月ノ浦窯1号窯跡などが瓦陶兼業窯として知られており、その存在は当該窯跡群の特色の一つといえる。このように短期間に複数の支群で瓦陶兼業を可能とした生産体制の解明は、牛頸窯跡群の歴史的背景を考える上で重要な課題である。また焼成方法の解明も今後の課題であり、須恵器と瓦は同時焼成なのか個別焼成なのか、さらにその際の窯詰め方法はいかなるものか、不明な点が多い。今後、より詳細な瓦の観察と出土状況の分析、さらに実験考古学的な検討が必要となろう。

6) 緩斜面の遺構 須恵器窯跡が存在する斜面下方の緩斜面～平坦面において、数基の土坑とピットを検出（27～29トレンチ）した。これらの土坑、ピット埋土からは、近接した窯跡とほぼ同時期の須恵器片が出土しており、窯跡と同時期に利用された可能性もある。しかしながら、現時点では時期的にも機能的にも、須恵器生産との有機的な関係を確認することはできなかった。今後より広い範囲において確認調査を実施し、関連の有無を検討する必要がある。

遺物觀察表

第3表 牛頸小田浦窯跡群79地点出土遺物観察表①

遺物 番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径 ②器高③底径 ④最大径 ※()は復元径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備考
1	6	瓦	平瓦	1号窯 煙道	残存長38.7 残存幅22.0	凸面:擬格子目タタキ、凹面: 布目痕→ケズリ・ナデ、模骨痕 あり	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 Bやや不良 C凸面:にぶい褐色7.5YR5/4～褐色 7.5YR6/8、凹面:にぶい褐色7.5YR5/4～明褐色 7.5YR5/6	
2	6	瓦	平瓦	1号窯 煙道	残存長25.0 残存幅22.5	凸面:平行タタキ、凹面:布目 痕→一部ナデ、模骨痕あり、粘 土紐接合痕あり	A密。径5mm以下の白色粗砂をやや多く含む。 Bやや不良 C褐色7.5YR7/6～6/6	
3	7	瓦	平瓦	1号窯 煙道	残存長20.0 残存幅17.5 模骨幅2.5	凸面:平行タタキ、凹面:布目 痕明瞭、模骨痕あり	A密。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B良好 C灰黄褐色10YR5/2	
4	7	瓦	平瓦	1号窯 煙道	残存長17.8 残存幅16.5	凸面:擬格子タタキ、凹面:布目 圧痕、模骨痕あり。凹凸面と も器面風化し調整不明瞭	A密。径4mm以下の白色砂礫を多く含む。 B不良 C褐色5YR6/8～にぶい褐色7.5YR6/3	
5	7	瓦	平瓦	6トレンチ 左端拡張	残存長23.3 残存幅16.0	凸面:擬格子タタキ、凹面:布目 痕→ナデ、縦位に布を縦じ 合わせた部分の圧痕あり、模 骨痕あり	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 Bやや不良 C褐色5YR6/8～明赤褐色5YR5/8	
6	8	瓦	平瓦	1号窯 煙道	残存長22.0 残存幅11.0	凸面:格子目タタキ、凹面:布目 痕→ナデ、ナデにより模骨 痕不明瞭	A密。径3mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 Bやや不良 C褐色5YR6/8	
7	8	瓦	平瓦	1号窯 煙道	残存長8.5 残存幅10.0	凸面:擬格子タタキ、凹面:布目 痕→一部ナデ、模骨痕あり	A密。径2mm以下の白色粗砂をやや多く含む。 Bやや不良 C明黄褐色10YR7/6	
8	8	瓦	平瓦	1号窯 煙道	残存長11.5 残存幅17.0	凸面:擬格子タタキ、凹面:布目 痕→ナデ、ナデにより模骨 痕不明瞭、縦位に布を縦じ合 わせた部分の圧痕あり	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 Bやや不良 C凸面:褐色7.5YR6/8、凹面:褐色 5YR6/6～7.5YR7/6	
9	8	瓦	丸瓦	1号窯 煙道	長27.1 残存幅11.4	凸面:平行タタキ、凹面:布目 痕→ナデ・ケズリ	Aやや粗。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含 む。 B不良 C凸面:にぶい黄褐色10YR7/4 ～6/4、凹面:にぶい黄褐色10YR7/2～灰黄褐色 10YR6/2	釘孔あり
10	9	須恵器	杯蓋	2号窯 検出面(4トレンチ拡張)	①(11.5) ②3.95	外面天井部は回転ヘラ切り後 ナデ、内面1/2不定方向ナデ、 他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面:黒色10YR2/1、にぶい褐色 7.5YR5/4、内面:にぶい褐色7.5YR5/4	外面にヘラ記号 口縁部1/2欠損 焼け歪み著しい
11	9	須恵器	杯身	2号窯 検出面(4トレンチ拡張)	①(10.2) ④(12.3) 残存高2.8	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 2/5不定方向ナデ、他は回転ナ デ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面:にぶい黄褐色10YR7/2～7/4、 内面:明赤7 灰色5GY7/1～2.5GY7/1	体部2/5残存
12	9	須恵器	杯身	2号窯 検出面(4トレンチ拡張)	①(20.4) ④(24.0) 残存高6.7	外面平行タタキ→カキメ・回 転ナデ、内底面同心円当て具 痕、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B不良 C外面:にぶい褐色10YR5/3、内面:褐 灰色10YR5/1	体部上半1/8残存
13	9	瓦	平瓦	2号窯 検出面(4トレンチ拡張)	残存長8.0 残存幅15.3	凸面:擬格子タタキ、凹面:布目 痕→一部ナデ、模骨痕あり	A密。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 Bやや不良 C褐色7.5YR6/6～にぶい褐色 7.5YR5/3	
14	9	瓦	平瓦	2号窯 検出面(4トレンチ拡張)	残存長7.2 残存幅6.0	凸面:擬格子タタキ、凹面:布目 痕→同心円当て具痕→一部 ナデ	A密。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 Bやや不良 C褐灰色7.5YR4/1	
15	9	瓦	丸瓦	4トレンチ拡張部 2号窯	残存長12.7 残存幅10.2	凸面:擬格子タタキ→一部ナ デ、凹面:同心円当て具痕→ナ デ、粘土紐接合痕あり	A密。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 Bやや不良 C凸面:褐色5YR7/8、凹面:褐色 5YR6/6	
16	9	瓦	熨斗瓦	2号窯 検出面(4トレンチ拡張 部)	残存長6.5 残存幅7.5	側端面:擬格子タタキ→ナデ、 下端面・表裏面:ナデ、表面:ナ デ	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 Bやや不良 C褐色5YR6/6～6/8	
17	9	瓦	熨斗瓦	2号窯 検出面(4トレンチ拡張 部)	残存長12.3 残存幅8.5	表面:擬格子タタキ→ナデ その他:ナデ	A密。径4mm以下の白色粗砂を少量含む。 Bやや不良 C明赤褐色5YR5/6	
18	9	瓦	熨斗瓦	2号窯 検出面(4トレンチ拡張部)	残存長17.8 幅11.0 厚4.5	表裏面:平行タタキ→ナデ 側端面:平行タタキ→ナデ 粘土板を斜めに積み上げ成形	A密。径4mm以下の白色砂礫をごく少量含む。 Bやや不良 C明赤褐色5YR5/6	
19	9	瓦	水返しを 有する平 瓦	2号窯 壁内	残存高5.3	上面:擬格子タタキ→ナデ、 その他面:ナデ	A密。径1mm程の白色粗砂、雲母を少量含む。 Bやや良好 C明赤褐色5YR5/6	軒平瓦の可能性あり
20	10	須恵器	杯蓋	4トレンチ	①(12.1) ②(2.7)	天井部外面は調整不明、内面 2/3不定方向ナデ、他は回転ナ デ	A密。径3mm以下の白色粗砂、黒色粒子を少量含 む。 B良好 C外面:暗灰色N3/、内面:灰色N5/	外面降灰 口縁部1/8残存
21	10	須恵器	杯身	4トレンチ	①(11.1) ④(13.1) 残存高2.3	内外面回転ナデ	A密。径3mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面:灰白色N8/、暗灰色N3/、内面:暗 赤灰色5R3/1、暗灰色N3/	口縁部1/8残存
22	10	須恵器	杯身	4トレンチ	①(10.4) ④(11.9) 残存高1.5	内外面回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を僅かに含む。 B良好 C外面:暗紫灰色5P3/1、内面:灰色N5/ ～4/	口縁部1/4残存
23	10	須恵器	杯身	4トレンチ	①(11.6) ④(13.5) 残存高2.5	内外面回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面:暗灰色N3/、内面:灰色N6/～5/	外面降灰 外面にヘラ記号 口縁部1/8残存
24	10	須恵器	摺鉢	4トレンチ 2トレンチ	③8.3 残存高8.3	底部外面ナデ、底部内面ナデ、 他は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N6/～灰白色2.5Y7/1	外底面は大部分剥落
25	11	須恵器	杯蓋	1トレンチ	①11.1 ②3.6	天井部外面は回転ヘラ切り後 ナデ、天井部内面は不定方向 ナデ、他は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B良好 C外面:灰白色N7/、内面:灰色N5/	外面にヘラ記号 体部1/3欠損
26	11	須恵器	杯蓋	1トレンチ	①(11.8) ②3.2	天井部外面は回転ヘラ切り後 ナデ、天井部内面は不定方向 ナデ、他は回転ナデ	A密。砂粒をほとんど含まない。 Bやや不良 C外面:浅黄色2.5Y7/3、内面:灰黄色2.5Y6/2	外面にヘラ記号 1/3残存

第3表 牛頸小田浦窯跡群79地点出土遺物観察表②

遺物 番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径 ②器高③底径 ④最大径 ※()は復元径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
27	11	須恵器	杯蓋	1トレンチ	①(11.8) ②3.4	天井部外面は回転ヘラ切り後ナデ、天井部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 Bやや不良 C灰色N6/～明オリーブ灰色2.5GY7/1	外面にヘラ記号1/2残存
28	11	須恵器	杯蓋	1トレンチ	①(11.3) ②3.6	天井部外面は回転ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデ	A密。砂粒をほとんど含まない。 B良好 C外面：灰色N5/、内面：褐灰色10YR5/1～4/1、外(内面の一部も)	口縁端部に剥離痕あり(重ね焼きに起因か)1/2残存。外面自然釉
29	11	須恵器	杯蓋	1トレンチ	①12.3 ②3.0	天井部外面は回転ヘラ切り後ナデ、天井部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B良好 C灰色N6/～5/	外面にヘラ記号焼け歪みあり4/5残存
30	11	須恵器	杯蓋	1トレンチ	①(12.6) ②3.6	天井部外面は回転ヘラ切り後ナデ、天井部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面：灰白色N7/、内面：灰色N5/	外面にヘラ記号口縁部1/4残存
31	11	須恵器	杯身	1トレンチ	①9.2②3.1 ③6.7④11.6	外面は自然釉が厚く調整不明、底部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面：杓ノ黒色7.5Y3/2(降灰)、内面：青灰色5B5/1	外面に多量の降灰4/5残存
32	11	須恵器	杯身	1トレンチ	①9.9 ②3.4 ④11.7	外底面は回転ヘラ切り後ナデか、降灰のため詳細不明、底部内面は横ナデ、他は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B良好 C外面：暗緑灰色10GY3/1(降灰)、内面：灰色N5/	受部に重ね焼き痕跡 外面にヘラ記号 外面降灰。ほぼ完形
33	11	須恵器	杯身	1トレンチ	①(9.8) ②3.9 ④(12.0)	外底面は回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C外面：オリーブ黒色7.5Y2/2～灰オリーブ色7.5Y4/2(降灰)、内面：灰色N5/	受部に重ね焼き痕跡 底部外面に竹管文(?) 外面降灰。1/3残存
34	11	須恵器	杯身	1トレンチ	①(9.4) ④(12.0) 残存高3.4	外底面調整不明、内面2/3不定方向ナデ(工具痕あり)、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C外面：オリーブ黒色7.5Y3/2～2/2、内面：灰色N5/	受部に重ね焼き痕跡 外面降灰。2/5残存
35	11	須恵器	杯身	1トレンチ	①10.0 ②3.5 ④12.2	外底面回転ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面：オリーブ黒色7.5Y3/2～にぶい黄橙色10YR7/4(降灰)、内面：灰色N5/	受部に蓋口縁が軸着 外面にヘラ記号 外面降灰。1/2残存
36	11	須恵器	杯身	1トレンチ	①(10.2)②2.85 ③(6.7)④(12.4)	外底面は回転ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C灰色N6/	2/5残存
37	11	須恵器	杯身	1トレンチ	①9.7 ②3.0 ④12.2	外底面降灰のため調整不明、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mmの白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C外面：黄灰色2.5Y5/1(降灰)、内面：灰色N6/	外面にヘラ記号 外面降灰。ほぼ完形
38	11	須恵器	杯身	1トレンチ	①9.9 ②3.3 ④12.3	外底面降灰のため調整不明、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B良好 C外面：灰白色2.5Y7/1～オリーブ褐色2.5Y4/6(降灰)、内面：灰白色N7/	受部に蓋口縁が軸着 外面にヘラ記号 外面降灰。3/4残存
39	11	須恵器	杯身	1トレンチ	①(10.1) ②3.4 ④12.8	外底面回転ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C外面：灰白色N7/、内面：灰色N5/	外面にヘラ記号 外面重ね焼き痕跡あり 3/5残存
40	11	須恵器	平瓶	1トレンチ	①(8.2) 残存高4.4	口径部回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B不良 C浅黄橙色10YR8/4～にぶい黄褐色10YR5/4	口縁部1/2残存
41	11	須恵器	瓶類	1トレンチ		外底面ナデ(指頭痕あり)、外面体部ケズリか、内面ナデ	Aやや粗。径3mm以下の白色粗砂を多く含む。 Bやや不良 C明緑灰色10GY7/1～褐灰色10YR6/1	焼成前穿孔
42	12	須恵器	甕	1トレンチ	残存高5.0	口頸部内外面回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 Bやや不良 C灰黄褐色10YR4/2	
43	12	須恵器	甕	1トレンチ	残存高3.9	内外面回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C外面：黒褐色10YR3/1、内面：灰黄褐色10YR6/2	
44	12	須恵器	甕	1トレンチ	①(13.4) 残存高6.5	口頸部内外面ナデ、胴部外面擬格子タタキ、内面当て具痕	A密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C外面：黒色10YR2/1、内面：オリーブ灰色2.5GY5/1	頸部と胴部の接合痕顕著。口縁部1/6残存
45	12	須恵器	甕	1トレンチ	残存高12.0	口頸部内外面回転ナデ、胴部内面は当て具痕	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面：暗緑灰色10G3/1、内面：灰色N4/	
46	12	須恵器	甕	1トレンチ	残存高5.5	内外面回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。B良好 C外面：暗オリーブ褐色2.5Y3/3～暗灰黄色2.5Y5/2、内面：黒褐色2.5Y3/2～暗オリーブ褐色2.5Y3/3	上位の横位沈線→波状文→下位の横位沈線の順で施文
47	12	須恵器	甕	1トレンチ	①(48.4) 残存高21.8	胴部外面擬格子タタキ、胴部内面同心円当て具痕、口頸部は回転ナデ	A密。径5mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B良好 C灰黄褐色10YR5/2	下位の横位沈線→斜線文→上位の横位沈線の順に施文 口頸部1/2残存
48	13	瓦	平瓦	1トレンチ	残存長19.8 残存幅19.0	凸面：擬格子タタキ→一部ナデ 凹面：糸切り条痕→布目痕→同心円当て具痕、模骨痕あり	A密。径6mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B良好 C凸面に：ぶい褐色7.5YR5/4、凹面：明赤褐色5YR5/6	
49	13	瓦	平瓦	1トレンチ	残存長10.3 残存幅18.2	凸面：擬格子タタキ、凹面：布目圧痕→一部ナデ・ケズリ、横位に布の合わせ目痕が確認される	A密。径5mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 Bやや不良 C明赤褐色5YR5/8	
50	13	瓦	平瓦	1トレンチ	残存長12.3 残存幅10.0	凸面：擬格子タタキ、凹面：布目痕→当て具痕→一部ナデ・ケズリ、模骨痕あり	A密。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B良好 C青灰色5BG5/1	
51	13	瓦	平瓦	1トレンチ	残存長15.3 残存幅9.0	凸面：擬格子タタキ→ナデ、凹面：糸切り痕→同心円当て具痕→ナデ、模骨痕あり、粘土板の合わせ目あり	A密。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B良好 C明赤褐色5YR4/1	外面に横位の縄状の圧痕あり
52	14	瓦	平瓦	1トレンチ	残存長10.1 残存幅11.3	凸面：擬格子タタキ、凹面：布目痕→ナデ	A密。径7mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B良好 C褐灰色10YR4/1	
53	14	瓦	水返しを有する平瓦	1トレンチ	残存長16.5 残存幅4.3	水返し部外側面：擬格子タタキ→ナデ、その他面：ナデ	A密。径3mm以下の白色粗砂を多少含む。 Bやや不良 C橙色5YR6/8	

第3表 牛頸小田浦窯跡群79地点出土遺物観察表③

遺物番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径 ②器高③底径 ④最大径 ※()は復元径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備考
54	14	瓦	丸瓦	1 トレンチ	残存長14.5 残存幅7.5	凸面：タタキ→ナデ、凹面：布目痕→ナデ	A 密。径5mm以下の白色砂礫を多く含む。 B やや不良 C 明赤褐色5YR5/8	
55	14	瓦	丸瓦	1 トレンチ	残存長9.0 残存幅6.1	凸面：平行タタキ→ナデ・ケズリ 凹面：ナデ、指頭圧あり	A 密。径3mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B 不良 C 凸面：にぶい黄褐色10YR7/3、凹面：にぶい黄褐色10YR6/4	軒丸瓦の可能性あり 凸面に二条の条線
56	15	須恵器	杯身	2 トレンチ	①(10.6) ②3.7 ④(12.9)	外底面回転ヘラ切り後ナデ、 内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B やや不良 C 黄灰色2.5Y5/1～灰黄色2.5Y6/2	外面にヘラ記号 1/6残存
57	15	須恵器	杯身	2 トレンチ	①(9.6) ④(12.2) 残存高3.2	内面2/3不定方向ナデ、その他 回転ナデ	A 密。径3mm以下の白色砂礫をごく少量含む。 B やや不良 C 灰黄褐色10YR5/2～4/2	1/5残存
58	15	須恵器	短頸壺 (蓋)	2 トレンチ	①8.1 ②2.9	天井部外面回転ヘラ切り後ナ デ、他は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 外面：褐灰色10YR5/1、内面：灰白色10YR7/1	口縁部焼け歪みあり 2/3残存
59	15	須恵器	甕	2 トレンチ	①(23.0) 残存高5.2	口頸部内外面ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B やや不良 C 灰黄褐色10YR5/2～4/2	外面にヘラ記号 口縁部1/8残存
60	16	須恵器	杯蓋	3 トレンチ 下方拡張	①(11.2) ②3.3	天井部外面回転ヘラ切り後ナ デ、内面1/2不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A やや粗。径2mm以下の白色粗砂を多く含む。 B やや不良 C 灰黄褐色10YR5/2～にぶい黄褐色10YR5/3	2/5残存
61	16	須恵器	杯蓋	3 トレンチ 下方拡張	①11.2 ②3.6	天井部外面回転ヘラ切り後粗 いナデ、内面2/5不定方向ナ デ、他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 不良 C 外面：浅黄褐色10YR8/3、内面：にぶ い黄褐色10YR6/3	外面にヘラ記号 2/3残存
62	16	須恵器	杯蓋	3 トレンチ 下方拡張	①(11.4) ②3.8	天井部外面ヘラ切り後ナデ、 天井部内面調整不明、他は回 転ナデ	A 密。砂礫をほとんど含まない。 B 不良 C 明オリーブ灰色5GY7/1～にぶい黄褐色 10YR7/4	天井部内面の器面剥落 外面にヘラ記号 1/4残存
63	16	須恵器	杯蓋	3 トレンチ	①11.6 ②3.6	天井部外面回転ヘラ切り後ナ デ、内面1/2不定方向ナデ、 他は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 不良 C オリーブ灰色2.5GY5/1～黄灰色 2.5Y6/1	外面にヘラ記号 3/4残存
64	16	須恵器	杯蓋	3 トレンチ 下方拡張	①(11.8) 残存高3.7	天井部外面回転ヘラ切り後ナ デ、内面2/5不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B やや不良 C 外面：明オリーブ灰色 2.5GY7/1、内面：明緑灰色7.5GY7/1	外面にヘラ記号 1/3残存
65	16	須恵器	杯蓋	3 トレンチ 下方拡張	①12.0 ②3.8	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナ デ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 不良 C 外面：にぶい黄褐色10YR7/2～浅黄 褐色10YR8/4、内面：明黄褐色10YR7/6	外面にヘラ記号 2/3残存
66	16	須恵器	杯蓋	3 トレンチ 下方拡張	①(12.2) ②4.0	天井部外面回転ヘラ切り後ナ デ、内面1/2不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B やや不良 C 外面：灰白色10YR7/1、内面：褐 灰色10YR6/1	外面にヘラ記号および 連続した刻み状擦過痕 1/2残存
67	16	須恵器	杯蓋	3 トレンチ 下方拡張	①(12.8) ②4.3	天井部外面は磨減して調整不 明、内面1/5は不定方向ナデ、 他は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 不良 C 外面：灰白色10YR8/2～にぶい黄褐色 10YR7/2、内面：にぶい黄褐色10YR7/4	3/5残存
68	16	須恵器	杯身	3 トレンチ 下方拡張	①(9.6)②3.3 ③(6.8) ④(11.6)	外底面回転ヘラ切り後ナデ、 内面1/4不定方向ナデ、他は回 転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B やや不良 C にぶい黄褐色10YR7/4	外面にヘラ記号 1/4残存
69	16	須恵器	杯身	3 トレンチ 下方拡張	①(9.6) ②3.3 ④(12.1)	外底面回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナ デ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 不良 C にぶい黄褐色10YR7/4	1/2残存
70	16	須恵器	杯身	3 トレンチ 下方拡張	①(9.6) ④(12.2) 残存高2.4	回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 外面：暗緑灰色5G3/1、内面：オリー ブ灰色5GY5/1	口縁部1/4残存
71	16	須恵器	杯身	3 トレンチ 下方拡張	①10.4 ②3.0 ④12.6	外底面は回転ヘラ切り後ナ デ、内面1/3不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A 密。砂礫をほとんど含まない。 B 良好 C 灰色N6/	外面にヘラ記号 1/5残存
72	16	須恵器	杯 (身・蓋不明)	3 トレンチ 下方拡張	残存高1.9	外底面は回転ヘラ切り後ナ デ、内底面は不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 黄灰色2.5Y6/1～5/1	内外面にヘラ記号
73	16	須恵器	杯蓋	3 トレンチ	①(9.0) ②2.3 ④(11.8)	天井部外面回転ヘラ切り後ナ デ、内面1/3不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 外面：黒褐色2.5Y3/2、内面：灰色N6/	外面にヘラ記号 1/4残存
74	16	須恵器	杯身	3 トレンチ 下方拡張	①10.0 ②3.8 ③5.3	外面1/3回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナ デ	A 密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B やや不良 C 外面：にぶい黄褐色10YR7/4、内 面：にぶい黄褐色10YR6/3	5/6残存
75	16	須恵器	短頸壺 (蓋)	3 トレンチ	①6.9 ②2.8	天井部外面は回転ヘラ切り後 ナデ、内面1/2不定方向ナデ、 他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 緑灰色5G6/1～5/1	3/5残存
76	16	須恵器	横瓶	3 トレンチ 下方拡張	残存高4.8	外面：擬格子タタキ→カキメ・ 側端部側回転ナデ、内面：同心 円当て具痕→側端部側回転ナ デ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 不良 C 橙色5YR6/8	焼成前穿孔あり
77	16	須恵器	甕	3 トレンチ	残存高12.7	口頸部両面回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 黒褐色10YR3/2	
78	17	瓦	平瓦	3 トレンチ 下方拡張	残存長16.8 残存幅10.0	凸面：擬格子タタキ→一部ナ デ、凹面：布目痕→同心円当て 具痕→ナデ、模骨痕あり	A 密。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B やや不良 C 明赤褐色5YR5/8	
79	17	瓦	平瓦	3 トレンチ 下方拡張	残存長15.5 残存幅8.0	凸面：平行タタキ、凹面：布目 痕→一部ナデ、模骨痕あり	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B やや不良 C 橙色7.5YR6/8	
80	17	瓦	平瓦	3 トレンチ	残存長11.9 残存幅14.8	凸面：平行タタキ、凹面：布 目痕→一部ナデ、模骨痕あり	A 密。径7mm以下の白色砂礫を多く含む。 B 良好 C 灰色 N5/ ～褐灰色 10YR5/1	
81	17	瓦	平瓦	3 トレンチ 下方拡張 6 トレンチ 1999 年度試掘トレンチ	残存長 18.6 残存幅 19.0	凸面：擬格子タタキ、凹面： 布目痕→一部ナデ、模骨痕あり、 粘土板の合わせ目痕跡あり	A 密。径5mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B やや不良 C にぶい褐色 7.5YR5/4 ～灰褐色 7.5YR4/2	
82	24	須恵器	杯蓋	3号窯 焚口	①(12.2) ②4.1	外面1/2 回転ヘラケズリ、内 面2/5 横ナデ、他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 外面：灰色 N6/、内面：灰色 7.5Y6/1	1/2残存
83	24	須恵器	杯蓋	3号窯 焚口 淡黒色土	①12.0 ②2.7 ④14.0	天井部外面回転ヘラ切りナデ か、内面1/2 不定方向ナデ、 他は回転ナデ	A 密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B 不良 C 外面：浅黄色 2.5Y7/3、内面：浅黄 色 2.5Y7/4	器面の磨減が顕著 ほぼ完形

第3表 牛頸小田浦窯跡群79地点出土遺物観察表④

遺物 番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径 ②器高③底径 ④最大径 ※()は復元径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備考
84	24	須恵器	杯身	3号窯 焚口 最上層	①11.0 ②3.7 ④(13.2)	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/6ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂をやや多く含む。 B良好 C外面：灰白色2.5Y7/2～灰色N6/、内面：灰色N6/	外面にヘラ記号 外面降灰 1/3残存
85	24	須恵器	甕	3号窯 焚口	残存高15.0	回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面：灰色N5/、内面：灰色10Y6/1	横位沈線後に斜線文
86	24	須恵器	高杯 (杯部)	3号窯 B区左最終床面 3号窯 焚口最終床面	①11.6 ④13.9 残存高3.9	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面：灰色N6/、内面：灰色N6/～暗灰黄色2.5Y5/2	焼け歪みあり 杯部完形
87	24	須恵器	平瓶	3号窯 焚口最終床面	①5.0 残存高4.0	口頸部回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面：緑黒色10G2/1～明黄褐色10YR7/6、内面：灰色N5/	
88	24	土師器	甕	3号窯 焚口最終灰原上面	①20.8 ②32.8 ④24.6	胴部外面縦方向ハケメ、胴部内面ヘラケズリ、口縁部内外面回転ナデ	Aやや粗。径4mm以下の白色砂礫や雲母などをやや多く含む。 B良好 C外面：にぶい褐色7.5YR6/3～黄灰色2.5Y6/1、内面：にぶい橙色7.5YR7/4～灰黄褐色10YR6/2	胴部下半以下二次被熱 ほぼ完形
89	25	須恵器	杯蓋	3号窯 B区左最終床面	①11.8 ②3.5	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C外面：青灰色5B5/1、内面：暗オリーブ灰色5GY4/1～灰色N6/	外面にヘラ記号 ほぼ完形
90	25	須恵器	杯蓋	3号窯 C区最終床面直上	①11.8 ②3.7	外面9/10回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N6/～黄灰色2.5Y6/1	外面にヘラ記号 口縁部1/4欠損
91	25	須恵器	杯蓋	3号窯 B区最終床面	①13.3 ④4.2	外面1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B不良 C灰白色2.5Y8/2～灰色5Y6/1	3/4残存
92	25	須恵器	杯蓋	3号窯 B区埋土	①12.2 ②3.9	外面2/3回転ヘラケズリ、内面1/2横ナデ、他は回転ナデ	A粗。径3mm以下の白色砂礫を多く含む。 B良好 C灰色N6/	外面にヘラ記号 口縁部1/3欠損
93	25	須恵器	杯蓋	3号窯 B区最終床面	①12.2 ②3.6	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2横ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N6/	105とセットの状態で出土。外面にヘラ記号 ほぼ完形
94	25	須恵器	杯蓋	3号窯 A～C区最終床面	①12.2～13.0 ④4.8	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 Bやや不良 C外面：灰色7.5Y6/1～N6/、内面：灰黄褐色10YR6/2～灰色N6/	天井部内面にヘラ記号 ほぼ完形
95	25	須恵器	杯蓋	3号窯 B区左最終床面	①12.2～13.2 ④4.2	外面3/5回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を多く含む。 B良好 C青灰色10BG5/1	外面にヘラ記号 焼け歪みあり 口縁部1/8欠損
96	25	須恵器	杯蓋	3号窯 C区最終床面 3号窯 焚口最終灰原上面 3号窯	①12.1 ②3.6	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B良好 C外面：緑灰色10GY6/1～青灰色5B6/1、内面：灰色N5/～灰黄色2.5Y7/2	外面にヘラ記号 ほぼ完形
97	25	須恵器	杯蓋	3号窯 C区最終床面直上 3号窯 B区最終床面 3号窯 B区埋土	①12.5 ②3.9	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径5mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B良好 C灰色N5/～暗青灰色5B4/1	外面にヘラ記号 口縁部1/6欠損
98	25	須恵器	杯蓋	3号窯 C区左側	①12.9 ④4.15	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面：灰色N6/～明オリーブ灰色5GY7/1、内面：明オリーブ灰色2.5GY7/1	外面にヘラ記号 ほぼ完形
99	25	須恵器	杯蓋	3号窯 C区最終床面 3号窯 B区埋土	①12.6 ④4.4	外面2/5回転ヘラケズリ、内面2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C緑灰色10G6/1～灰色N5/	外面にヘラ記号 口縁部1/6欠損
100	25	須恵器	杯蓋	3号窯 B区右最終床面	①12.8 ④4.7	外面2/3回転ヘラケズリ、内面1/2横ナデ、他は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B不良 C灰白色5Y8/2～灰色N5/	2/3残存
101	25	須恵器	壺蓋	3号窯 B・C区最終床面	①8.3④4.2 ④11.0 つまみ径2.6 つまみ高0.8	外面1/2カキメ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N6/～N4/	4/5残存
102	25	須恵器	壺蓋	3号窯 B区右最終床面	①9.2④4.6 ④12.3 つまみ径2.5 つまみ高0.8	外面5/6カキメ、内面2/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N6/、外面降灰：灰白色7.5Y6/1	外面にヘラ記号 5/6残存
103	26	須恵器	杯身 (穿孔杯)	3号窯 B区最下層	①10.0②3.4 ④12.1	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B良好 C灰色N5/	外面にヘラ記号 底部穿孔。ほぼ完形
104	26	須恵器	杯身	3号窯 B区最終床面 3号窯 焚口	①10.2②3.3 ④12.3	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N6/～灰白色N7/	外面降灰 口縁部1/8欠損
105	26	須恵器	杯身	3号窯 B区最終床面 3号窯 A～C区最終床面	①10.4②4.0 ④12.4	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。径6mm以下の白色砂礫を多く含む。 B良好 C外面：灰色N6/、内面：灰色N5/	93とセットの状態で出土 外面にヘラ記号 ほぼ完形
106	26	須恵器	杯身	3号窯 A～C区最終床面	①10.2②4.2 ④12.4	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。径2mm以下の白色粗砂をやや多く含む。 B良好 C灰色N6/	1/2残存
107	26	須恵器	杯身	3号窯 A～C区最終床面 3号窯 B区右最終床面 3号窯 焚口最終灰原上面	①10.5 ②4.4 ④12.9	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。径2mm以下の白色粗砂を多く含む。 B良好 C外面：灰白色7.5Y7/1(降灰)、内面：灰色N6/	3片接合しほぼ完形に復元できるが、そのうち1片は2次被熱顕著 外面降灰。ほぼ完形
108	26	須恵器	杯身	3号窯 C区最終床面直上	①10.6②4.2 ④12.9	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/6不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B良好 C灰色N6/～オリーブ灰色5GY5/1	外面にヘラ記号 ほぼ完形
109	26	須恵器	杯身 (穿孔杯)	3号窯 B区最終床面 3号窯 埋土	①10.8②4.1 ④12.7	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 Bやや不良 C外面：灰白色5Y8/1～灰色7.5Y5/1、内面：灰白色2.5Y8/2～灰色N5/	焼成後穿孔か ほぼ完形
110	26	須恵器	杯身 (穿孔杯)	3号窯 B区右最終床面	①11.3②4.5 ④13.4	外面2/3回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C外面：灰色10Y6/1、内面：灰色N5/	焼成前穿孔 完形
111	26	須恵器	杯身	3号窯 C・D区最終床面 3号窯 B区右最終床面 3号窯 B区左	①11.6 ②4.7 ④13.7	外面2/3回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N4/	焼け歪みあり 口縁部1/6欠損

第3表 牛頸小田浦窯跡群79地点出土遺物観察表⑤

遺物 番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径 ②器高③底径 ④最大径 ※()は復元径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備考
112	26	須恵器	杯身	3号窯 最終床面内	①11.2 ②4.0 ④13.4	外面1/3回転ヘラケズリー→ハケ状工具による擦過、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C 灰色N6/	外面にへう記号1/3残存
113	26	須恵器	杯身	3号窯 B区右最終床面	①12.6②4.0 ④15.0	外面1/2回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。径3mm以下の白色砂礫を多く含む。 B良好 C 灰色N5/	外面にへう記号器壁厚い。ほぼ完形
114	26	須恵器	高杯(杯部)	3号窯 C区最終床面直上	①(13.0) ④(15.0) 残存高3.3	外面2/3カキメ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂をやや多く含む。 B良好 C 外面：灰色N6/、内面：灰色N5/	杯部のみ2/5残存
115	26	須恵器	高杯(蓋)	3号窯 B区右最終床面 3号窯 B C区最終床面	①12.2 ②4.2	外面2/3カキメ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂・黒色粒子を少量含む。 B良好 C 灰色N5/	口縁部1/8欠損 外面に須恵器片軸着
116	26	須恵器	高杯(蓋)	3号窯 B区右最終床面	①(12.9) ②4.8	外面2/3回転ヘラケズリ、内面1/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C 灰色N6/	1/2残存
117	26	須恵器	高杯(蓋)	3号窯 B区最終床面 3号窯 B区右最終床面 3号窯 B区埋土	①13.3 ②5.4	外面2/5回転ヘラケズリ、内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。径2mm以下の白色粗砂をやや多く含む。 B良好 C 外面：灰色N6/、内面：オリーブ灰色2.5GY6/1	口縁端部外面に格子目タタキ状の痕跡がめぐる。ほぼ完形
118	26	須恵器	高杯(杯部)	3号窯 C区最終床面	①(10.8) 残存高4.0	杯部内外面回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C 灰色N5/～N6/	内面降灰 杯部1/3残存
119	26	須恵器	高杯(脚部)	3号窯 C区最終床面	残存高9.2 脚部径9.5	シボリ成形後回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C 明オリーブ灰色5GY7/1～緑黒色10GY2/1	内面にへう記号 側面降灰 脚部3/5残存
120	26	須恵器	高杯	3号窯 B区最終床面	①(10.6) ②11.3 脚部径9.4	杯部外面1/3回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、その他回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C 灰色N5/～N6/	脚部外面にへう記号 杯部・脚部とも3/4残存
121	26	須恵器	脚部	3号窯 C区左壁際	残存高4.0 脚部径8.1	回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C 青灰色5BG5/1	杯部との接合面残る 外面にへう記号 脚部完形
122	27	須恵器	横瓶	3号窯 窯尻(焼成部最上段覆土)	①12.7 ④25.9×23.5 残存高13.9	胴部外面カキメ→一部タタキ、胴部内面一部当て具痕→ナデ、口頸部内外面回転ナデ	A密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B良好 C 灰白色N7/～灰色N5/	実測図左側に閉塞痕1/4残存
123	27	須恵器	甕	3号窯 C区最終床面直上	①(15.5) 残存高6.3	胴部外面カキメ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 Bやや不良 C 緑灰色10GY6/1～灰色N6/	口頸部1/6残存
124	27	須恵器	甕	3号窯 B区右最終床面	残存高11.5	回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。B良好 C 明オリーブ灰色2.5GY7/1～緑黒色10GY2/1	斜線文(左下がり)を施文
125	27	須恵器	甕	3号窯 C区最終床面直上	残存高15.6	回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C 外面：青黒色5BG2/1～青灰色5BG5/1、内面：暗緑灰色10GY4/1～灰白色N7/	斜線文(左下がり)を施文。横位沈線との先後関係不明
126	27	須恵器	甕	3号窯 C区最終床面	残存高11.2	外面タタキ→回転ナデ、内面回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C 灰色N6/～青灰色5B5/1	斜線文(左下がり)・波状文を施す
127	27	須恵器	甕	3号窯 B区左壁際最終床面	①20.6 ②44.2 ④39.8	胴部外面擬格子目タタキ→一部カキメ、胴部内面同心円当て具痕、口頸部回転ナデ	A密。径4mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C 灰色N4/～N6/	頸部外面1/2のみ斜線文(右下がり)を施す 胴部上半降灰
128	28	須恵器	杯蓋	3号窯 B区左側 未焼成土器10	①13.6 ②4.5	外面1/2回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を僅かに含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/2	4/5接合
129	28	須恵器	杯身	3号窯 B区左側 未焼成土器10	①(11.2) ②(4.0) ④(13.4)	外面1/2回転ヘラケズリ、内面2/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3～8/4	土圧のため大きく歪む 4/5接合
130	28	須恵器	杯蓋	3号窯 B区左側 未焼成土器4	①(14.6) ②4.4	外面1/2回転ヘラケズリ、内面2/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を多少含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/4	3/5接合
131	28	須恵器	杯身	3号窯 B区左側 未焼成土器4	①(14.4) ④(16.2) 残存高2.9	回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を多少含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3	口縁部1/8残存 132と同一個体
132	28	須恵器	杯身	3号窯 B区左側 未焼成土器4	残存高2.0	外面回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ	A密。径3mm以下の白色粗砂を多少含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3	外底面へう記号状の痕跡あり。 131と同一個体
133	28	須恵器	杯蓋	3号窯 B区左側 未焼成土器9	①(12.8) ②4.8	外面1/2回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を僅かに含む。 B極めて不良 C 灰黄色2.5Y7/2～淡黄色2.5Y8/3	歪みあり 1/2接合
134	28	須恵器	杯身	3号窯 B区左側 未焼成土器9	①(14.0) ②(4.3) ④(15.9)	外面1/2回転ヘラケズリ、内面3/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を僅かに含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3	1/3接合
135	28	須恵器	杯身 杯蓋	3号窯 B区左側 未焼成土器11		身・蓋とも外面回転ヘラケズリあり	A密。径2mm以下の白色粗砂を多少含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3～にぶい黄色2.5Y6/3	土圧により大きく変形
136	28	須恵器	杯身 杯蓋	3号窯 B区左側 未焼成土器12	杯身 ④(14.7)	杯身外面回転ヘラケズリ、杯蓋も回転ヘラケズリの可能性が高い	A粗。径2mm以下の白色粗砂を含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3～浅黄色2.5Y7/3	土圧により大きく変形 杯蓋とした個体には口縁部は接合していない
137	28	須恵器	杯蓋	3号窯 B区左側 未焼成土器6	①(12.6) ②4.3	外面2/5回転ヘラケズリ、内面調整不明	A密。径3mm以下の白色粗砂を多少含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3～にぶい黄褐色10YR7/4	大きく3片の杯蓋が接着。同一個体であるかは不明
138	28	須恵器	杯蓋	3号窯 C区右側 未焼成土器最終床面直上	①(13.0) ②(4.6)	外面2/5回転ヘラケズリ、口縁部周辺回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂、黒雲母を少量含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3～8/4	1/5接合
139	28	須恵器	杯蓋	3号窯 B区左側 未焼成土器7	①(14.0) 残存高3.1	回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B極めて不良 C 浅黄色2.5Y7/3～2.5Y8/3	口縁部1/4残存
140	28	須恵器	杯蓋	3号窯 C区	①(13.7) ②(4.6)	外面2/5回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を僅かに含む。 B極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3	3/5接合
141	28	須恵器	杯蓋	3号窯 C区右側 未焼成土器4	①(13.0) ②4.7	天井部1/3回転ヘラケズリ、天井部内面調整不明、口縁部周辺回転ナデ	A密。3mm以下の白色粗砂を少量含む。 B極めて不良 C 外面：淡黄色2.5Y8/3、内面：淡黄色2.5Y8/3～浅黄色2.5Y7/4	蓋が2個体入れ子状に重なる。内側の個体歪む 2/3残存
142	28	須恵器	杯蓋	3号窯 B区左側 未焼成土器2	①(15.2) 残存高3.4	回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B極めて不良 C 浅黄色2.5Y7/4～2.5Y8/4	口縁部1/4接合

第3表 牛頸小田浦窯跡群79地点出土遺物観察表⑥

遺物 番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径 ②器高③底径 ④最大径 ※()は復元径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備考
143	29	須恵器	杯身	3号窯 C区右側 未焼成土器2	①(11.0) ②3.4 ④(13.0)	外面回転2/5以上ヘラケズリ (詳細不明)、内底面不定方向 ナデ、口縁部周辺回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を多少含む。 B 極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3～8/4	口縁部片小さく復元 径疑問 1/4接合
144	29	須恵器	杯身	3号窯 C区右側 未焼成土器最終 床面直上	①(11.1) ④(13.7) 残存高3.1	回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を僅かに含む。 B 極めて不良 C 灰白色2.5Y8/2～淡黄色 2.5Y8/3	口縁部2/5接合
145	29	須恵器	杯身	3号窯 B区左側 未焼成土器8	①11.7②4.5 ④14.0	外面2/5回転ヘラケズリ、内底面 不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 極めて不良 C 淡黄色2.5Y7/4	ほぼ完形
146	29	須恵器	杯身	3号窯 B区左側 未焼成土器3	①12.5 ④(14.6) 残存高2.5	回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3	口縁部1/5接合
147	29	須恵器	杯身	3号窯 C区右側 未焼成土器1	①(11.8) ②(3.7) ④(14.2)	外面回転2/5以上ヘラケズリ (詳細不明)、内底面不定方向 ナデ、口縁部周辺回転ナデ	A 密。径1mm程の白色粗砂を少量含む。 B 極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3	歪みあり。体部外面に 杯蓋片1点付着 2/3接合
148	29	須恵器	杯身	3号窯 B区左側 未焼成土器6	①(12.2) ④(14.5) 残存高2.2	回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3	口縁部1/5接合
149	29	須恵器	杯身	3号窯 B区左側 未焼成土器1 3号窯 B区左側	①(12.5) ②(4.1) ④(15.1)	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 不明、他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3～2.5Y7/3	歪みあり 1/4接合
150	29	須恵器	杯身	3号窯 B区左側 未焼成土器5	④(16.8) 残存長2.8	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 不明、他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 極 めて不良 C 浅黄色2.5Y7/4～淡黄色2.5Y8/3	大きく歪む 1/4接合
151	29	須恵器	杯身 杯蓋	3号窯 C区右側 未焼成土器3	杯身 ①(15.4)②5.2 杯蓋 ①(15.2)	身蓋とも回転ヘラケズリあり (範囲不詳)、内面調整不明	A 密。2mm以下の白色粗砂を多少含む。 B 極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3～暗灰黄色 2.5Y5/2	3/5残存した杯身と、1/4 残存した杯蓋で主に構 成される。大きく歪む 杯身天井部にヘラ記号
152	29	須恵器	甕	3号窯 C区右側 未焼成土器2	①(25.2) 残存高5.4	回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 極めて不良 C 淡黄色2.5Y8/3～8/4	頸部外面にヘラ記号 口頸部の1/5接合
153	29	須恵器	甕	3号窯 C区右側 未焼成土器1	①(23.7) 残存高11.8	体部外面擬格子タタキ、体部 内面同心円当て具痕、他は回 転ナデ	A 密。径3mm以下の白色粗砂を多少含む。 B 極めて不良 C 灰白色2.5Y8/2～浅黄色 2.5Y7/3	頸部外面に斜線文状 の痕跡。表面の摩滅激 しい。口頸部1/2残存
154	30	須恵器	杯蓋	3号窯 窯尻埋土(排煙部)	①(13.0) 残存高3.9	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 粗。径1mm以下の白色粗砂を多く含む。 B 良好 C 灰色5Y6/1	1/8残存
155	30	須恵器	杯身 (穿孔杯)	3号窯 窯尻埋土(排煙部)	①(10.4) ②3.3 ④(12.8)	外面3/5回転ヘラケズリ、内面 3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A やや粗。径3mm以下の白色粗砂をやや多く含 む。 B 不良 C 外面：浅黄色2.5Y7/3～灰色 7.5Y6/1、内面：浅黄色2.5Y7/3～にぶい黄色 2.5Y6/3	穿孔あり 1/4残存
156	30	瓦	平瓦	3号窯 窯尻埋土(排煙部)	残存長10.6 残存幅9.4	凸面：平行タタキ→ケズリ、凹 面：ケズリ	A 密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 橙色7.5YR7/6	
157	30	須恵器	甕	3号窯 窯尻埋土(排煙部)	①(33.6) 残存高18.3 残存幅26.5	胴部内面当て具痕、他は回転 ナデ	A 密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B 良好 C 外面：灰白色N7/、内面：暗オリーブ灰 色5GY3/1	斜線文は上下の横位 沈線に先行 口頸部1/6残存
158	31	須恵器	杯蓋	3号窯 灰原上面	①12.2 ②3.6	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B 良好 C 灰色7.5Y6/1	外面にヘラ記号 口縁部1/3欠損
159	31	須恵器	杯蓋	3号窯 灰原上面	①12.9 ②4.0	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 1/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 灰色N5/	外面にヘラ記号。外面 降灰。天井部に降灰し ていない円形の重ね 焼き痕跡あり。口縁部 1/3欠損
160	31	須恵器	杯身	3号窯 灰原上面	①(10.1) ②3.6 ④(12.3)	外面3/5回転ヘラケズリ、内面 1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂少量含む。B 良好 C 外面：灰色N6/～灰白色7.5Y7/1、内面：灰色 5Y6/1	1/2残存
161	31	須恵器	杯身	3号窯 灰原上面	①10.7 ②3.7 ④12.8	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 2/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 赤灰色5R5/1～灰色N5/	外面にヘラ記号。内面 に径5～8mmの焼き 膨れ多数。ほぼ完形
162	31	須恵器	杯蓋	3号窯 灰原上面	①12.4②3.0 ④14.4	外面3/5回転ヘラケズリ、内面 2/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径3mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 外面：灰色7.5Y6/1、内面：灰色N5/	口縁部1/2欠損
163	31	須恵器	高杯蓋	3号窯 灰原上面	残存高2.6	天井部カキメ、天井部内面不 定方向ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 外面：黄灰色2.5Y5/1、内面：灰色5Y5/1	天井部1/2残存
164	31	須恵器	高杯	3号窯 灰原上面	①11.4 ②12.7 脚裾部径9.6	杯部内底面降灰のため調整不 明、その他回転ナデ。脚部シボ リ痕あり	A 密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 外面：灰色N4/～10Y6/1、内面：灰色 5Y6/1～N4/	脚部内面にヘラ記号 杯部2/5欠損
165	31	須恵器	高杯	3号窯 灰原上面	①(12.5) ②12.5 脚裾部径(9.5)	杯部外面1/4回転ヘラケズリ、 内底面不明、その他回転ナデ。 脚部シボリ痕あり	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 灰白色7.5Y7/1～灰色N4/	降灰の状況から杯部を 斜め上方にして焼成か 杯・脚裾部1/2欠損
166	31	須恵器	甕	3号窯 灰原上面	①(22.2) 残存高8.0	胴部外面擬格子タタキ、胴部 内面同心円当て具痕(下→上、 右→左)、口頸部回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 褐灰色10YR5/1～灰色N5/	口縁～肩部1/6残存
167	31	須恵器	甕	3号窯 灰原上面	①(21.8) 残存高10.6	胴部外面格子目タタキ→カキ メ、胴部内面同心円当て具痕 (上→下)、他は回転ナデ	A 密。砂礫はほとんど含まない。 B 良好 C 黄灰色2.5Y6/1～青灰色5PB5/1	頸部1/4・口縁端部わ ずかに残存
168	32	須恵器	杯蓋	3号窯 灰原2層(25層)	①(12.1) ②4.7	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B やや不良 C 外面：黄灰色2.5Y6/2、内面： 暗灰黄色2.5Y5/2	外面にヘラ記号 1/2残存
169	32	須恵器	杯蓋	3号窯 たちわり上下間 黄橙色 土(33層)	①(13.5) ②3.9	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 外面：灰色N5/～4/、内面：灰色N4/～ 10Y5/1	1/3残存
170	32	須恵器	杯身	3号窯 たちわり3面上 橙色土 (34層)	①10.5 ②3.7 ④12.6	外面2/3回転ヘラケズリ、内面 3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 外面：灰色N5/、内面：灰色N4/	外面にヘラ記号 口縁部1/6欠損 外面降灰

第3表 牛頸小田浦窯跡群79地点出土遺物観察表⑦

遺物 番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径 ②器高③底径 ④最大径 ※()は復元径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
171	32	須恵器	杯身	3号窯 たちわり3面上 橙色土 (34層)	①11.5 ④13.3 残存高2.7	外面2/3回転ヘラケズリ、他は 回転ナデ	Aやや粗。径2mm以下の白色粗砂をやや多く含む。 B良好 C灰色N4/	口縁部1/3残存
172	32	須恵器	杯身	3号窯 たちわり15層(35層)	①(10.8) ④(13.6) 残存高3.3	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C青灰色5B5/1	口縁部1/4残存
173	32	須恵器	杯身	3号窯 たちわり20層(40層)	①(12.2) ④(14.6) 残存高3.2	回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C外面：暗黄灰色2.5Y5/2～黒褐色 2.5Y3/1、内面：暗緑灰色10GY4/1	1/6残存
174	32	須恵器	高杯	3号窯 たちわり3面上 橙色土 (34層)	①(11.8) ②15.0 脚部径(10.7)	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。径3mm以下の白色粗砂をやや多く含む。 B良好 C灰色N6/	降灰状況から杯部を 斜め上方にし焼成か 口縁部3/5、脚部1/2 残存
175	34	須恵器	杯蓋	4号窯 表土	①(12.5) ②4.0	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色粗砂を少量含む。 Bやや不良 C外面：灰白色N7/1～10YR8/2、内 面：灰白色2.5Y7/1～浅黄色2.5Y7/3	外面にヘラ記号 2/5残存
176	34	須恵器	杯蓋	4号窯 表土 4号窯 灰原検出面	①12.5 ②3.8	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 1/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C青灰色5B5/1	外面にヘラ記号 口縁部1/4欠損
177	34	須恵器	杯身	4号窯 表土 4号窯 灰原検出面	①(11.5) ②3.2 ④(13.0)	外底面回転ヘラケズリか(降 灰詳細不明)、内面1/2不定方 向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C青灰色5B5/1	1/4残存
178	34	須恵器	杯蓋	4号窯 表土	残存高1.7	天井部外面回転ヘラケズリ、 天井部内面不定方向ナデ、回 転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B不良 C外面：黄灰色2.5Y6/1～黄褐色 2.5Y5/3、内面：ぶい黄褐色10YR6/4	天井部1/4残存
179	34	須恵器	杯蓋	4号窯 表土	①(14.3) ④(16.6) 残存高2.6	天井部外面回転ヘラケズリ、 天井部内面不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A密。径3mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 Bやや不良 C明オリープ灰色5GY7/1	1/5残存
180	34	須恵器	杯身	4号窯 表土	残存高2.9	外面回転ナデ、内底面不定方 向ナデか	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B不良 C外面：黄灰色2.5Y6/1～にぶい黄 色2.5Y6/4、内面：暗黄灰色2.5Y5/2～浅黄色 2.5Y7/3	底部1/8残存
181	34	須恵器	高杯	4号窯 表土	残存高8.5 脚部径 (11.4)	杯部外面回転ヘラケズリ、内 底面は不定方向ナデ。脚部シ ボリ痕あり	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B不良 C外面：明緑灰色10GY7/1～灰白色 10YR8/2、内面：灰白色2.5Y7/1～にぶい黄褐色 10YR7/3	杯底部・脚部3/4残存
182	34	須恵器	杯蓋	4号窯 灰原検出	①(12.0) 残存高2.5	天井部外面回転ヘラケズリ、 他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N4/	口縁部1/7残存
183	34	須恵器	杯身	4号窯 灰原検出面	①(11.0) ②4.2 ④(13.1)	外面3/5回転ヘラケズリ、内面 1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N6/～明黄褐色10YR7/6	口縁部小片のため復 元径不確定
184	34	須恵器	杯蓋	4号窯 灰原検出面	残存高1.3	回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B不良 C外面：褐色7.5YR6/6、内面：明黄褐色 10YR7/6～にぶい黄褐色10YR6/3	口縁部小片
185	34	須恵器	杯蓋 (穿孔杯)	3・4号窯 表土	①12.6 ②4.3	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。径2mm以下の白色粗砂をやや多く 含む。 B不良 C外面：灰白色5Y8/1～灰色 5Y6/1、内面：灰白色5Y8/1～灰色10Y5/1	外面にヘラ記号 焼成前穿孔 口縁部1/3欠損
186	34	須恵器	杯蓋	3・4号窯 表土	①(13.0) ②3.9	外面2/5回転ヘラケズリ、内面 1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色7.5Y6/1	外面にヘラ記号 2/5残存
187	34	須恵器	杯蓋	3・4号窯 表土	①(10.8) ②3.7 ④(12.9)	外面1/3回転ヘラケズリ、内面 1/4横ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 Bや や不良 C外面：灰色7.5Y6/1～灰オリープ色 5Y6/2、内面：灰色10Y6/1～灰初マ色5Y6/2	1/3残存
188	34	須恵器	杯身	3・4号窯 表土	①(13.1)②4.7 高台径(8.0) 高台高1.0	内底面横ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 Bやや不良 C外面：灰色7.5Y6/1～浅黄色 2.5Y7/3、内面：灰オリープ色5Y6/2	1/3残存
189	34	須恵器	高杯	3・4号窯 表土	①(11.8) ④(14.0) 残存高3.9	外面カキメ・ナデ、内面3/4不 定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N5/～6/	1/2残存
190	36	須恵器	杯蓋	17トレンチ	①(11.1) ②(3.1)	外面1/2回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径1mm以下の角閃石を多少含む。 B良好 C外面：灰白色N7/、内面：青灰色5PB6/1～5/1	外面ヘラ記号 口縁部1/6残存
191	36	須恵器	杯蓋	15トレンチ	①(12.6) ②3.1	天井部外面ヘラ切り後ナデ、 内面2/5不定方向ナデ、他は回 転ナデ	A密。径3mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰白色N7/～灰色N6/	内面に杯身の口唇部 が付着。焼け歪む 1/3残存
192	36	須恵器	杯蓋	15トレンチ (5号窯上面)	①(12.2) ②3.8	天井部外面回転ヘラ切り後粗 いナデ、内面1/2不定方向ナ デ、他は回転ナデ	A密。径1mm程の白色粗砂を僅かに含む。 B良好 C外面：灰赤色2.5YR6/2～5/2、内面：灰 褐色5YR5/2～にぶい赤褐色5YR5/3	外面にヘラ記号 2/5残存
193	36	須恵器	杯身	17トレンチ	①(10.7) ④(13.0) 残存高1.6	回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を多く含む。 B良好 C外面：灰色5Y4/1、内面：灰色N4/	口縁部1/8残存
194	36	須恵器	杯身	18トレンチ	①(10.8) ②3.8 ④(12.8)	外面1/3回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。砂粒をほとんど含まない。B良好 C外面：灰色N6/、内面：青灰色5PB6/1	外面にヘラ記号 1/3残存
195	37	須恵器	高杯 (杯部)	9トレンチ	①(12.4) ④(15.0) 残存高3.7	外面2/3カキメ、内面1/2不定 方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B良好 C外面：暗緑灰色7.5GY4/1、内面：褐灰 色10YR4/1	杯部1/4残存
196	37	須恵器	杯身	11トレンチ	①(10.6) ②3.9 ④(12.6)	外面3/5回転ヘラケズリ、内面 1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C褐灰色10YR5/1～灰黄褐色 10YR6/2	外面にヘラ記号2種 体部外面に須恵器片 軸着。1/3残存
197	37	須恵器	高杯 (杯部)	11トレンチ	①(11.9) 残存高4.1	杯部外底面回転ヘラケズリ、 内底面不定方向ナデ、他は回 転ナデ	A密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B良好 C灰色N5/～緑黒色5G2/1	体部に斜線文施文 1/4残存

第3表 牛頸小田浦窯跡群79地点出土遺物観察表⑧

遺物 番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径 ②器高③底径 ④最大径 ※()は復元径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備考
198	37	須恵器	高杯 (脚部)	11トレンチ	残存高9.0 脚部径 (10.2)	シボリ成形→回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 外面: 灰色N6/～緑灰色7.5GY5/1、 内面: 緑黒色7.5GY2/1	2段透かし 脚部1/2残存
199	37	須恵器	脚部 (壺類)	11トレンチ	残存高6.4 脚部径 10.6	体部内面ナデ、他は回転ナデ。 脚部シボリ痕あり	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 外面: 灰色N4/～6/、内面: 明オリーブ 灰色2.5GY7/1～黄灰色2.5Y5/1	脚部2/3残存
200	37	須恵器	短頸壺	11トレンチ	①(6.6) ④(11.2) 残存高2.9	回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 灰色N5/	降灰状況から蓋痕跡 確認。外面一部降灰 口縁部1/4残存
201	37	須恵器	平瓶	11トレンチ	残存高8.8	内外面回転ナデ 円形粘土板(径6.9cm)閉塞→ 穿孔→口頸部接合	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B やや不良 C 外面: 灰白色N7/～浅黄色 2.5Y7/4、内面: 黄灰色2.5Y6/1～にぶい黄色 2.5Y6/3	体部閉塞状況が観察 可能。天井部外面にへ う記号
202	37	須恵器	甕	11トレンチ	残存高11.2	回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 暗オリーブ灰色2.5GY3/1	斜線文と横位沈線文 の先後関係不明
203	37	須恵器	甕	11トレンチ	残存高9.5	回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 外面: 明緑灰色7.5GY7/1～明青灰色 5B7/1、内面: 暗オリーブ灰色2.5GY4/1～3/1	上段横位沈線→上段斜 線文→下段横位沈線→ 下段斜線文の順番か
204	37	須恵器	杯蓋	13トレンチ拡張	①(12.2) ②3.6	天井部外面回転へら切り後ナ デ、内面1/2不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 外面: 緑灰色10G6/1、内面: 灰色N6/ ～明黄褐色10YR7/6	外面にへう記号 1/4残存
205	37	須恵器	杯身	13トレンチ拡張	①(10.2) ④(12.6) 残存高2.8	回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 灰色N5/	復元径不確実 外面降灰 口縁部1/7残存
206	37	須恵器	杯身	13トレンチ	①(10.0) ②3.3 ④(12.0)	外底面回転へら切り後ナデ、 内面2/3不定方向ナデ、他は回 転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂をごく少量含む。 B 良好 C 灰色N6/～5Y4/1	外面降灰 1/5残存
207	37	須恵器	杯蓋	24トレンチ	①(13.4) ②(4.0)	外面3/4回転へラケズリ、他は 回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 灰色10Y6/1～4/1	1/6残存
208	42	須恵器	杯蓋	27トレンチ SX01上面	①(11.7) ②(3.0)	天井部外面へら切り後ナデ、 内面2/5不定方向ナデ、他は回 転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂、黒色粒子を少量含 む。 B 良好 C 外面: 灰白色N7/～灰色N6/、内 面: 灰色7.5Y6/1	外面にへう記号 歪みあり。1/3残存
209	42	須恵器	杯蓋	27トレンチ SX01黒色土 (1層)	①(11.8) ②(3.7)	天井部外面回転へラケズリ→ 一部粗いナデ、内面1/4不定方 向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂を僅かに含む。 B やや不良 C 外面: 灰白色5Y8/1～7/1、内面: 灰白色5Y7/2	復元径不確実 1/6残存
210	42	須恵器	杯蓋	27トレンチ SX01褐色土 (2層)	①(13.3) 残存高2.7	回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂、黒色粒子を少量含 む。 B 良好 C 外面: 灰色N4/～暗灰色N3/、内 面: 灰色N6/	口縁部1/5残存
211	42	須恵器	杯蓋	27トレンチ SX01上面	①(13.3) ②4.1	天井部外面回転へら切り後ナ デ、内面2/3不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 外面: 黄灰色2.5Y6/1、灰色N4/、内 面: 黄灰色2.5Y5/1～6/1	1/3残存
212	42	須恵器	杯蓋	27トレンチ SX01上面	①(8.9) ②2.2 ④(10.9)	外面3/5回転へラケズリ、内面 1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を僅かに含む。 B 良好 C 赤灰色2.5YR5/1～にぶい赤褐色 2.5YR5/3	天井部破断面際にツ マミ貼り付け痕跡。 1/5残存
213	42	須恵器	杯身	27トレンチ SX01上面	①(10.2) ④(11.9) 残存高2.3	回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂を若干含む。 B 良好 C 外面: 灰オリーブ色5Y4/2(自然釉)、内面: 灰白 色N7/～灰色N6/	外面降灰。受部に蓋の 口縁端部軸着 口縁部1/5残存
214	42	須恵器	杯身	27トレンチ SX01上面	①(10.0) ④(12.1) 残存高3.1	外面1/2回転へラケズリか(降 灰のため詳細不明)、他は回転 ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂、黒色粒子を僅 かに含む。 B 良好 C 外面: オリーブ灰色 2.5GY5/1～暗オリーブ灰色2.5GY4/1(降灰)、 内面: 灰色N6/	口縁部1/7残存
215	42	須恵器	杯身	27トレンチ SX01黒色土 (1層)	①(10.9) ④(13.1) 残存高2.1	回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂を僅かに含む。 B 良好 C 外面: 灰白色7.5Y7/2、内面: 暗赤灰 色10YR3/1	口縁部1/6残存
216	42	須恵器	杯身	27トレンチ SX01褐色土 (2層)	①(10.7) ②(3.0) ④12.8	外底面は回転へら切り後ナ デ、内面1/3不定方向ナデ、他 は回転ナデ	A 密。径3mm以下の白色粗砂を多少含む。 B 良好 C 灰色N6/～5/	外面にへう記号 口縁部1/8残存
217	42	須恵器	脚部 (壺類)	27トレンチ SX01上面	③(14.8) 残存高5.6	回転ナデ	A 密。径2mm以下の白色粗砂を多少含む。 B やや不良 C 外面: 褐色7.5YR6/6～明褐色 7.5YR5/6、内面: にぶい黄褐色10YR7/4	脚部上端に穿孔あり 脚部1/3残存
218	42	須恵器	甕	27トレンチ SX01黒色土 (1層)	残存高11.6	回転ナデ	A 密。径3mm以下の白色粗砂を多少含む。 B 良好 C 外面: 暗灰色N3/、内面: 青灰色5B6/1	斜線文→下段の横位 沈線
219	49	須恵器	杯蓋	29トレンチ	①(11.0) ②(3.1)	外面3/4回転へラケズリ、内面 1/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく僅かに含む。 B 良好 C 外面: 暗灰色N3/、内面: 灰色N4/	口縁部1/7残存
220	49	須恵器	杯身	29トレンチ	①(11.3) ④(14.0) 残存高3.1	回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂をごく僅かに含む。 B やや不良 C 外面: 灰色N6/～5/、内面: 浅黄橙 色10YR8/4～にぶい黄褐色10YR7/4	口縁部1/6残存
221	49	須恵器	高杯	29トレンチ	脚部径(14.6) 残存高1.6	回転ナデ	A 密。径1mm以下の白色粗砂、黒色粒子をごく僅 かに含む。 B 良好 C 外面: 暗灰色N3/、内面: 灰 色N7/	内面降灰 脚部1/10残存
222	49	須恵器	甕	29トレンチ	①(13.0) 残存高4.4	回転ナデ	A 密。径3mm以下の白色粗砂を少量含む。 B 良好 C 暗灰色N3/～灰色N6/	口縁部の1/3残存
223	49	須恵器	甕	29トレンチ SX04	残存高19.9 頸部高19.0	胴部内面は同心円当て具痕、 他は回転ナデ	A 密。径3mm以下の白色粗砂を多少含む。 B 良好 C 外面: 灰白色N7/～灰色N6/、内面: 暗 灰色N3/～灰色N5/	口頸部内面に窯壁片、 不明須恵器片付着 斜線文施文
224	51	瓦	平瓦	表採	残存長7.6 残存幅16.2	凸面: 擬格子タタキ→ナデ、凹 面: 同心円当て具痕→ナデ	A 密。径4mm以下の白色砂礫を多く含む。 B やや不良 C 明赤褐色5YR5/8	
225	51	瓦	平瓦	表採	残存長7.0 残存幅6.5	凸面: 擬格子タタキ→ナデ、凹 面: 布目痕、模骨痕あり	A 密。径4mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B やや不良 C 凸面: 赤褐色5YR4/6、凹面: 褐色 5YR6/8	
226	51	瓦	平瓦	表採	残存長8.5 残存幅8.0	凸面: 平行タタキ、凹面: 布目 痕→一部ナデ、模骨痕あり	A 密。径3mm以下の白色砂礫を少量含む。 B やや不良 C 明赤褐色5YR5/8	
227	51	瓦	平瓦	表採	残存長12.0 残存幅11.5 模骨幅2.0前後	凸面: 平行タタキ、凹面: 布目 痕、模骨痕あり	A 密。径3mm以下の白色砂礫をやや多く含む。 B やや不良 C 凸面: 褐色5YR6/8、凹面: 明赤褐 色5YR5/6	布上端の折り返し痕 跡あり
228	51	瓦	丸瓦	表採	残存長16.0 残存幅11.5	凸面: 平行タタキ、凹面: 同心 円当て具痕→一部ナデ	A 密。径6mm以下の白色砂礫を少量含む。 B やや不良 C 褐色7.5YR6/6～浅黄褐色7.5YR8/4	

圖 版



(1) 小田浦窯跡群79地点遠景



(2) 1・2号窯跡検出状況



(1) 1号窯跡燃烧部検出状況
(3トレンチ) (北東から)



(2) 1号窯跡排煙部
遺物出土状況
(6トレンチ) (北東から)



(3) 1号窯跡排煙部検出状況
(6トレンチ) (北から)

(1) 1・2号窯跡検出状況
(3・4トレンチ)
(北東から)



(2) 2号窯跡焼部検出状況
(4トレンチ) (北から)



(3) 2号窯跡排煙部検出状況
(6トレンチ) (北から)





(1) 3・4号窯跡全景（東から）



(2) 3号窯跡排煙部（北西から）

(1) 3・4号窯跡検出状況
(東から)



(2) 3号窯跡排煙部
検出状況 (西から)



(3) 3号窯跡土層 (A-A')
(東から)





(1) 3号窯跡土層 (B-B')
(東から)



(2) 3号窯跡土層 (C-C')
(南東から)



(3) 3号窯跡天井部
遺存状況 (東から)

(1) 3号窯跡煙道部付近
縦断面土層（北から）



(2) 3号窯跡溝部土層
（南西から）



(3) 3号窯跡燃烧部
土師器甕出土状況
（東から）





(1) 3号窯跡燃烧部
遺物出土状況
(東から)



(2) 3号窯跡焼成部
遺物出土状況
(身・蓋セット)
(北東から)



(3) 3号窯跡焼成部上端
遺物出土状況 (横瓶)
(南から)

(1) 3号窯跡焼成部左側
焼成不良須恵器
出土状況（北東から）



(2) 3号窯跡焼成部左側
焼成不良須恵器
出土状況（礫除去）
（北東から）



(3) 3号窯跡焼成部右側
焼成不良須恵器
出土状況（南から）





(1) 3号窯跡燃烧部
左側壁（北東から）



(2) 3号窯跡燃烧部
右側壁（南東から）



(3) 3号窯跡焼成部
右側壁（貼壁）
（南から）

(1) 3号窯跡焼成部～
排煙部（東から）



(2) 3号窯跡煙道部1
（東から）



(3) 3号窯跡煙道部2
（東から）





(1) 3号窯跡煙道部3
(東から)



(2) 3号窯跡煙道部4
(東から)



(3) 3号窯跡煙道部5
(南東から)

(1) 3号窯跡煙道部6
(北西から)



(2) 3号窯跡煙道部7
(南東から)



(3) 3号窯跡煙道部8
(南東から)





(1) 3号窯跡煙道部9
(西から)



(2) 3号窯跡最終操業面
トレンチ (東から)



(3) 3号窯跡最終操業面
トレンチ土層 (南から)

(1) 3号窯跡完掘状況
(西から)



(2) 4号窯跡排煙部
検出状況 (東から)



(3) 4号窯跡排煙部土層
(南から)





(1) 4号窯跡排煙部土層
(西から)



(2) 4号窯跡排煙部
完掘状況 (東から)



(3) 3号窯跡埋め戻し状況
(北東から)



(1) 3・4号窯跡調査
終了状況 (東から)



(2) 5号窯跡灰原検出状況
(17トレンチ) (北西から)



(3) 5号窯跡焼部検出状況
(15トレンチ) (北東から)



(1) 5号窯跡焼成部検出状況
(19トレンチ) (南西から)



(2) 5号窯跡排煙部検出状況
(18トレンチ) (北東から)



(3) 調査地点から
四王寺山を望む
(南西より)

(1) 調査着手前
(北から)

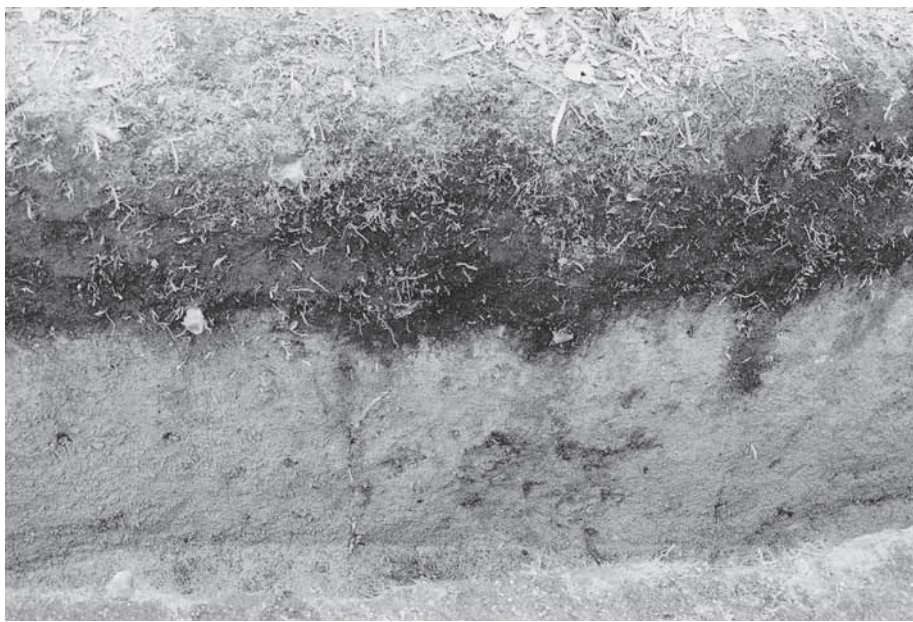


(2) 作業風景
(12トレンチ)



(3) 1トレンチ
(北西から)





(1) 2トレンチ土層
(北東から)



(2) 7トレンチ
(北東から)



(3) 8トレンチ
(北から)

(1) 9トレンチ
(北西から)



(2) 10トレンチ
(南から)



(3) 11トレンチ
(南から)





(1) 13トレンチ
(南から)



(2) 14トレンチ
(北から)



(3) 16トレンチ
(南から)



(1) 20トレンチ拡張部
(北東から)



(2) 21トレンチ
(南から)



(3) 22トレンチ
(北から)



(1) 23トレンチ
(北から)



(2) 24トレンチ
(北東から)



(3) 24トレンチ土層
(北西から)

(1) 25トレンチ
(北東から)



(2) 26トレンチ
(南から)



(3) 27トレンチ
SX01検出状況
(北西から)

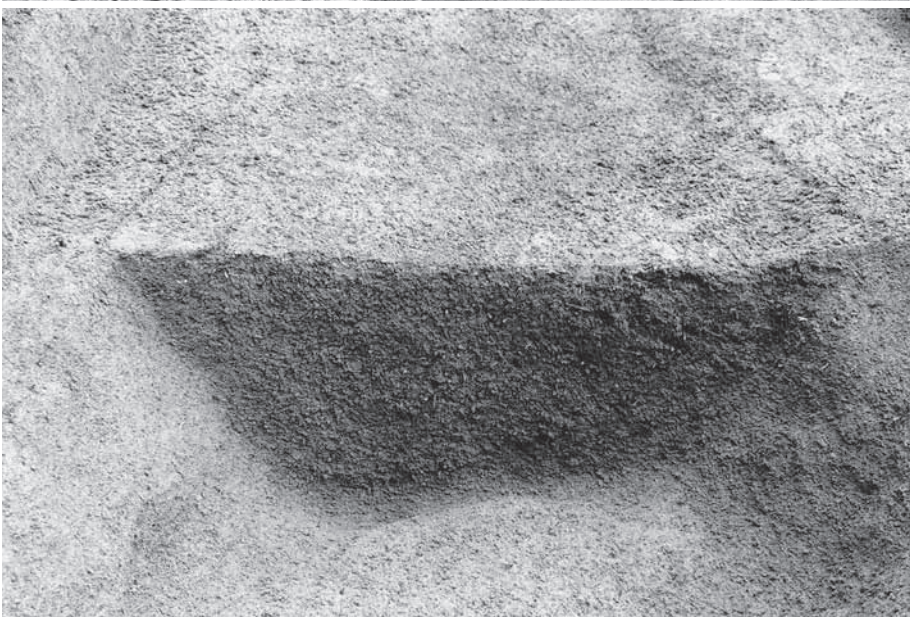




(1) 27トレンチ
SX01土層
(北西から)



(2) 28トレンチ
(西から)



(3) 28トレンチ
SX02土層
(東から)

(1) 29トレンチ
遺構検出状況
(西から)



(2) 29トレンチ
SX04検出状況
(西から)



(3) 29トレンチ
SX04土層
(北西から)





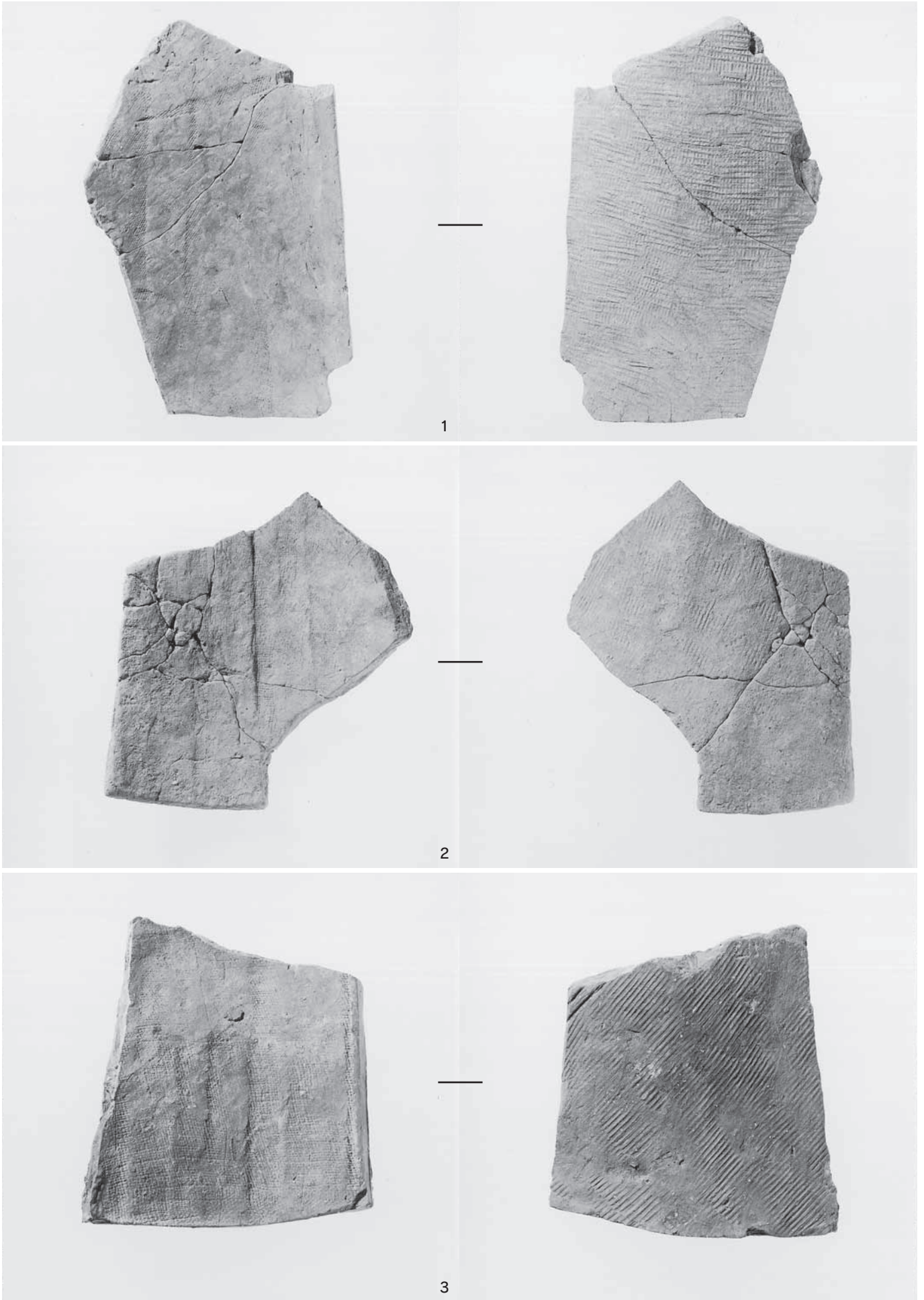
(1) 30トレンチ
(東から)



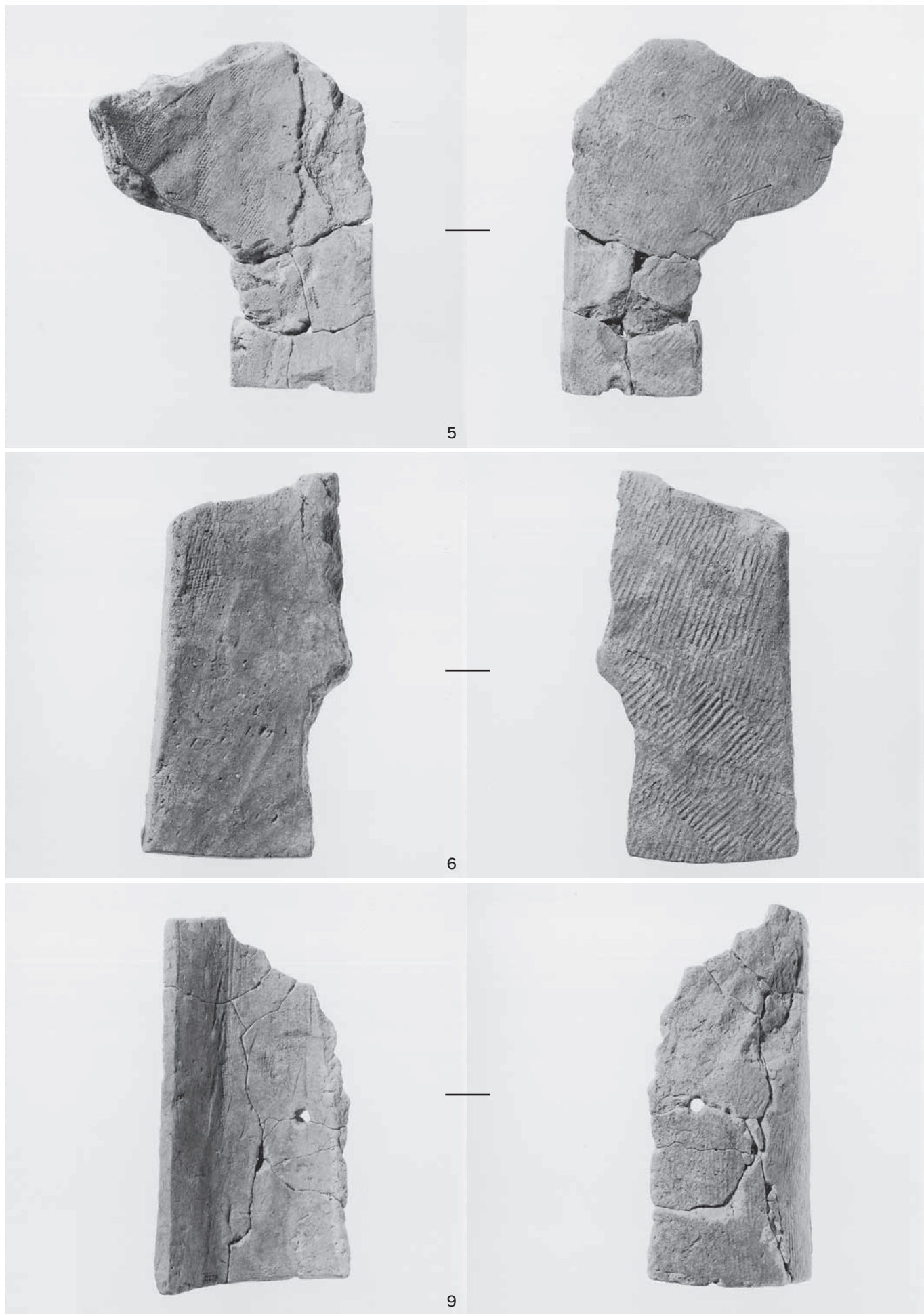
(2) 31トレンチ
(南東から)



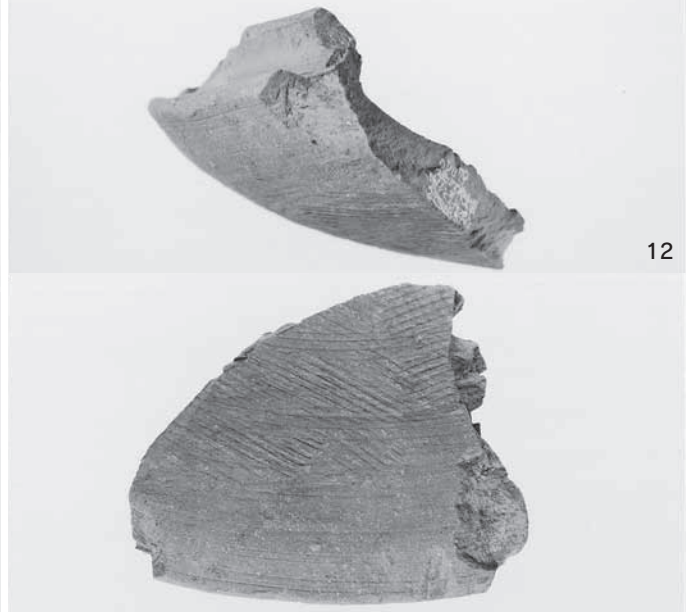
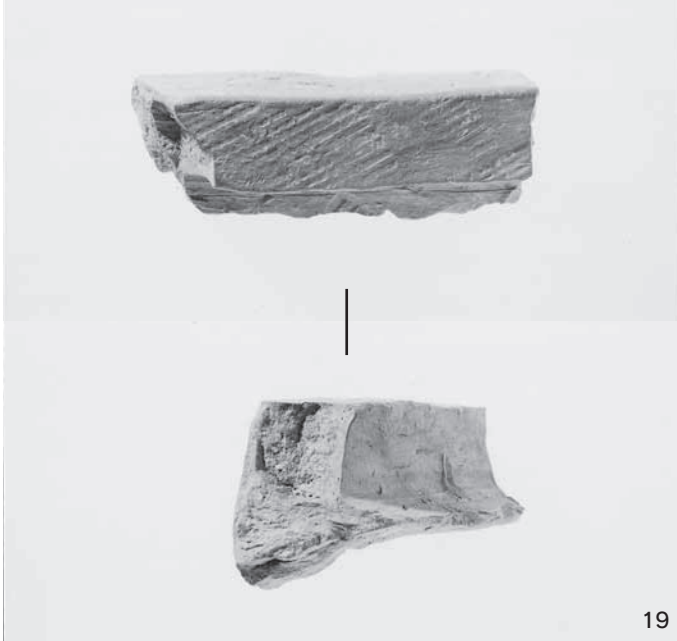
(3) 現地説明会
(2005.3.5)



1号窯跡出土遺物 (1)

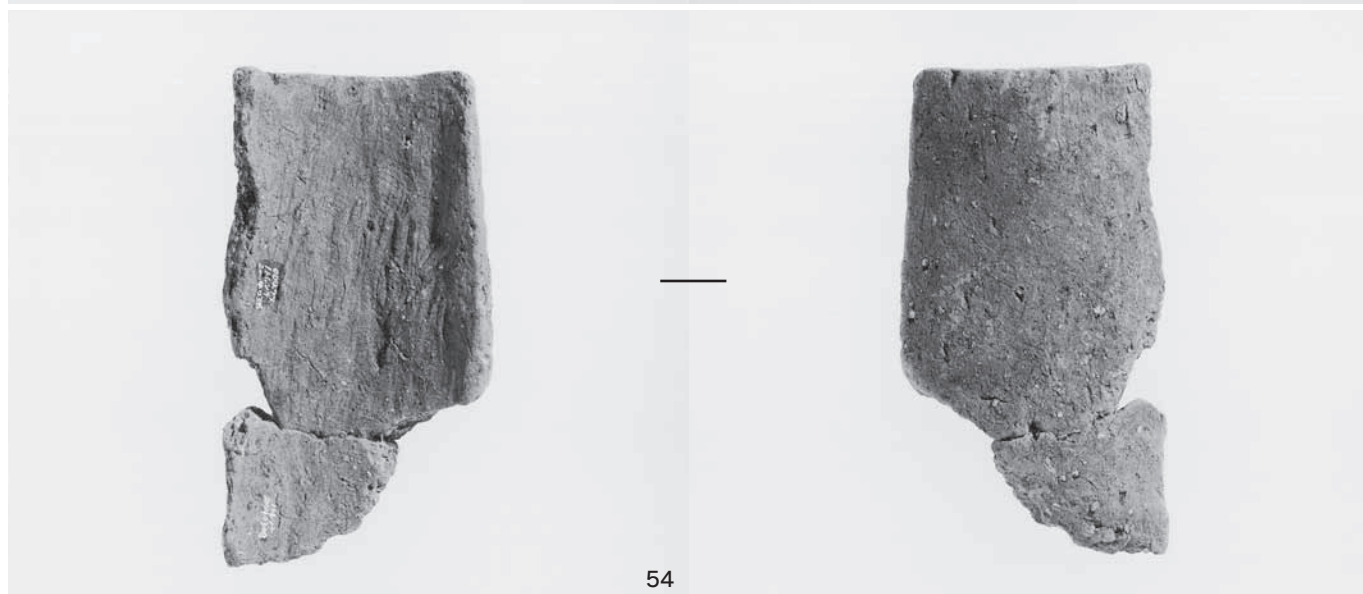
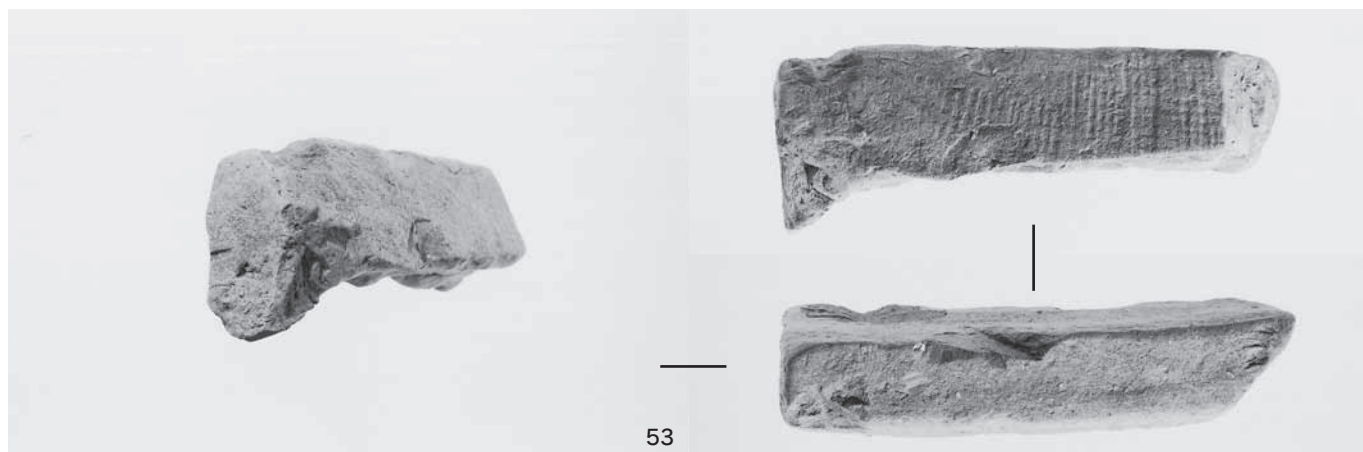


1号窯跡出土遺物 (2)



2号窯跡出土遺物





1・3トレンチ出土遺物

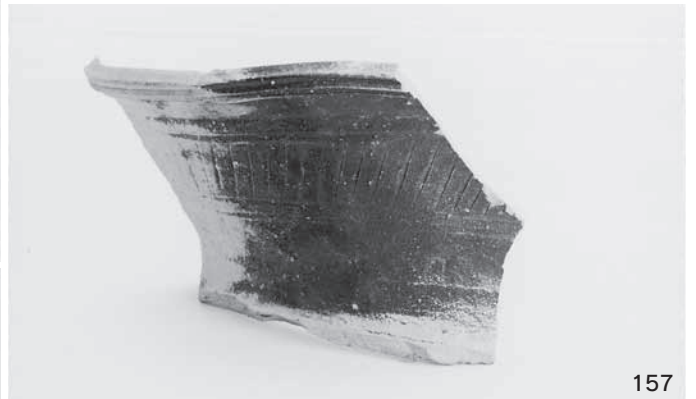


3トレンチ出土遺物、3号窯跡出土遺物（1）



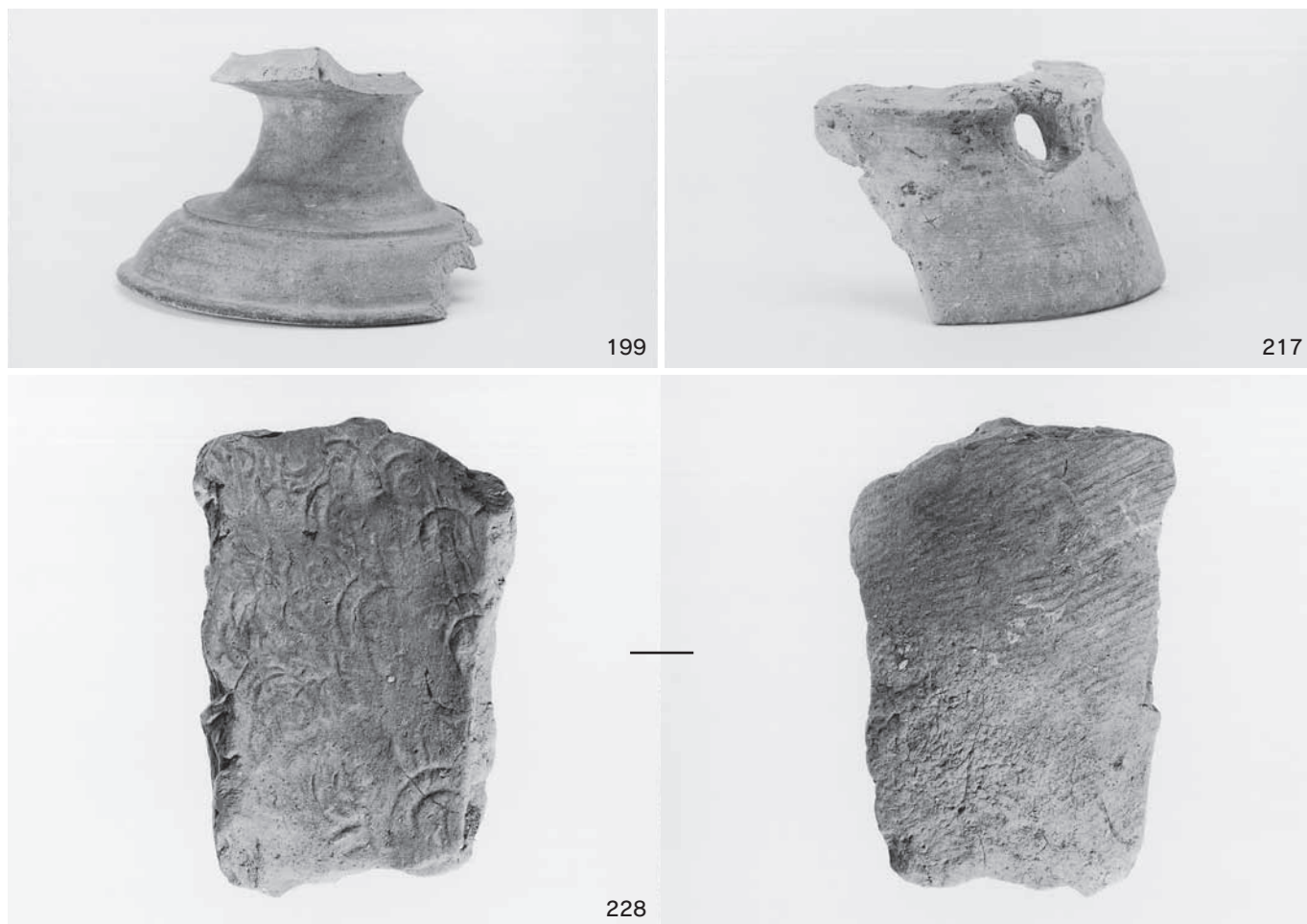
3号窯跡出土遺物 (2)





3号窯跡出土遺物 (4)





11・27トレンチ出土遺物、表採遺物



10



67



93



26



89



94



38



90



95



64



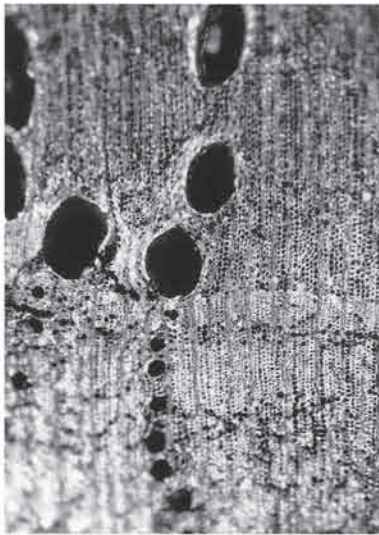
92



96



ヘラ記号 (2)



横断面 ————— : 0.4mm

1. ③ シイ属



放射断面 ————— : 0.4mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm

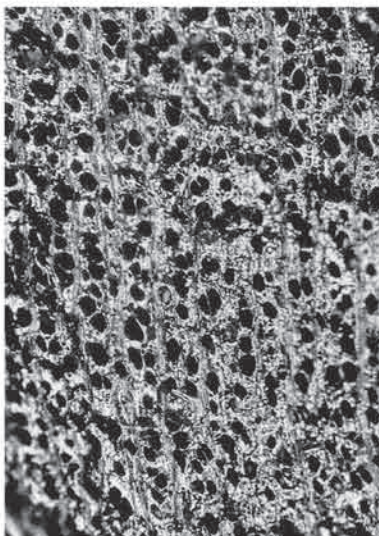
2. ② コナラ属アカガシ亜属



放射断面 ————— : 0.4mm



接線断面 ————— : 0.4mm



横断面 ————— : 0.4mm

3. ⑨ イスノキ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

報告書抄録

ふりがな	うしくびおだうらかまあとぐん							
書名	牛頸小田浦窯跡群Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第73集							
編著者名	林潤也							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 ☎092(501)2211							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
おだうらかまあとぐん 小田浦窯跡群 79地点	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 うしくび 牛頸1丁目 2392-1 他			33° 29' 35"	130° 27' 50"	20040308～ 20040318 20040921～ 20050114 20051220～ 20060313	440m ²	学術研究 遺跡整備
所有遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
小田浦窯跡群 79地点	生産遺跡	古墳～飛鳥		窯跡5基 土坑・ピット		須恵器・瓦 ・土師器		
要約	小田浦窯跡群79地点は、遺跡の範囲確認、窯跡の構造把握等を目的として、3ヶ年にわたる確認調査を実施した。その結果、5基の須恵器窯跡（6世紀末～7世紀前半：4基、7世紀後半：1基）と土坑・ピットを検出した。これまでの牛頸窯跡群の調査において、当該期の窯跡が群集して確認された事例はなく、須恵器生産の中心的なエリアであったことがわかる。窯体内の調査は原則として3号窯跡のみとしたが、この3号窯跡は、牛頸窯跡群特有の地下式多孔式煙道窯であることが確認されたほか、焼成途中の須恵器が一部原位置を保って出土した点や、燃焼部と排煙部で大規模な窯体改修の痕跡が観察された点など、重要な成果を上げることができた。また1・2号窯跡では灰原等で須恵器とともに瓦が出土しており、その出土状況から判断して2号窯跡は瓦陶兼業窯であった可能性が高い。土坑・ピットについては、現時点で須恵器生産との有機的な関係を確認できず、今後の検討課題となった。							

大野城市文化財調査報告書 第73集

牛頸小田浦窯跡群Ⅱ

平成19年3月31日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 大道印刷 株式会社
春日市日の出町6丁目23番地

